実践的な在野学の冒険

湘南科学史懇話会の歴史

猪野修治 編著

湘南科学史懇話会

第 80 回湘南科学史懇話会創立 20 周年記念講演：茅ヶ崎市勤労市民会館、2016 年 10 月 30 日（日）

実践的な在野学の冒険―湘南科学史懇話会の歴史

猪野修治（湘南科学史懇話会・代表）　〒242-0023 大和市渋谷3-4-1
TEL/FAX 046-269-8210 email shujiino@js6.so-net.ne.jp
湘南科学史懇話会 http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm

謝辞

湘南科学史懇話会に関わってくださったすべてのみなさまに感謝と御礼を申し上げます。

目次

第１部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅰ　前史（1969 年～1998 年）

Ⅱ　現代思想史研究会（東京、1996 年 3 月～1998 年 5 月）

Ⅲ　湘南科学史懇話会の全体像（藤沢、1998 年 5 月～2016 年 10 月）

■第 2 部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅰの各論

Ⅱの各論

Ⅲの各論

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129

■第１部

Ⅰ　前史（1969 年　～1998 年）

●1969 年 2 月 21 日（金）「東大闘争報告―2.21 日比谷公会堂労学市民連帯集会」（山本義隆氏の演説）
●1969 年 6 月　東京大学宇宙航空研究所を自主退職。
●1972 年 8 月　梅林宏道（物理学）・山口幸夫（同）の両氏との出会い（米軍基地相模原補給廠からの戦車阻止闘争）
●1980 年 9 月　山本義隆氏（物理学）との出会い（寺小屋教室）
●1981 年 4 月　西尾成子氏（物理学史）との出会い（国内留学）
●1981 年 10 月　佐々木力氏（数学史）との出会い

Ⅱ　現代思想史研究会（東京、1996 年 3 月～1998 年 5 月）

●第１回(1996/03/09)：佐々木力：「トロツキイの現代的意義」（東京都千代田区市ヶ谷）
●第２回(日時不明)：猪野修治「小倉金之助の数学者の回想」『小倉金之助全集』(勁草書房)
●第３回(日時不明)：板垣良一「ルーイス・パイエンソン『若きアインシュタイン―相対論の出現』（板垣良一・佐々木光俊・勝守真訳、共立出版、1988 年 10 月 10 日）」について
●第４回(日時不明)：猪野修治「山本義隆氏の物理学史研究について」

Ⅲ　湘南科学史懇話会の全体像(藤沢、1998 年 5 月～2016 年 10 月)

1998 年
●第 01 回(05/09)：中村邦光「江戸時代後期の東日本における「畑作中心地域（養蚕地域）」の農民の特性と“和算”文化」
●第 02 回(07/04)：廣政直彦「19 世紀後半のエディンバラ大学の科学・技術教育と明治日本への影響」
●第 03 回(09/15)：梶雅範「メンデレーエフと日本―海軍士官の息子による明治日本訪問」
●第 04 回(11/29)：岡部進「日本における「統計学」摂取時代の出来事―1860～１920 年代を中心に」

1999 年

●第 05 回（02/28）：笠松幸一「プラグマティズムの探求の理論」
●第 06 回(05/02)：笹本征男「ヒロシマの経験が、なぜ原発大国なのか？－原爆投下・米軍占領・ビキニ事件」
●第 07 回(07/04)：小松美彦「脳死・臓器移植の現在」
●第 08 回(09/04)：周程「陳独秀における科学と民主」
●第 09 回(11/23)：愼　蒼健「覇道に抗する王道としての医学―1930 年代朝鮮における東西医学論争から」

2000 年
●第 10 回(03/05)：吉田厚子「レザノフと帰還漂流民のもたらした地図・人物図」（あらため論考「ロシア使節レザノフの招待した『ロシア全図』の原図・訳図の研究」）
●第 11 回(05/14)：古川安「高分子化学の歴史」
●第 12 回(06/24)：清水宏幸「現代病と中医学」
●第 13 回(12/23)：佐々木力「新デンマークの国―『現代政治と科学技術』異聞」

2001 年
●第 14 回(02/11)：新戸雅章「わがテスラーエジソンを超えた発明家の真実」
●第 15 回(03/25)：望月たか子「心理療法からみた心とからだ―からだに働きかけて心を癒す」
●第 16 回(04/29)：里深文彦「21 世紀ヨーロッパの技術概念を考える―わがスェーデン・イギリス体験から」
●第 17 回(09/30)：金子　務「星はなぜ星の形☆か―ダヴィデの星と清明波紋―」

2002 年
●第 18 回(02/17)：ロバート・リケット/笹本征男/猪野修治「討論：日本の戦後民主主義とアメリカ」
●第 19 回(03/31)：廣野喜幸「科学技術・倫理・市民：科学者の社会的責任論―史的俯瞰序説」
●第 20 回(06/16)：林衛/朝川直樹「科学ジャーリズムと市民社会論」
●第 21 回(07/28)：アルノ・ナンタ「フランスにおける歴史否定論」
●第 22 回(09/22)：佐々木力「科学技術論再考―科学史家の堕落か？」
●第 23 回(11/22)：いいだもも「危機イデオロギーとしてのテクノロジー批判」
　　―佐々木力「「科学技術論再考―科学史家の堕落か？」を踏まえて―

2003 年
●第 24 回(03/21)：川崎　哲「平和 NGO の姿とチャレンジ」

●第 25 回(06/29)：猪野修治「小倉金之助と科学運動」、岡部進「小倉金之介の青春時代」、西尾成子「小倉金之助と石原純」
●第 26 回(07/26)：重松真由美「住民による調査学習の意義―川崎大気汚染測定運動の事例から」
●第 26 回（07/26）；中本正一朗「海洋生命は海洋環境を変えるか？－なぜ気候予測モデルに海洋生命過程が考慮されてこなかったかについての科学史的考察（その 1）
●第 27 回(09/14)：中本正一朗「海洋生命は海洋環境を変えるか？－なぜ気候予測モデルに海洋生命過程が考慮されてこなかったかについての科学史的考察（その 2）
●第 28(10/26)：唐木田健一「異なった価値観の間におけるコミュニケーションの方法」
●第 29 回(11/23)：中村邦光「科学の歴史からみた日本の近世―日本におけるアルキメデス的科学の萌芽と挫折」（中村邦光先生定年記念講演）

2004 年
●第 30 回(01/11)：佐々木力《近代科学史論》三部作完成記念シンポジウム。
●第 31 回(02/29)：西里扶甲子「生物戦部隊 731 を追って―証言者から受け継ぐもの―」
●第 32 回(03/20)：廣政直彦「江戸時代の自然観―安藤昌益と三浦梅園」
●第 33 回(05/02)：稲葉守「二宮尊徳の仕法とその哲学」
●第 34 回(07/04)：小寺明彦「楽しみながら社会を変革する生き方―理系人間がジャーナリストと名乗るまで」
●第 35 回(08/07)：齋藤光「変態＝hentai の記号誌について」
●第 36 回(11/03)：鈴木武雄「和算史研究の光と陰/ある異端者の軌跡」
●第 37 回(12/26)：桜井淳「やっと折り返し点（著作集刊行）を通過して」

2005 年
●第 38 回(03/20)：佐藤一「この辺で、戦後の神話を打ち破ろう」
●第 39 回(2005/04/30)：松本俊吉「進化論と人間の理解―進化と人間存在の偶然性」
●第 40 回(05/28)：右近修治「物理教育の発見」―ケンブリッジ「数学トライパス」と
●第 41 回(09/18)：矢島道子「ヒルゲンドルフ展をふるかえって―科学史研究は実践のなかにある」
●第 42(10/22)：豊崎博光「世界の核被害の現場から」
●第 43(11/20)：中村直文「占領下、靖国神社はなぜ存続したか」　中村氏は NHK 記者。

2006 年
●第 44 回(03/04)：安孫子誠也「アインシュタイン来日への道：桑木・田辺・西田・石原が果たした役割を中心に」
●第 45 回(05/07)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）

をめぐって。「今日における主体の危機と主体再生の展望について―メルロ・ポンティ、ミッシェル・フーコー、ポール・ネグりの提起」（パネラー：片桐薫・針生一郎）
●第 46 回(06/04)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「古典古代ギリシャ文明とは何であったのか？　その人類文明史的位置価（パネラー：近藤節也）
●第 47 回(07/02)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか？－線文字 B 文書の発見によるクレタ島文化とギリシャ文化の連続化ーそれによる人類文明の地中海世界史的連続性」（パネラー：三木亘）
●第 48 回(08/06)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「古代ローマ世界帝国の興隆と没落―ギボンの総括以来の〈古代ローマ興亡論〉の西洋世界史的意味―今日のパクス・アメリカーナの前途は？」（パネラー：なだいなだ、金子務）
●第 49 回(11/26)：月川和雄「プラントハンター、アマーリエ・ディートリッヒ」

2007 年
●第 50 回(01/14)：田辺好美「Lumumba―アフリカ現代史の殉教者」
●第 51 回(02/25)：片桐　薫「グラムシの科学論とグローバリゼーションの時代」
●第 52 回(03/25)：梅林宏道「サルトルと私の情報公開」

2011 年
●第 53 回(09/03)：近藤一彦「古典語を学んでみて」
●第54回(10/29)：竹中英俊「出版人としての37年の夢：書籍の過去、現在、未来」

2012年
●第55回(01/22)：常石敬一「覚醒の時」
●第56回(03/24)：アラン・チバン/田辺好美「コンゴ民主共和国―アフリカの闇の奥の奥の奥」
●第57回(04/21)：白石　征「遊行かぶきと、その周辺を語るー中世説経節、踊念仏について」
●第58回(08/05)：大滝忠則「国立国会図書館の最新事情」
●第59回(09/22)：金子　務「グラスゴー大学と明治日本」
●第60回(11/11)：井野博満「原発をめぐっての学者の責任を考える」

2013 年
●第 61 回(01/19)：金森　修「原発事故以降の日本の社会の対応についての私見―生命論と

社会哲学の観点から」
●第62回(04/20)：白石　征「前衛と抒情の語り部・・寺山修司の現風景」
●第63回(11/16)：坂野　徹「「辺境」を「フィールドワークする―宮本常一と九学会連合の初期調査をめぐって」
●第64回(09/14)：柴田耕太郎・堀千恵子・中村有以・菊池祥子「現代日本の翻訳出版事情最前線」
●第65回（11/16）：渡部　武「『天工開物』の書誌学的研究―三枝博音氏の研究継承の試み」

2014年
●第66回(02/08)：猪野修治「『安藤昌益全集』と東條栄喜氏の昌益研究40年」、竹中英俊「野間秀樹編『韓国・朝鮮の知を読む』について」・「16世紀末日本の活字印刷から福澤屋諭吉まで」、柳田尚也「西田幾多郎記念館を訪問して」
●第67回(03/02)：東條栄喜「安藤昌益の循環思想と自然概念」
●第68回（04/06）：竹中英俊「福澤諭吉の日本の近代出版」
●第 69 回(08/24)：須藤一實「我が人生をかけた画家：山内龍雄」
●第70回(10/04)：益田すみ子「木村駿吉の業績と生涯」

2015年
●第71回(01/11)：加納　誠「環境物理学の栄枯盛衰」
●第72回(03/14)：中野亜里「「戦後」40年のベトナム―「社会主義的市場経済」が直面する課題」
●第73回(06/06)：竹中英俊「中江丑吉―市塵の思考者について」
●第74回(10/24)：川村伸秀「「山口人類学―門前の小僧」の弁」
●第 75 回(12/05)：柿原　泰「放射線被曝の歴史を問い直す―広島・長崎の原爆調査から福島県「県民健康調査」への道筋

2016 年
●第 76 回(01/23)：水沢不二夫「戦前新聞・雑誌の発禁の事例報告―『湘友会誌』など
●第 77 回(03/27)：湯浅一郎「海の放射線汚染を考える一福島事態を文明と欲望を問い直す契機に」
●第 78 回(05/21)：林衛「東日本大震災・津波被災から何をみいだし、学べばよいのか一大川小学校の事例を中心に一」
●第 79 回(07/30)：山脇直司「経済学と実存主義から公共哲学、統合学、共生科学へ―我が知的遍歴ないし発展と普遍的課題」
●第 80 回(10/30)：猪野修治「実践的な在野学の冒険―湘南科学史懇話会の歴史」

■第２部（Ⅰ～Ⅲの各論）

Ⅰ　前史（1969 年 ～1998 年）

●1969 年 2 月 21 日（金）「東大闘争報告―2.21 日比谷公会堂労学市民連帯集会」（山本義隆氏の演説）

1969 年 2 月 21（金）のことである。日比谷公会堂で開催された「東大闘争報告―労学市民連帯集会」において、東京大学理学部大学院生（素粒子論専攻）で東大全共闘代表の山本氏は、のちに語り継がれる演説を行った。この演説で、東大闘争の出発点となった東大医学部の登録医制度や医療の帝国主義的再編などに鋭い分析を加え、東京大学の存在と現状を徹底的に批判し、安保・沖縄闘争に連帯することを表明した。私はこの歴史に残る演説を、数千人の聴衆で埋め尽くされた日比谷公会堂二階の中央最前列で聞いた。この演説は著者の『知性の叛乱』（1969）に収録されている。

出典：山本義隆『知性の叛乱』（前衛社、1969 年 6 月 15 日）PP.255-270.

●1969 年 6 月　東京大学宇宙航空研究所を自主退職。

当時の私は、東京大学宇宙航空研究所の材料科学研究室で研究助手のようなことをやっていた。同研究所の少なくとも私が所属していた研究室では、政治的には全く無風の状態で東大闘争など話題にすらならなかった。しかし、すぐ近くにある駒場や街頭で連日繰り広げられている同世代の運動に、私が揺さぶられるのは当然のことだった。将来は何らかの形でも身分が保証される同研究所で仕事をするつもりでいたので、いろいろと悩んだが、結局、上記の演説の影響や諸般の諸々の事情から、同年六月二六日に同研究所を自主退職し、完全に無職となった。さまざまな日雇の仕事をやり食いつないできた。いま振り返ると人生の大きな転換点だった。

●1972 年 8 月　梅林宏道（物理学）・山口幸夫（同）の両氏との出会い（米軍基地相模補給廠からの戦車阻止闘争）

1972 年 8 月、町田市に住んでいた私は、隣接する相模原市の米軍基地相模補給廠から南ベトナムへの戦車搬出阻止闘争に加わるようになり、毎日曜日は相模補給廠前の集会やデモに参加していた。自治体を巻き込んだ激しい闘争だった。この反米軍基地闘争は科学技術者の社会的責任の問題とも密接に関係していた。1973 年 7 月末から 1 ヶ月ほど、南ベトナムを含む東南アジア諸国を取材し、東京の反戦集会で「ベトナム現地報告」（筆名：山村

進）を行っている。1975 年 4 月 30 日、ベトナム戦争は終結した。

出典：ただの市民が戦車を止める会編『戦車の前に座り込め』（さがみ新聞労働組合、1979 年 2 月 1 日）

●1980 年 9 月　山本義隆氏（物理学）との出会い（寺小屋教室）

その一方で、若い時に、諸般の事情から、十分に勉強する機会に恵まれなかったこともあり、もろもろの学問にたいする飢えにも似た衝動的な欲求が湧き起こっていた。数年後の 1980 年 9 月、高田馬場にあった「寺小屋教室」で、著者が講師を務める勉強会（力学的世界の系譜）に参加することになった。これも大きな転換点となった。それ以来、自分で言うのも気が引けるが、水を得た魚のように、読書と思索の日々を送ることになった。とりわけ著者の膨大な書物の読み込みを通じた思索は、35 年以上にも及んでいる。その読書と思索は今日まで続き、私の精神生活を支える大きな指針となっている。

評論
・『知性の叛乱　東大解体まで』（前衛社、1969）
・東大全学助手共闘会議編『東大全共闘　われわれにとって東大闘争とは何か』渡辺眸撮影（三一書房、1969）
・68・69 を記録する会編『東大闘争資料集』全 28 巻（1992）
・『私の 1960 年代』（金曜日、2015）

物理学・科学史
・『重力と力学的世界　古典としての古典力学』（現代数学社、1981）
・『演習詳解　力学』江沢洋・中村孔一と共著（東京図書、1984、日本評論社、第 2 版　2011）
・『熱学思想の史的展開　熱とエントロピー』（現代数学社、1987）
・『熱学思想の史的展開　熱とエントロピー』全 3 巻（ちくま学芸文庫、2008-09）
・『古典力学の形成　ニュートンからラグランジュへ』（日本評論社、1997）
・『解析力学』１・Ⅱ　中村孔一と共著（朝倉書店、1998）
・『磁力と重力の発見』全 3 巻（みすず書房、2003）
・『十六世紀文化革命』全 2 巻（みすず書房、2007）
・『力学と微分方程式』（数学書房、2008）
・『世界の見方の転換』全 3 巻（みすず書房、2014）
・『原子・原子核・原子力』（岩波書店、2015）

翻訳・解説

・Ｅ．カッシーラー『アインシュタインの相対性理論』（山本義隆訳解説、河出書房新社、1976、新装版 1981）
・Ｅ．カッシーラー『実体概念と関数概念』（山本義隆訳解説、みすず書房、1979）
・Ｅ．カッシーラー『現代物理学における決定論と非決定論』（山本義隆訳解説、学術書房、1994）
・ニールス・ボーア『因果性と相補性』（山本義隆編訳、1999）
・ニールス・ボーア『量子力学の誕生』（山本義隆編訳、2000）
・『物理学者ランダウ―スターリン体制への叛逆』（佐々木力・山本義隆・桑野隆編訳、みすず書房、2004）
・仁科芳雄『仁科芳雄往復書簡集』1・２・３（山本義隆・岡村浩博　翻訳協力、みすず書房、2006-07）
・『科学革命の先駆者シモン・ステヴィン―不思議にして不思議にあらず』山本義隆監修/中澤聡訳、朝倉書店、2009）

大学受験参考書
・『大学入試必修物理』板間勇・谷藤祐と共著　上下（駿台文庫、1979-80）
・『物理入門』（駿台文庫、1987）
・『新・物理入門〈物理ＩＢ・Ⅱ〉』（駿台文庫、1997）
・新・物理入門問題演習〈物理ＩＢ・Ⅱ〉』（駿台文庫、1997）

●1981 年 4 月　西尾成子氏（物理学史）との出会い（国内留学）

1981 年 4 月、日本大学理工学部物理学科科学史研究室（西尾成子教授）のもとに国内留学する。留学といっても無料。それ以後、長きにわたり今日までお付き合いは続いている。

・西尾成子編『広重徹科学史論文集 1　相対論の形成』（みすず書房、1980 年）
・同『広重徹科学史論文集 2　原子構造論史』（みすず書房，1981 年）

当時上記の二冊の『広重徹科学史論集』が刊行され、西尾さんから寄贈され、集中的に読み勉強する日々が数年続き、1984 年頃には読了していたと思う。その後、広重の単行本はすべて読了する。この年は懸命に勉強したと思う。特に物理学史。

●1981 年 10 月　佐々木力氏（数学史）との出会い

プリンストン大学帰りの秀才が東京大学教養学部科学史科学哲学教室に就任したとの話を耳にした。宮城県出身の 2 歳だけ年少の気鋭の数学徒で数学史家。私は東北（山形）出身の純粋農家の四男坊で、同氏は同じ東北の宮城出身の大工の四男坊の境遇にあったことにも起因するが、その稀に見る秀才ぶりを体現する科学史論とその理論展開に関心を持つ。ひとつ、この人物の学問を同時並行で本気で学んでみようと思い始める。

Ⅱ　現代思想史研究会（東京、1996 年 3 月～1998 年 5 月）

●第 1 回(1996/03/09)：佐々木力：「トロツキイの現代的意義」（東京）

１．トロツキズムとの出会い：私的な思い出
２．日本のトロツキズム受容について
３．世界のトロツキズム運動の現段階
４．トロツキズムの原則
５．トロツキズムの現代的課題
６．『生きているトロツキイ』はいかに読まれるべきか？

注）講師（佐々木力）は数学史家。その数学史家が東大出版会からそれも異分野の「トロツキイ」の本を刊行したことに注目し、多大なる関心を持った。あわせて上記本を集中的に読むことになったが、とりわけ最初の『科学史的思考』には本当に感銘し、同氏の書物を読み続けることになる。

・佐々木力『科学史的思考』（お茶の水書房、1987 年）
・同『近代学問理念の誕生』（岩波書店、1992 年）
・同『科学革命の歴史構造』全２巻（岩波書店、1985 年、講談社学術文庫、1995 年）
・同『生きているトロツキー』（東京大学出版会、1996 年 2 月 5 日）

●第２回(日時不明)：猪野修治「小倉金之助の数学者の回想」（東京理科大学）

『数学者の回想』（河出書房、1950、65 歳）、『回想の半世紀』（『思想』1956/9、12、71 歳）あくまでの小倉の文章に忠実に再現し要約したもの。

１．幼年時代（1885-1902）　２．東京遊学時代(1902-1906)　３．不安の時期 1906-1911）４．東北帝国大学（仙台）の時代（1911-1917）　５．大阪時代の前期（1917-1927）　６．阪時代の後期（1928-1937）　７．暗い谷間（1937-1945）　８．戦後（1946-1962）

●第３回(日時不明)：板垣良一「ルーイス・パイエンソン『若きアインシュタイン―相対論の出現』（板垣良一・佐々木光俊・勝守真訳、共立出版、1988 年 10 月 10 日）について」（東京理科大学）

第 1 章　アインシュタインの教育―数学と自然法則
第 2 章　無謀な事業―アインシュタイン商会と 19 世紀終りのミュンヘンにおける電気工業
第 3 章　独立独歩の人―アインシュタイン世界観の社会的起源
第 4 章　ヘルマン・ミンコフスキーとアインシュタインの特殊相対性理論
第 5 章　数学の支配下の物理学―1905 年のゲッティゲン電子論ゼミナール
第 6 章　後期ヴィルヘルム期における相対論―数学と物理学との予定調和へのアピール
第 7 章　数学，教育，そして物理的実在へのゲッティゲン的アプローチ，1890～1914
第 8 章　相対論における物理的意味―マクス・プランクによる『物理学年報』の編集，1906 年から 1918 年
第 9 章　初期アインシュタインの共同的科学研究

●第４回(日時不明)：猪野修治「山本義隆氏の物理学史研究について」（東京理科大学）

・山本義隆『重力と力学的世界―古典としての古典力学』（現代数学社、1981 年 10 月）
・E・カッシーラー『アインシュタインの相対性理論』（訳、河出書房新社、1976 年 1 月）
・同『実体概念と関数概念』（訳解説、みすず書房、1979 年 2 月）

Ⅲ　湘南科学史懇話会の講師と実施内容（藤沢、1998 年 5 月～2016 年 10 月）

1998 年

●第 01 回(05/09)：中村邦光「江戸時代後期の東日本における「畑作中心地域（養蚕地域）」の農民の特性と“和算”文化」

江戸時代の日本には、その全期間を通じて「和算」と文化が存在していた。そして著者らの調査によると、江戸時代前期（17 世紀）における和算は「物理・実用的な問題」にかなりの関心を示しているのに対して、江戸時代中期（18 世紀）以降の和算は、物理的・実用的な事柄にはほとんど関心はもたれなくなり、「趣味的・娯楽的な性格」の文化に変質していった、ということが判明した。

ところで、江戸時代中期（18 世紀）以降、和算家の多くが数学を趣味や娯楽の対象にしていたとすれば、和算家たちはどのような生活基盤をもっていたのであろうか。特に、江戸時代後期に東日本（中部・関東・東北）の農村地帯に多くの和算家が活動していたことはよく知られていることである。和算家たちの生活を可能にし、またそれを受け入れた東日本の農村地帯には、いったいどのような背景があったのだろうか。

以上のような問題意識に基づいて、江戸時代後期の東日本における和算家の出身地および活動地域を調査してみることにした。そこで筆者は、はじめ越後平野や庄内平野などの稲作中心の穀倉地帯が和算家の出身地であり、また活動地域だったろうと予想した。穀倉地帯は「豊か」であるに違いないと思ったからである。とことが、調査の結果は当初の予想に反して、和算家たちの出身地および活動地域の多くは、稲作中心のいわゆる「穀倉地帯」ではなくて、山間地や山麓などの「養蚕地域」と重なっていることが判明した。

調査の結果を考察すると、以下のような「仮説」をたてることができる。

１．「稲作中心地域（穀倉地帯）と「畑作中心地域」－その本質的相違
２．江戸時代の百姓は貧困だったのか―「豊かさ（ゆとり）」の相対性
３．江戸時代後期（幕末）の和算家の特質―西洋科学の影響

注）中村邦光さんには懇話会を立ち上げる際、大変にお世話になった。記して感謝と御礼を申し上げます。

著書

・『科学と科学史の概説』八千代出版(1990)
・『物理科学の基礎』八千代出版(1990)
・『日本における科学研究の萌芽と挫折：近世日本科学史の謎解き』(板倉聖宣，中村邦光，板倉玲子、仮説社(1990)
・『科学論と科学史：現代の科学・技術の問題点を探る』弘学出版(1996)
・『日本における近代科学の形成過程』加賀出版(2001)
・『科学技術の歴史：人間社会の技術倫理を探る』(改訂版)(中村邦光,溝口元、旧弘学出版、2002)
・『江戸科学史話』創風社(2007)
・『世界科学史話（日本図書館協会選定図書)』創風社(2008)
・『科学技術の歴史：人間社会の技術倫理を探る』(改訂２版) 中村邦光,溝口元
(コーポレーション 2010)

●第 02 回(07/04)：廣政直彦「19 世紀後半のエディンバラ大学の科学・技術教育と明治日本への影響」

１．はじめに
２．幕末期の科学・技術教育
３．明治初期の科学・技術教育
４．専門教育への志向
５．イギリスの科学・技術教育の導入
６．まとめ

近代的な科学・技術の導入において、科学・技術教育が大きな役割を果たしたと考えられる。本報告では、幕末期から 1877（明治 10）年の東京大学の設立にいたるまでの、教育体系と教育機関、およびその教科内容の推移を概観しながら、幕末・明治期の科学・技術の導入の様相について述べる。その中で、特に、科学・技術教育において、イギリスの科学・技術教育が日本にどのような影響を与えたかについて明らかにしたい。（はじめに）

幕末期における幕府の科学・技術教育は、主として蕃所調所と長崎海軍伝習所で行われた。オランダ人教師によってなされた海軍伝習は、短期間に比較的大きな効果をおさめることができたが、日本人教官のみで行われた蕃所調所（後に開成所に改称）での科学・技術教育は、外国語教育の段階にとどまった。その理由の一つは、産業革命以降の近代的な科学・技術は高度に専門化して、書物の翻訳を通して習得することが困難になっていたからである。近代的な科学・技術教育には、近代的な教育体系が必要であった。

近代的な教育体系が導入されたのは、明治期になってからである。明治政府は、幕府の開成所を接収して開成学校を設置し、お雇い外国人を採用し、まず外国語教育を開始した。その後、科学・技術教育の基礎学として、数学や物理学が教育されるようになった。しかしそれは基礎学であり専門学ではなかった。

実務的な「人材の養成」を急ぐ、明治政府は、各省においてそれぞれ独自の教育機関を設け、人材養成に乗り出した。文部省も、「学制」をはじめとする諸制度を整備し、近代的な教育体系を計るとともに、専門学校を設置して専門学としての科学・技術教育を開始したのである。

そのとき導入されたのがイギリスの科学・技術教育であった。イギリスの科学・技術教育は、他のヨーロッパ諸国に比べて、決して進んでいるとはいえなかったが、逆にそれは結

果的には、科学・技術教育を急ぐ、当時の日本の状況には適していたといえる。イギリス人教師によってなされた科学・技術教育により、科学と技術の違いとそれらの間の密接な関係を確認することが可能になり、また科学の研究や技術の開発へと向かう出発点が与えられたのである。（おわりに）

注）廣政直彦さんには懇話会を立ち上げる際、大変にお世話になった。記して感謝と御礼を申し上げます。

著書

１.『教養のための技術論』東海大学出版会、1985 年（編集と第 3 章・第 4 章・第 5 章・第 10 章・付録 1 を執筆）
２.『原典科学史 ―近代から現代まで―』朝倉書店、1986 年（編集と第 3 章・第 4 章を執筆）
３.『洋学事始め ―幕末・維新期西洋文明の導入―』文化書房博文社、1993 年（第 4 章を執筆）
４.『知の近代を読み解く』東海大学出版会、2001 年（第 9 章を執筆）

論文

１.「統計力学史ノート」（『物理学史研究』Vol.8, No.2、1972 年、pp67-78）
２.「アインシュタインの初期の研究（1901～1905）」（『物理学史研究』Vol.9, No.2、1973 年、pp3-9）
３. 'Formation of the concept of the Gibbs ensemble' *XIVth International Congress of the History of Science Proceedings*, No.2, 1975.
４.「杉浦重剛の科学観（１）」（『東海大学文明研究所紀要』第 2 号、1981 年、pp19-26）
５.「杉浦重剛の科学観（２）」（『東海大学文明研究所紀要』第 3 号、1982 年、pp39-45）
６.「『数物学会記事』と他の学術論文誌」（『物理学史資料整理特別委員会報告』1984 年、pp40-48）
７.「物理学会所蔵資料の状況」（『物理学史ノート』第 1 号、1990 年、pp4-6）
８.「科学技術教育と学術用語の日本語化―電磁気に関する用語―」（科学研究費補助金研究成果報告書『西欧科学技術導入期における外来学術用語の日本語化過程の総合的研究』1994 年、pp35-43）
９.「環境と資源をめぐって」（『文明』第 78 号、1997 年、pp1-9）
１０.「18 世紀啓蒙思想と科学者ニュートン像の形成」（東海大学文明研究所 1995~1997 年度共同研究報告書『十八世紀精神史におけるニュートンの受容の問題』1997 年、pp3-10）
１１.「19 世紀後半のエディンバラ大学の科学・技術教育と明治日本への影響」（『湘南科学史懇話会通信』創刊号、1998 年、pp6-11

１２.「近世日本の医学にみる身体観」(『文明』第 83 号、2000 年、pp59-67)
１３.「ギブスアンサンブル概念の形成　1900 年代～1910 年代」(『総合教育センター紀要』第 26 号、2005 年、pp49-56)
１４.　「江戸時代の自然観－安藤昌益と三浦梅園－」(『湘南科学史懇話会通信』第 12 号、2005 年、pp12-19)

書評その他
１.「広重徹編『科学史のすすめ』(書評)」(『物理学史研究』Vol.7, No.1、1971 年、pp110-113)
２.「超量子のパースペクティヴ　アーサー・ケストラー（抄訳)」(『遊』工作社、1979 年、6 月、pp38-47)
３.「玉野井芳郎『科学文明の負荷―等身大の生活世界の発見』(図書紹介)」(『文明』第 56 号、1989 年、pp69-75)
４.「仁科芳雄年表」(『日本物理学会誌』第 45 巻第 9 号、1990 年、pp770-772)
５.「W. ウェード他『背信の科学者たち』(図書紹介)」(『文明』第 66 号、1993 年、pp103-110)
６.「R. ローズ『原子爆弾の誕生：科学と国際政治の世界史』(図書紹介)」(『日本物理学会誌』第 95 巻第 8 号、1994 年、p677)
７.「R. S. ウェストフォール『アイザック・ニュートン　Ⅰ・Ⅱ』(図書紹介)」(『文明』第 72 号、1995 年、pp71-81)
８.『科学史の事件簿』朝日新聞社、1995 年、pp83-93（ルートヴィヒ・ボルツマンの項を執筆)
９.『二十世紀の千人 第５巻 テクノ時代の創造者』朝日新聞社、1995 年（ヴィルヘルム・レントゲン、エルヴィン・シュレーディンガー、ジョン・フォン・ノイマンの項を執筆)
１０. 'Hideo Yoshikiawa and Joane Fauffman. Science has no National borders', (Books reviews *The British Journal for The History of Science*, Vol.28, No.98, 1995, pp368-369.)
１１.『年表（1877～1995）～歴史のなかの物理学会～』日本物理学会、1996 年
１２.「中山茂他『戦後科学技術の社会史』(書評)」(『科学史研究』第 35 巻第 197 号、1996 年、pp54-55)
１３.「西尾成子『こうして始まった２０世紀の物理学』(図書紹介)」(『日本物理学会誌』第 53 巻第 6 号、1998 年)
１４.「『久米邦武文書二　科学技術史関係』(図書紹介)」(『日本物理学会誌』第 55 巻第 8 号、2000 年、p632)
１５.「ジャン・ラディック『アインシュタイン、特殊相対論を横取りする』(図書紹介)」(『日本物理学会誌』第 61 巻第 6 号、2006 年、p446)
１６.「辻哲夫『日本の科学思想』(解説)」(こぶし書房、2013 年、pp226-249)
１７.「H. カーオ『20 世紀物理学史』(図書紹介)』」(『日本物理学会誌』第 71 巻第 8 号、

2016 年、p571）

●第 03 回(09/15)：梶雅範「メンデレーエフと日本―海軍士官の息子による明治日本訪問」

周期律発見で知られる 19 世紀ロシアの化学者ドミトリー・イヴァノヴィッチ・メンデレーエフ（1834-1907）には、海軍士官となり、明治時代の日本を訪問した息子がいた。息子はウラジミール（1865-98）といい、彼の日本訪問は、最後の皇帝ニコライ 2 世が皇太子時代に行った日本訪問（1891（明治 24）年）に随行してなされた。そのウラジミールには秀島タカなる女性とのあいだに、「おフジ」という娘がいた。ニコライ皇太子の日本訪問は次のようである。

（1）1891 年 4 月 17 日～4 月 27 日（9 日間）　上海からアゾフ記念号のみ先行して長崎着。

（2）1891 年 12 月 28 日～92 年 1 月 24 日（28 日間、長崎に停泊）

（3）日本海軍の「開軍大演習参観」のため来航；1892 年 4 月 12 日～5 月 10 日（29 日間）

（4）1892 年 7 月 18 日～25 日（8 日間）。以上のデータからウラジミールは、秀島タカと 1891 年の暮れか翌年の 4 月に知り合い長崎滞在の 1 ヶ月か 2 ヶ月をともに過ごし子供を設けた可能性が高い。おフジが生まれたのは 93 年 1 月であったことはほぼ確定される。現在、史料から言えることはここまで、である。

注）

・梶雅範『メンデレーエフの周期率発見』（北海道大学図書刊行会、1997 年、博士論文）

・ユーラシア研究所編、『情報便覧　現代のロシア』（「科学・技術」の章から「研究体制」と「自然科学」の節を担当）（大空社、1998）

・藤垣裕子編『科学技術社会論の技法』（東京大学出版会、2005）

・望月哲男編『創像都市ペテルブルグ―歴史・科学・文化』（北海道大学出版会、2007）

・『メンデレーエフ　元素の周期律の発見者』（東洋書店、2007）

・梶 雅範編『科学者ってなんだ?』（丸善株式会社、2007）

・梶 雅範・西條美紀・野原佳世子共編『科学技術コミュニケーション入門　科学・技術の現場と社会をつなぐ』（培風館、2009）

・吉村壽次編集代表 『化学辞典』第 2 版（森北出版、2009）

・金森修編著『昭和前期の科学思想史』（勁草書房、2011）

●第 04 回(11/29)：岡部進「日本における「統計学」摂取時代の出来事―1860～1 920 年代を中心に」

はじめに

いま、「統計学」（Statistics）とは、と問われたらどんな学問を連想するであろうか。次のような素朴な疑問を「統計学」に投げかけてみたい。

（1）「統計学」は数学分野か。“イエス”と答える人や“ノー”と答える人もいるだろう。しかし、両者とも正しい。それはなぜか。

（2）1920 年代中頃まで、統計学研究になぜ数学者は関わらなかったのか。その疑問は数学者小倉金之助（1885～1962）の活動を調べると解けるのはなぜか。

（3）統計教育研究母体の統計教育研究協議会（全国規模）の活動では社会科教員が主流なのはなぜか。

（4）統計学は学校教育に位置付けられているのか。

（5）“統計教育”と数学教育との関わりはどうか。

（6）大学受験用数学でなぜ「統計」分野は軽視されるのか

（7）「統計学」におけるソフトとハード

２．“Statistics”の訳語をめぐって

（1）「統計：という用語　（2）“Statistics”の訳語　（3）“Statistics”に関わる役所とその名称の変遷　（4）大学での“Statistics”科目の扱い方　（5）図書十進分類法での位置づけ（6）“Statistics”の訳語「統計」をめぐる論争

３．「国勢学」としての統計学その摂取と普及

（1）統計学の輸入経路をめぐって　（2）福澤諭吉他訳『萬國政表』（万延元（1860）年出版から）（3）杉亨ニが作成した「政表」から　（4）杉亨二と呉文聡（くれあやとし 1851-1918）の政表課での仕事　（5）呉文聡の『統計集誌』への関わり　（6）『統計集誌』の内容から　（7）呉文聡について：①家系　②呉文聡の生活史　③呉文聡の著作　④呉の統計学観及び統計観

４．家計調査に活路を生む統計学

藤沢利喜太郎（1861-1933）と生命保険、そして高野岩三郎（1871-1949）

５．国勢調査の実態（1920 年第１回）

６．統計学が数学分野に組み込まれたとき　（1）小倉金之介（1885-1962）の先駆的活動（2）日本統計学会総立(1931(昭和 6)年）時の数学者会員の氏名と数　（3）推測統計学の研究として数学者の関わり

７．統計学の発展―ヨーロッパの場合
（１）イギリス政治算術学派　（２）ドイツ国勢学―ドイツ流統計学の一つ、「官僚の学」「国家顕著事項についての学」（３）ケトレー（A.Quetelet 1796-1874）の登場　（４）ドイツ社会統計学派の成立

注）当日の講演は 3 時間にも及ぶ詳細な内容であった。大きな反響があった。岡部進さんには当時、数学教育や数学史のこと、特に小倉金之介の世界とその研究についてたくさんのことを教わり、大きな影響を受けた。私が小倉金之介の世界に入り込むことになったのはすべて、岡部さんの薫陶を受けたからである。重厚な小倉金之介論も書いておられ、小倉の「日常性の数学」や「生活者の数学」を具体的に実践されてきた。その実践的営みは、神奈川県立高校、芝浦工業大学、日本大学の講義でも一貫して実践されてきた。

この 10 年ほど前から、まさに普通の生活者の中に混じり、社会生活と数学の諸問題を多角的・多面的・総合的に語り合う場（フォーラム、東京）を開かれている。私が見るに、岡部さんは小倉金之介の学問を超えられた。深く学問的数学史を考慮した実践的な生活数学者である。たくさんの著書がある。世代を超えた多くのファンがいる。小田原市の出身で藤沢市在住。

著書
・『「生活数学」のすすめ』（ヨーコインターナショナル）
・『日常素材で数学する』（同）
・『算数・数学への疑問から』（同）
・『「洋算」摂取時代を見つめる―福澤・呉・藤澤・小倉に学ぶ』（同）
・『生活幾何へのステップアップ―形からの出発』（同）
・『ここにも生活数学』（同）
・『生活文化と数学』（同）
・『競（きそ）う現象と生活数学』（同）
・『まわりとくくりの数学』（同）
・『集めてはかる数学』（同）
・『好奇心のヒント　数値文化を考える』（同）

・『わかる算数と遠山啓　その批判的考察』（教育研究社、1981）
・『小倉金之介　その思想』（同、1983）
・『水道方式への疑問』（同、1984）
・『算数・数学教育の発想』（同、1985）

・『算数・数学教育はこれでいいのか』（同、1987）
・『高校生とまどいの数学的体験』（同、1989）
・『日常性の数学にめざめて』（同、1991）
・『日常性の数学』（同、1994）
・『学校数学はいらないのか』（同、1996）
・『学校数学のリアリズム』（同、1999）
・『学校数学のよさ（改訂版）』（マルエフコーポレーション、2005）
・『数学教育と学力問題（改訂版）』（マルエフコーポレーション、2005）
・『日常が見える学校数学』（マルエフコーポレーション、2005）

「小倉金之助の数学教育論の形成ー特に大正末期（１９２６年）までー」岡部進　日本数学教育会誌 第50巻 第9号（数学教育学論究）より（1968年9月　社団法人　日本数学教育会）

小倉金之助の数学教育論の形成ー特に『数学教育の根本問題』についてー岡部進　日本数学史学会誌　通巻４９号（1971年　日本数学史学会）

小倉金之助の数学論ー昭和初期の諸論文からー岡部進　日本数学史学会誌　通巻５０号（1971年　日本数学史学会）

小倉金之助の数学教育論の形成ー昭和初期の諸論文からー岡部進　日本数学史学会誌　通巻５１号（1971年　日本数学史学会）

「小倉金之助の数学教育論の形成と発展ー数学教育の史的研究をめぐってー」岡部進　日本数学教育学会誌 第55巻 第24号（数学教育学論究）より（1973年12月　社団法人　日本数学教育学会）

「数学者小倉金之助と現在」岡部進　日本科学史学会編集　科学史研究第Ⅱ期　第３４巻　NO.194　1995年夏(1995)　pp.139～142

「小倉金之助の数学教育改造運動」岡部進日本数学教育学会編　日本の算数・数学教育1996　２０世紀数学教育思想の流れ。産業図書　1997.1　pp.31～43

「小倉金之助の数学史研究と数学観の変革」岡部進　小倉金之助と現代ー彼の理論をどう生かすかー（小倉金之助生誕百年記念）より（1985年　教育研究社）

「小倉金之助と科学的精神」岡部進　小倉金之助と現代ー彼の理論をどう生かすかー第２集より（1986年教育研究社）

「小倉金之助と民衆のための数学」岡部進　小倉金之助と現代ー彼の理論をどう生かすかー第３集より（1987年　教育研究社）

「小倉金之助と”Statistics″ー『統計的研究法』成立前史」岡部進　小倉金之助と現代ー彼の理論をどう生かすかー第４集より（1988年　教育研究社）

「小倉金之助と計算図表学（ノモグラフィー）」岡部進　小倉金之助と現代ー彼の理論をどう生かすかー

第５集より（1993 年　教育研究社）

「呉文聰と統計活動」岡部進、日本大学工学部紀要第３７巻　分類Ｂ：一般教育編　（1996）PP. 137～151

「福澤諭吉と「スタチスチク」・・・校閲書『萬國政表』（万延元年・1860 年）を中心に・・・」岡部進
日本大学工学部紀要第３８巻　分類Ｂ：一般教育編　（1997）　pp. 1～15

1999 年

●第 05 回（02/28）：笠松幸一「プラグマティズムの探求の理論」

はじめに
１　パースの探求の理論
（１）疑念と信念
（２）　プラグマティズムの格率
（３）探求の三段階
２　デユーイの探求の理論
（１）探求の六段階
（２）探求の生物・社会的基礎
３　パースとデューイ・・・探求の理論の比較対照
結語―探求の理論と方法的意義（連続主義、可謬主義、相対主義）

・チャールス・サンダース・パース（Charles Sanders Peirce,1839-1914）年譜
・ジョン・デユーイ年譜（John Dewey,1859-1952）年譜

プラグマティズムの創始者 C.S.パースとその完成者 J.デューイの「探求の理論」に着目する。探求とは私たち行為者が、疑念（問題状況）から思考・信念を経て行動（実験・テスト）において検証し、信念の獲得（問題解決状況）に至る過程である。その探求過程にプラグマティズムの方法的意義（連続主義・相対主義・可謬主義等）を確認する。

Pragmatism とは、アメリカの哲学、あるいはアメリカの哲学運動であり、日本語では「行動主義」とか「実用主義」と訳出しており、最近ではそのまま外来語としてプラグマティズムと称している。プラグマティズム哲学は、パース（Charles Sanders Peirce,1839-1914）によって創唱され、ジェイムス（William James,1842-1910）によって世に広められ、ジョン・デユーイ（John Dewey,1859-1952）によって大成された哲学運動である。

その他のプラグマティストとしては G.H.ミード（1863-1931）や C.モリス（1901-1979）等がいる。そして近年、W.V.O.クワイン（1906-）、H.パトナム（1926-）、R.ローティ（1931-）等はネオ・プラグマティストを推進しつつある。

ここでの発表は古典的なプラグマティズムを担ったパースとデユーィの探求の理論に着目する。探求とは、端的に問題の解決をめざす精神的・身体的な努力ということができる。プアグマティズムには、他の哲学思想たとえばマルクス主義、実存主義、論理実証主義等々には見られない特有の「探求の理論」があり、これがプラグマティズムの特徴をなすものである。

周知のとおり、アメリカという国は開拓されてできた国であり、1620 年メイフラワー号に乗って来た 100 名ほどの清教徒たちが、現在のボストン北部プリマスの海岸に上陸し開発がスタートした。フロンティア・スピリット（frontier spirit、開拓者魂）がプラグマティズム生成の歴史的社会的条件ということになる。開拓者は、開拓途上の困難な問題を解決し、前（front）へ進んでいかねばならない。アメリカ人の愛好する国民的スポーツ、フットボールと野球が開拓者魂を象徴していよう。フットボールのゴールを目指す果敢な前進、また野球に見られる連帯的協同のプレイ、まさに前進のためには連帯し連帯するためには前進しなければならない。プラグマティズムの哲学は、生活上の問題の解決を目指して前進し連帯する行動の哲学でもある。（はじめに）

注）講師（笠松幸一）は哲学者。

●第 06 回(05/02)：笹本征男「ヒロシマの経験が、なぜ原発大国なのか？－原爆投下・米軍占領・ビキニ事件」

アジア太平洋戦争末期、アメリカが 1945 年 8 月 6 日に広島市、8 月 9 日には長崎に投下した原爆をめぐって、これまで多くのことが語られてきた。実戦におけるアメリカの原爆使用は人類の歴史で最初のことだったからである。この出来事から、私たちはどのようなことを学んできたのであろうか。「ヒロシマ・ナガサキの経験」というより普遍的な言葉が使われる。その経験を検証する。検証する期間は 1945 年 8 月 6 日・9 日のアメリカの原爆攻撃から、日本の敗戦、連合国軍による占領、日本の独立までの 7 年間である。

「Ⅰ]A 戦時の時代（1945 年 8 月 15 日まで）―アジア太平洋戦争とアメリカによる原爆攻撃　B 敗戦から降伏文書調印まで（1945 年 8 月 15 日から 9 月 2 日まで）―対米原爆情報戦―アメリカ占領軍の進駐に備えて　C 降伏文書調印、占領の開始（1945 年 9 月 2 日から）－アメリカ占領軍への全面協力、アメリカ軍の原爆調査、大調査プロジェクトの発足―国策にもとづく動員―だれのために？　D アメリカにおける戦後の変化　E 国立予防衛生研究所の設置と原爆調査協力の拠点　F 日本政府、「原爆傷害調査計画」を GHQ へ提出　G プレスコード神話　H「原爆加害国」になった日本

［Ⅱ］日本の独立、ビキニ事件（第５福竜丸事件）―日本の原子力平和利用とビキニ事件、

注）この講演は衝撃的だった。被爆国日本が「原爆加害国」となったと主張するのである。連合国（主要には米国）の日本占領期に日本政府の意を受けた主要な科学者が調査した被爆の詳細な実態が米国側に引きわたされていたことが明らかにされた。その笹本さんの研究に大きな社会的関心が向けられ、まず HHK 報道部が笹本の研究に注目し、それをもとに画期的な番組を作成し放映した。

私は、HNK との事前の打ち合わせの段階で同席している。こうして私は個人的に笹本を全面的に支援した。それが 10 年間も続いた。短期間ではあったが、これほど深い付き合いをした人物はいない。2010 年 3 月 20 日死去。

書籍

笹本征男『いずも: 詩集』(土曜美術社出版販売, 2005 年)
笹本征男『米軍占領下の原爆調査: 原爆加害国になった日本』(新幹社, 1995 年)

●論文など

・笹本征男「赤い屍体・黒い屍体・1945 年―画家・香月泰男の世界に触れて」『人民の力』第 912 号(2010 年 1 月 1・15 日)
・Yukuo SASAMOTO, "Korean Atomic Bomb Victims (Special Issue Beyond Differences: International Comparison on Nuclear Histories in Japan, Korea, and the United States)," *Historia Scientiarum*, **19-2**(2009): 160-169.
・笹本征男「原爆投下 62 年目を考える―問われるべき米国の原爆投下責任について」『市民の意見』第 103 号(2007 年 8 月 1 日)
・笹本征男「アメリカと靖国神社」中村直文・NHK 取材班『靖国―知られざる占領下の攻防』(日本放送出版協会, 2007 年 6 月): 259-331 頁
・笹本征男「日本軍・重慶戦略大爆撃を考える 日本国民に見えた重慶と見えなかった重慶(第 1 回) 日本国民に見えた重慶―大爆撃の「戦果」報道とは何か」『人民の力』第 853 号(2007 年 5 月): 17-19 頁
・笹本征男「ヒロシマ・ナガサキとヒトゲノム計画(2)」『市民科学』第 4・5 合併号(2007 年 5 月)
・笹本征男「ヒロシマ・ナガサキとヒトゲノム計画(1) 読売新聞記事「米国の被爆者調査 ゲノム研究に利用望まれる情報公開」を読んで―批判的検討」『市民科学』第 1 号(2007 年 1 月)
・笹本征男「朝鮮戦争と沖縄―『沖縄タイムス』を読んで(7) 休戦状態の朝鮮戦争と沖縄と日本」『人民の力』第 846 号(2007 年 1 月 1, 15 日): 43-45 頁
・笹本征男「朝鮮戦争と沖縄―『沖縄タイムス』を読んで(5) 米軍直属の琉球特別警察大隊の創設」『人民の力』第 844 号(2006 年 12 月 1 日): 25-27 頁

・笹本征男「ヒロシマ・ナガサキとヒトゲノム計画(1)」『月刊 市民科学』第 15 号(2006 年 11 月): 16-17 頁
・笹本征男「朝鮮戦争と沖縄―『沖縄タイムス』を読んで(4) 朝鮮戦争と米軍の基地建設（承前)」『人民の力』第 843 号(2006 年 11 月 15 日): 19-21 頁
・笹本征男「朝鮮戦争と沖縄―『沖縄タイムス』を読んで(3) 朝鮮戦争と米軍の基地建設」『人民の力』第 842 号(2006 年 11 月 1 日): 14-16 頁
・笹本征男「朝鮮戦争と沖縄―『沖縄タイムス』を読んで(2) 朝鮮戦争勃発直後の沖縄」『人民の力』第 841 号(2006 年 10 月 15 日): 23-26 頁
・笹本征男「朝鮮戦争と『国連軍』地位協定」大沼久夫編『朝鮮戦争と日本』(新幹社, 2006 年)
・笹本征男「韓国義勇軍人の再入国と日本人死傷者などについて」大沼久夫編『朝鮮戦争と日本』(新幹社, 2006 年)
・笹本征男「なぜ, 日本人は靖国神社を閉鎖できなかったのか―六十年前の靖国から」『軍縮問題資料』第 301 号(2005 年 12 月): 38-43 頁
・笹本征男「原爆加害国になった日本―米軍占領下の原爆調査から(3) 乳幼児・妊産婦をモルモットに, 日米共通の国益とは? (特集 核の世界を超える)」『季刊 軍縮地球市民』第 3 号(2005 年 12 月): 158-163 頁

●第 07 回(07/04)：小松美彦「脳死・臓器移植の現在」

現在、脳死・臓器移植の問題は急展開を呈し、臓器移植法施工後の臓器移植は 4 件実施されるなど（1999 年 7 月 4 日現在)、この歴史的事件に生命論・生命倫理学の立場から、多くの場面で批判的論陣を張ってきた小松さんは現在、睡眠をも削らざるを得ない多忙さのなか、湘南の地まで駆けつけてくださり、思い切った講演を行っていただいた（猪野：1999 年 8 月執筆)。

はじめに―A.ハクスレー『すばらしき新世界』（1932）
Ⅰ　脳死・臓器移植問題の基礎（脳死状態の生理学把握：植物状態との相違、脳死状態が生じるとき、脳死状態がクローズアップした訳、脳死状態の医学的定義、脳死判定基準の概略：深昏睡・自発呼吸の停止・瞳孔散大・脳幹反射の喪失・平坦脳波、以上 6 時間経過）

Ⅱ　脳死・臓器移植の問題性（脳死者からの臓器摘出＝殺人、脳死・臓器移植の思想そのものをめぐる問題、文明論的な問題：人体モノ化・無際限な生命操・欲望の拡散、第三世界をめぐる問題、脳死を死とすることのさらなる背景←ニューマニズム、脳死判定基準をめぐる問題：無呼吸テスト・十分条件ではない、脳低温療法の登場、術後生活をめぐる問

題）

Ⅲ　99.02.28 移植の問題点（医学的・法学的問題、報道の在り方の問題、和田移植との対比、原理的・文明論的問題）　Ⅳ　臓器移植の歴史（省略）　Ⅴ　おわりに（1999 年という新たな戦前と資本主義の現在）

参考資料

1.　小松美彦『死は共鳴する―脳死・臓器移植の深みへ』（勁草書房、1996）

2.　緊急インタビュー小松美彦氏にきく「脳死・臓器移植」問題『図書新聞』2430 号、1999 年 3 月 20 日）　下記はその内容

（１）現実に実施された「脳死・臓器移植」と脳死判定

（２）「臓器提供者」に転化した患者

（３）進行する死の合理化と医学・生理学的な死

（４）「人は死んではならない」と「共鳴する死」

（５）医療の近代化・合理化を軸に反転して保守と革新

（６）「自己決定権」再考の契機

注）講師（小松美彦）は生命論・生命倫理学者。現代の科学思想の論壇でもっとも発言している研究者である。長きにわたり、ことあるごとにご支援をいただいている。

編著書

・『死は共鳴する 脳死・臓器移植の深みへ』（勁草書房 1996）

・『黄昏の哲学 脳死臓器移植・原発・ダイオキシン』（河出書房新社 2000）

・『対論 人は死んではならない』（春秋社 2002）

・『脳死・臓器移植の本当の話』（PHP 新書 2004）

・『自己決定権は幻想である』（洋泉社 2004）

・『生権力の歴史 脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐって』（青土社　2012）

・『生を肯定する いのちの弁別にあらがうために』対談集（青土社、2013）

・『宗教と生命倫理』（共編）（ナカニシヤ出版叢書、 2005）

・『メタバイオエシックスの構築へ:生命倫理を問いなおす』（香川知晶共編 NTT 出版 2010）

・『いのちの選択：今、考えたい脳死・臓器移植』市野川容孝、田中智彦共編（岩波ブックレット 2010）

・『生を肯定する―いのちの弁別にあらがうために』（青土社、2013）

・『生命倫理の源流 戦後日本社会とバイオエシックス』香川知晶共編　（岩波書店 2014）

●第 08 回(09/04)：周程「陳独秀における科学と民主」

はじめに―陳独秀の生涯
Ⅰ　陳独秀における啓蒙理念の形成
　1「立国」から「立人」へ
　2「民主」と「科学」というスローガンの提起
Ⅱ　進化論をもって「デモクラシー」を提唱する
　1　儒教倫理と「デモクラシー」との拮抗
　2　進化論の理解と援用
Ⅲ「サイエンス」をもって宗教と迷信を批判する。
　1　伝統的宗教の批判
　2 蒙昧主義批判の精神的武器としての「サイエンス」
むすび―その後の陳独秀。

陳独秀は、本名は乾生、字は仲甫などであり、1879 年 10 月安徽省の南部、揚子江の北岸に近い懐寧県に地主の次男として生まれました。彼は早くから父を失い、中国東北地方にある奉天（瀋陽）の知府の肩書を持つ叔父の養子になった。六歳から祖父の激しいしつけのもとで四書五経などの勉強を始めた。1896 年科挙の県試に合格し秀才になった。

1897 年から康有為、梁啓超の改革派に転向し、杭州の球是学院に入学してフランス語と造船工学を学び、1901 年来日して東京高等師範学校速成科に入学した。

辛亥革命後、安徽高等学校教務長、省都督府顧問に任ぜられた。革命失敗後、日本に亡命し、『甲寅雑誌』の編集に参加した。1915 年帰国、『新青年』を創刊し、新文化運動を展開した。1917 年蔡元倍に招かれ北京大学教授、文科学長（文学部長）になり、その後李大釗、胡適、魯迅などと同人を結成し、『新青年』を拠点に精力的に近代科学と民主思想を唱えていた。

1919 年五四運動が勃発した後、北洋軍閥政府に逮捕された。出獄後、上海に移った。そこで地下運動を続けていた内に、コミュンテルンの代表と会見し、これらの協力を得て 1921 年中国共産党を創立し初代総書記になった。

1927 年第一次国共合作が崩壊し、共産党が蒋介石に追いだされてしまった。その責任が陳独秀の右翼日和見主義に帰せられ、総書記の職を罷免された。1929 年スターリンへの反発からトロキズムに転じたので、共産党中央に除名された。

1931 年トロキスト統一大会で総書記に当選した。翌年上海の租界で国民党政府に逮捕され、1937 年日中戦争が始まってまもなく、南京で釈放された。それから、武漢、重慶に移り、中国ロトキスト中央と一定の距離を置き、全民族一致抗日、中国の民主化を呼びかけた。1942 年 5 月重慶市の江津県で亡くなった。

1897 年の「揚子江形勢論略」を始め、一生に 800 編以上の論著を書いたが、これらはバラバラの形で残っていて、一貫した思想体系の書としてまとめられていないことは、残念なことだと言える。(はじめに)

注）周程さんは当時、東京大学総合文化研究科博士課程におられた。当日の講演では長いレジュメ原稿の全文を周さんならでの大きな声で読まれていたことを思い出す。本講演で考察対象となった中国の思想家・陳独秀と日本の思想家・福澤諭吉を比較研究し、博士論文を完成させ学位を得られた。

周さんとは来日当初から何度か交流し、わが自宅にも娘さんをお連れになりお出かけいただいたことがある。北京で国際科学史学会に参加した際、会場でお目にかかれるかと思っていたが、お姿が見えなかった。その理由はいろいろなことがあると推察するが、ここではさしひかえる。せっかくの機会であったがとても残念な思いをしたことがある。現在は北京大学教授。

ともかく、周さんの著書『福澤諭吉と陳独秀―東アジア近代科学啓蒙思想の黎明』（東京大学出版会、2010 年 3 月 10 日）を通じて、福澤と陳について、あらためて勉強したしだい。

北京大学哲学系教授周程の日本語著作リスト

1. 周程.「科学」の中日源流考.《思想》(日本岩波书店)No.1046,pp.112-136. 2011 年 6 月.
2. 周程.学問体系における『脱亜論』――福沢諭吉の儒教批判の論理,日本法政大学国際日本学研究所編.国際日本学研究叢書 11:異文化としての日本――内外の視点（東京：法政大学国際日本学研究センター，2010 年 3 月）収，pp.71-96.
3. 周程.福沢諭吉における啓蒙理念の形成,《哲学・科学史論叢》No. 12,pp.27-66.2010 年 1 月.
4. 周程.1920 年代中国における「科学と衒学論争」――陳独秀の科学観をめぐって,*UTCP BULLETIN* Vol. 6,2006.pp.15-36.2006,09.
5. 周程. 福泽谕吉科学启蒙思想的展开,《哲学・科学史論叢》No. 2, pp. 73-103. 2000 年 1 月.
6. 周程. 陈独秀的“民主”与“科学”――以五四新文化运动时期为中心,《思想》(日本岩波书店)No. 905, pp. 38-64. 1999 年 11 月.
7. 周程.福泽谕吉的科学概念――以“穷理学”、“物理学”、“数理学”为中心,《科学史研究》（日本科学史学会）Vol. 38No. 211, pp. 154-164. 1999 年 9 月.《福泽谕吉年鉴》（日本福泽谕吉协会）No. 27 全文转载, pp. 93-111. 2000 年 12 月.
8. 周程著. 福澤諭吉と陳独秀:東アジア近代科学啓蒙思想の黎明. 東京：東京大学出版会, 2010 年.

●第 9 回(11/23)：愼　蒼健「覇道に抗する王道としての医学―1930 年代朝鮮における東西医学論争から」

１．はじめに（本論考の試み：日本植民地時代の朝鮮医学の様相、植民地近代化論への反論、大韓帝国期と植民地期の断絶、朝鮮医療制度は日本隣国（ドイツ医療を受容）とは全く異なる対応、保護国期と植民地期の保険医療制度、植民地側の言説分析は主題とはならない、朝鮮総督府の医学・医療政策に朝鮮人医学者はどう対応したか、1930 年代東西医学論争、趙憲泳の経歴と趙憲泳における政治・医学の儒教的精神の連続性（民衆救済）、なぜ民衆救済に洋医ではなく漢医を選択したのか？）

２．東西医学論争の背景と争点（植民地下の漢医学、1930 年代の時代状況、東西医学論争の一般的経過）　３．趙憲泳の医学思想（東西医学の比較、漢医学の科学化、趙の文明史観と「新しい時代の医学」、東と西/そして日本、「民衆医術化」構想）　４．おわりに（普遍主義に対する「弱者」の対応＝抵抗、新しい普遍主義＝総合医療で対抗、「中西医結合医療」の萌芽？　趙憲泳の模索に共鳴する朝鮮人西医たち、王道主義を実践する民衆医は植民地支配を正当化するイデオロギーに抵抗する主体の創出、儒教的な「仁」は政治・医学・医術に貫通する普遍的道徳と民衆医療構想は総督府「仁政」イデオロギーに真っ向から抗する医学思想であった、　1930 年代の朝鮮科学思想の特徴は民衆が主体となった技術・医術思想の登場）

注１）上記は本講演のレジュメだが、『思想』1999 年 11 月号に整理された論考として掲載されている。目次は下記。

一　はじめに
二　東西医学論争の背景と争点
　１　植民地下の漢医学
　２　1930 年代の時代状況
　３　東西医学論争の一般的経緯
三　趙憲泳の医学思想
　１　東西医学の比較
　２　漢医学の科学化
　３　趙の文明史観と「新しい時代の医学」
　４　東と西/そして日本
　５　「民衆医術化」構想

四　おわりに

注）愼さんに講演をお願いしてからもう 17 年の年月が経過した。その後の愼さんの仕事（著作）は以下のようである（全部ではない）。いろいろ感慨深い。

著作
・『ESSAY ON THE HISTORY OF SCIENTIFIC THOUGHT IN MODRRN JAPAN』共著（出版文化産業振興財団、2016）
・『帝国を調べる：植民地フィールドワークの科学史』共著（勁草書房、2016）
・『科学・技術・倫理百科事典』共著（丸善出版、2012）
・『昭和前期の科学思想史』共著（勁草書房、2011）
・『帝国の視覚/視角』共編著（青弓社、2010）
・『朝鮮近代科学技術史研究』共著（皓星社、2010）
・『科学技術社会史（中国語）』共著（遼寧科学技術出版社、2008）
・『植民地朝鮮における東洋医学と西洋医学の相克―その制度的側面と知的側面の考察』単著（科学研究費補助金研究成果報告書、2008）
・『韓国史論 42　韓国近現代科学史の展開（韓国語）』共著（国史編纂委員会、2005）
・『叢書[倫理学のフロンティア]　宗教と生命倫理』共著（ナカニシア出版、2005）
・『20 世紀を生きた朝鮮人』共著（大和書房、1998）
・『岩波：哲学・思想事典』（岩波書店、1993）
・『20 世紀のメディア 3　マルチメディアの諸相とメディアポリティクス』共著（ジャストシステム、1990）
・『朝鮮人物事典』共著（大和書房、1994）
・『岩波講座：現代思想 13　テクノロジーの思想』共著（岩波書店、1994）

2000 年

●第 10 回(03/05)：吉田厚子「レザノフと帰還漂流民のもたらした地図・人物図」（あらため論稿「ロシア使節レザノフの招待した『ロシア全図』の原図・訳図の研究」）

　はじめに
１　『ロシア全図』授受の経緯
２　原図について
３　写図・訳図について
４　結語

文化元年（1804）9 月 6 日、長崎港にロシア提督クルーゼンシュテルン（I.F.Kruzenshtern, 1770-1846)の率いる世界周航帆船ナデジュダ号が出現した。この帆船には、遣日使節レザノフ（N.P.Rezanov. 1764-1807）が搭乗していた。レザノフは、仙台漂流民津太夫ら 4 人の送還を目的としていたが、真の来航のねらいは、通商の樹立を求めることにあった。この時レザノフは、10 年ほど前の寛政 5 年（1793）に、松前で遣日使節ラクスマン（A.K.Laksman.1766-?）に公布された貿易許可書（信牌）をもっていたのである。折しもロシアの特権的な露米会社は、アメリカ北西岸で仕入れた毛布を広東で売却し、莫大な利益を獲得するための貿易路を開発する必要があった。

そのため北太平洋植民地への食料や日用品等の供給が不可欠となり、日本との通商樹立が優先課題となっていた。交易・通商を求めての来航とはいえ、いわゆる「鎖国」下の幕府にとっては、ロシアの南下と日本への接触は大きな脅威で、北辺およびロシア情報の収集が緊要となった。当時はロシアのみならず、イギリス、アメリカなども日本近海に艦船を出没させており、我が国は激しい国際情勢下におかれることになったのである。

本稿で焦点を当てる『ロシア全図』は、前述の如き背景のもとにレザノフが将来したもので、当時としてはまさしく稀覯の地図であった。それだけに本図は蘭学者や為政者達からも関心が寄せられ、写図や訳図として複製された。したがって、ロシアで作成された一地図に関する本研究は、19 世紀初頭における我が国の世界地図史研究の一環をなすものである。本稿では当面の目的として、20 年来本図を注目してきた筆者が、先行研究で未だしっかりと解明されていない原図の比定を確定し、写図・訳図の現存状況と系統を分類して、本図が当時の日本でどのように受容されたものなのかを探求することをねらいとしたい。また更には、当時の『ロシア全図』をめぐる一連の複製作業や研究が、我が国の世界地図史研究において、どのような意義を有していたのか、その位置付けを行ってみたい。（はじめに）

（注）当時配布された資料が見当たらないため、後日講師（吉田厚子）が発表した論文を最近、お送りいただき、冒頭部分（はじめに）と項目だけを掲載した。吉田さんには記して感謝する。とても懐かしい。

論文

・「間重富『魯西亜国地図訳例』の研究」（『東海大学総合教育センター紀要』第３０号、P. 81-91、２０１０年３月）

・「ロシア使節レザノフの将来した『ロシア全図』の原図・訳図の研究」（『東海大学総合教育センター紀要』第２９号、P. 37-57、折込図３枚、２００９年３月）

・「桂川甫周製作の地球儀について」（『東海大学総合教育センター紀要』第２６号、P. 1-23、２００６年３月

・「地図（第１章・４）」（『科学技術（日中文化交流史叢書【８】）』大修館書店、P. 111-135、１９９８年３月
・「近世の北方情報と地理画の発達―幕府の北辺地図・世界地図編纂を通して―」（『近世日本の海外情報』岩田書院、P. 191-207、１９９７年５月

●第 11 回(05/14)：古川安「高分子化学の歴史」

はじめに：一昨年刊行したばかりの下記の博士論文についての概要。Yasu Furukawa, *Inventing Polymer Science: Staudinger, Carothers, and Emergence of Macromolecular Chemistry* (Philadelphia: University of Pennsylvania,1998).310pp.　（博士論文）

１．Inventing Polymer Science ができるまで（アメリカ留学、博士論文、新たな研究へ向けて、ペンシルヴェニア大学出版局との出会い、帰国から出版まで）
２．本書の狙いと構成（高分子をめぐる２つの研究伝統：有機構造派と物理学派、高分子化学の政治的次元、高分子研究と産業の相互作用）
３．高分子化学について
４．社会史風概説（前史、シュタウンデインガー、ハーバーとの毒ガス論争、高分子説の提起、フライブルク大学への転任、デュッセルドルフの高分子論争（1926 年）、カローザス、２つのエートス、デュポン社基礎研究所プログラム、ナイロン・ジレンマ・カローザスの死、理論と実践のはざまで、ふたたびシュタウディンガー、ナチスの台頭とハイデガーの圧迫、ナチ科学者との対決、科学論争の政治的文脈）

注）この講演はオクホマ大学大学院留学（29 歳）から上記の博士論文の内容とそれを完成させるまでの学問遍歴の物語。なお、古川安さん（科学史、日本大学資源科学部）は現在、京都学派の３人の著名な日本人化学者に関する重厚な評伝を執筆中です。おそらく化学史の世界のみならず思想界で大きな反響を呼ぶことでしょう。いずれ、刊行されたら詳しく紹介します。

著書：
・Yasu Furukawa, *Inventing Polymer Science: Staudinger, Carothers, and Emergence of Macromolecular Chemistry* (Philadelphia: University of Pennsylvania,1998).310pp.（博士論文）
・古川　安『科学の社会史―ルネサンスから 20 世紀まで』（南窓社、1989 初版、2000 増訂版）。本書は科学史の標準的な教科書。
・吉本秀之他編『科学と国家と宗教』（平凡社、1995）.

・Yasu Furukawa、2003 年 2 月、429-445、*The Cambridge History of Science*, vol.V: *The Modern Physical and Mathematical Sciences*, in Mary Jo Nye (ed.), 678pp.、Cambridge University Press.
・Yasu Furukawa、2001 年 3 月、228-245、*Chemical Sciences in the 20th Century: Bridging Boundaries*、Carsten Reinhardt (ed.), 281pp., Wiley-VCH.
・Yasu Furukawa, 2008 年 1 月、47-50, *New Dictionary of Scientific Biography*, Vol. 2, N. Koertige (ed.)、433pp., Charles Scribner's Sons.
・Yasu Furukawa, 2008 年 1 月、330-335, *New Dictionary of Scientific Biography*, Vol. 6, N. Koertige (ed.)、576pp., Charles Scribner's Sons.
・Yasu Furukawa, 2016 年 3 月、138-143、*Transformation of Chemistry from the 1920s to the 1930s*, Yasu Furukawa, et. al (eds), 203 pp., Japanese Society for the History of Chemistry.

●第 12 回(06/24)：清水宏幸「現代病と中医学」

はじめに：中西医結合は中国衛生行政の重要な環節である。中国ではそれは祖国独持の伝統医学と西洋医学が一定の歴史的条件の下で結びつき発展し、すぐれた特徴をもつに至った。
Ⅰ　中西医結合発展の略史
Ⅱ　中西医結合の相互浸透
Ⅲ　中西医結合の実験研究の段階
Ⅳ　中西医結合の実験研究の基本原則
　1. 中西医結合研究の思想的基礎　2.中医学の基本特徴を堅持する　3.継承と発展の関係を明確に処理すべきこと　4.実践の過程において中西医結合研究を推進する
Ⅴ　免疫指標と中西医結合研究
Ⅵ　病、証、薬を結合法の提起と意義
Ⅶ　病、証、薬結合研究の意義
Ⅷ　悪性腫瘍に対する中西医結合医療
1.中医薬と手術療法の結合　2.中医薬と放射線治療の結合　3. 中医薬と化学療法の結合
Ⅸ　悪性腫瘍の中医薬治療（具体例）
Ⅹ　結びにかえて

注）講師（清水宏幸）は仙台市の中西医結合医療の医師。清水宏幸「中西医結合医療の理論」『科学』800 号（岩波書店、1999 年 3 月）

●第 13 回(12/23)：佐々木力「新デンマークの国―『現代政治と科学技術』異聞」

2001 年

●第 14 回(02/11)：新戸雅章「わがテスラーエジソンを超えた発明家の真実」

はじめに：二コラ・テスラとはなにものか
・バルカンの神童
・「世界システム」の夢・
・栄光と挫折
・テスラの奇妙な精神生活
・晩年とテスラ伝説。

注）講師（新戸雅章）は作家で二コラ・テスラ研究所長。
著書
・『知られざる天才ニコラ・テスラ――エジソンが恐れた発明家』（平凡社新書、2015 年）
・『天才の発想力』（ソフトバンク・クリエイティブ、2008 年）
・『テスラー発明的創造力の謎』（工学社、2002 年）
・『逆立ちしたフランケンシュタイン』（筑摩書房、1999 年）
・『バベッジのコンピュータ』（筑摩書房、1996 年）
・『ニコラ・テスラ未来伝説』（マガジンハウス、1996 年）
・『情報の天才たち』（光栄、1993 年）
・『超人ニコラ・テスラ』（筑摩書房、1993 年）
・『小説・大航海時代』（光栄、1991 年）
・『発明皇帝の遺産』（祥伝社、1989 年）
・『湘南ドラゴン伝説Ⅰ～Ⅳ』（角川書店、1988～89 年）

●第 15 回(03/25)：望月たか子「心理療法からみた心とからだ―からだに働きかけて心を癒す」

はじめに：M.ブンゲ『精神の本性について―科学と哲学の接点―』（黒崎宏・米沢克夫譯、産業図書、1982 年）について。
１．身体に働きかけて身体に言及したフロイト
２．身体に働きかけて行動を正した行動療法
３．行動に働きかけて心身を正した森田療法

４．身体に働きあけて心を癒す動作療法
５．結び

『自律の時代の仕事・組織・人間』（東海大学出版会、1999）・『作業経過の心理学−ブロッキングによる方略と調節の過程−』（東海大学出版会、1985）

注）講師（望月たか子）は心理学者。

●第 16 回(04/29)：里深文彦「21 世紀ヨーロッパの技術概念を考えるーわがスェーデン・イギリス体験から」

はじめに（序章）:「労働」の捉えなおしと、「仕事」の発見―ものづくりの歴史を検証する。
第１章：「社会的に有用な労働」とは？―イギリス、「ルーカス」の目指したもの
第２章：「労働の人間化」とは？―スウェ―デン、「ボルボ自動車工場」における労働編成
第３章：「１．５人」前の労働とは？－オランダ、「パートタイム」と「ワークシェリング」
終章：グローバルに考え、ローカルに生きるーヨーロッパ、アメリカ、日本の「エコマネー」の実験

注）講師（里深文彦）は科学史家。1960 年代から 1970 年代にかけ活動家として著名だった。科学と社会に関する広範な諸活動を展開し、西洋諸国のエネルギー・環境運動の実態を研究し、オルタナティヴなテクノロジーを紹介した。また国際派の科学技術史家としても活躍した。大和市の近隣に住んでいた関係で我家にもたびたび訪ねてくださり懇談した。しかし突然の脳幹破裂により一晩で急死した。御本人も死を自覚する時間はなかった。
偲ぶ会にも出た。さぞかし無念であったろう。

編著作
・『等身大の科学 80 年代科学技術への構想』日本ブリタニカ 1980
・『人類の知的遺産 80 現代の自然科学者』講談社 1984
・『転換期の技術社会 アジア・欧米最新科学事情』石田パンリサーチ出版局 1989
・『21 世紀ヨーロッパの技術戦略 周縁から中心へ』現代書館 2001
・『人間的な産業の復活 ヨーロッパ型経営のモラル』2002 丸善ライブラリー
・『国際環境を読む 50 のキーワード』東京書籍 2004
・『共生する科学技術 自然・人間・社会』コロナ社 2006
・『現代の科学・技術論』中村禎里共編 三一書房 1972
・『ニューサイエンス入門 現代科学のキーワード』編著 洋泉社 1986

・『科学技術の生態学 国際化時代の生産技術の展開と労働』林武共編著　アグネ承風社 1993
・『民具の文化史』諸岡青人共著　アグネ承風社 1996
・『甦るらせん水車 マイクロ水力発電への可能性を探る』瀧本裕士共著　パワー社 2010
・H.&S.ローズ 編『ラディカル・サイエンス 危機における科学の政治学』共訳　社会思想社 1980
・シアン・マーフィーほか『生物化学戦争 悪夢のシナリオ』綿貫礼子共訳　社会思想社・現代教養文庫 1985
・カークパトリック・セール『ヒューマンスケール 巨大国家の崩壊と再生の道』講談社 1987
・D. ディクソン『戦後アメリカと科学政策 科学超大国の政治構造』監訳　同文館出版 1988
・マイク・クーリー『人間復興のテクノロジー コンピュータ化時代を生きる倫理』監訳　御茶の水書房 1989
・スサンタ・グナティカラ『自立するアジアの科学 「第三世界意識」からの解放』東玲子共訳　御茶の水書房 1990J.H.
・ブルック 他『創造と進化』鈴木善次共訳　すぐ書房　2006

●第 17 回(09/30)：金子　務「星はなぜ星の形☆か―ダヴィデの星と清明波紋―」

概論：なぜわれわれは星を星型五角形に描くようになったのか、という問題である。
・星の表現のさまざま
・星座と神話―星の一般表現前史
・西欧におけるダヴィデの星の表現
・科学的表現の出現
・わが国における表現の変遷

星型五角形☆と星型六角形は、角の数が五つと五つと一つ違う図形記号であるが、その文化的機能は大いに異なる。拙稿「型と呪の象徴図形―ダヴィデの楯と清明判紋」や「星型多角形の文化と受容―聖と呪の象徴図形再論」で書いたように、星型多角形のうち安倍清明判紋あるいは清明桔梗で知られる星型五角形、すなわちペンタグラム（pentagram）は、洋の東西を問わず呪符（talisman）の記号とされる。

わが国では平安時代にいた陰陽・推参・天文の大家、安倍清明が始めた印とされる。すでに古代バビロニアにおいてこの図形的性質はよく知られ、ピュタゴラスに影響を与えて、

「ピュタゴラスの五茫星」ともいわれた。またキリスト教徒の間では「ソロモンの封印」と呼ぶこともしばしばあったようである。それはキリスト教建築の石工たちが、ときにこの印を石柱に刻んだためであろう。石工の霊能ぶりがソロモンの知恵と結びつくのはたやすいことである。自由な石工たちの結びつきを示すフリーメイソンという秘密結社の記章になるのも、ここに理由がある。こういった流れから、日本の安倍清明判紋が孤立しているはずはなく、シルクロードを通して洋の東西の影響下あったか、再解釈されたかと見るのが自然である。

もう一つの、二つの正三角形を生逆にして組み合わせた星型六角形はユダヤ＝キリスト教世界では「ダヴィデの盾」（Magen David）ともいわれてきた。ユダヤ人にとっては、現在の国旗につながるダヴィデの盾は晴れやかで聖なる星型六角形である。ゲーテの描くファウストは、精神を集中してこのマクロコスモスの記号、すなわち星形六角形を凝視することによって、宇宙の充満性と調和を感得する。それはヘルダーが讃えたように、神が明かしたコスモスの記号であり、永遠の真で、すべての知識、すべての宗教もその起源をこの記号にもつとされた。この図形記号一個がすべての哲学者の言説よりも価値あるものなのである（以下略）。

参考文献

・金子　務「聖と呪の象徴図形―ダヴィデの盾と清明判紋」『形の文化誌』第 4 号（1996 年）PP.80-90
・金子　務「星形多角形の文化と受容―聖と呪の象徴図形再論」『同上』第 6 号（1999 年）PP.334-345
・金子　務「星はなぜ星型か」『同上』第 9 号（2002 年）

注）講師（金子務）は科学史家。著書は以下。

『私たちの世界動物記 3 ゴリラ』 三十書房 1963

『廃物を科学する 大量消費時代への挑戦』早川書房 1965

『宇宙からの声がきこえる 異星間通信と宇宙文明』 大日本図書 1977.

『アインシュタイン・ショック』河出書房新社 1981 のち岩波現代文庫

『思考実験とはなにか その役割と構造を探る』 講談社 1986. 3

『科学技術をどう読むか 文科系人間のための 100 冊』マネジメント社 1987

『アインシュタインはなぜアインシュタインになったのか』1990.4（平凡社・自然叢書）

『ガリレオたちの仕事場 西欧科学文化の航図』筑摩書房 1991.8（ちくまライブラリー）

『さらばアリストテレス エピソード科学史異聞』1993.4（平凡社・自然叢書）

『宇宙観の歴史と人間』 放送大学 1995

『アインシュタイン劇場』青土社 1996

『宇宙像の変遷と人間』放送大学 2000

『ジパング江戸科学史散歩』 河出書房新社 2002

『江戸人物科学史 もう一つの文明開化」を訪ねて 2005.12（中公新書）

『オルデンバーグ 十七世紀科学・情報革命の演出者』2005.3（中公叢書）

『街角の科学誌』 2007.8（中公新書ラクレ）

『宇宙像の変遷　古代神話からヒッグス粒子まで』左右社 2013.12

2002 年

●第 18 回(02/17)：ロバート・リケット/笹本征男/猪野修治：「討論会：日本の戦後民主主義とアメリカ」

　ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』上・下（岩波書店、2001 年 3 月 21 日、5 月 30 日）を叩き台にして日米の研究者が議論する（猪野）
１．ジョン・ダワーの同時多発テロ報復戦争批判（猪野）
２．ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』を読む（猪野）
３．ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』に対する日米研究者の発言
（１）なつかしさ・とまどい・希望（笹本征男）

（２）個人と国家：戦勝国への教訓（ロバート・リケット）
４．討論会の概要報告（猪野）

注）ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』上・下（岩波書店、2001 年 3 月 21 日、5 月 30 日）は大きな反響を呼んだ。感動するほどの内容である。すぐさま企画し行動し実践した。日本人の占領史研究者の笹本征男さんとアメリカ人研究者のロバート・リケットさん（当時和光大学教授）をお招きして日米研究者の大討論会を実施した。大盛況だった。

この内容はすべて記録テープから起こし、猪野修治「日本の戦後民主主義とアメリカ」『湘南科学史懇話会通信』第 8 号、PP.13-39 に全文を再現してある。その間の大変な編集・校正の段階で、ロバート・リケットさんは真摯に取り組まれ、実に丁寧で仕事をしてくださった。後日、リケットの内外における人生過程を知ることになるが、時代にほんろうされながらも、誠実に生きようとし、また、そうしてこられたリケットさんにはほんとうに頭が下がる。現在は山形県鶴岡市（奥様の郷里）で思索の日々を過ごしておられる。リケットさんにはこころから感謝する。

その意味でリケットさんのほぼ全著作の一覧を掲載することにした。

ロバート・リケット　著作リスト（1974～2016 年）

1974　翻訳　Yasutada Watanabe, *Shinto Art: The Ise and Izumo Shrines*, Weatherhill/Heibonsha, 191 pages.

1975　翻訳　Ryoichi Hayashi, *The Silk Road and the Shosoin*, Weatherhill/Heibonsha, 181 pages.

1985　「なぜ指紋押捺拒否する-ひとりのアメリカ国籍をもつものの話」『水牛通信』7 月、Vol. 7、No. 7、pp. 12-15。

1987　“Harnessing national talent: Part 1-Human resources-a development prerequisite,” in *Development Forum*, United Nations University (New York), May, pp. 11-12.

1987　“Harnessing national talent: Part 2-The Person as the Pivot,” in *Development Forum*, United Nations University (New York), June, p. 10.

1987　「ショートな初体験・ぼくも逮捕された、その一」『水牛通信』2 月号、通巻 91 号。

1988　“Die Tragodie von Sanrizuka: Widergestand gegen den Flughafen Narita,” Gerhard Hackner, ed., *Die anderen Japaner: Vom Protest zur Alternative*, Iudicium-Verlag (Munich), pp. 35-61。

1988　共著（裁判の会と共に）「指紋押捺制度の背景」『思想の科学』No. 100、３月号、pp. 60-79。

1989　共著（竹前栄治）「ロバート・リケット指紋押捺拒否事件関係資料（1）-東京地方裁判所刑事第二部被告にかかわる竹前栄治証人尋問書-」『東京経済大学会誌』第161 号、1989 年6 月、p. 322-396。

1990　コメント「三里塚に心を寄せせる市民から」『三里塚からの農民宣言』、７つ森書館、pp. 64-69.

1992　「[GHQ の] 反共政策強く反映」（国際フォーラム IN ウトロ）朝日新聞社・編、『隣人：ウトロ聞き書き』議会ジャーナル, pp.156-163。

1993　“Koreans in Occupied Japan, 1945-52,” in *Proceedings of the International Conference on the Impact of the Korean Diaspora on the Native Ethnic Environment*, Song Cinema, Almaty City, Kazakhstan, September 17-25.

1994　単著　「GHQ の在日朝鮮人政策」『アジア研究』和光大学共同研究機構、9 号、pp. 1-36。

1994　インタビュー「在日アメリカ人が見た『4・24 阪神教育闘争』『MILE』55 号、pp. 16-20。

1995　単著　「在日朝鮮人の民族自主権の破戒過程:1948-1949 年を中心に」三橋修・他＜占領下における対在日朝鮮人管理政策形成過程の研究（１）＞『青丘学術論集』(韓国文化研究振興財団）6 号、pp. 211-285。

1996　「もう一つの戦後を求めて-アメリカ占領軍在日朝鮮人の法的地位の行方（1945-49 を中心に)、『アジア研究』和光大学共同研究機構、10 号、pp. 63-82。

1996　単著「知らないことは必要ないことか」和光大学総合文化研究所『東西南北』95 年号、pp. 14-27。

1996　エッセイ　「私のアメリカ、私の日本」『思想の科学』4 月、39 号,pp. 91-93。

1996　企画・編集・共著「『ショア』が突きつけるもの～『ショア』を見る、『ショア』を語る」和光大学人文学部・人間関係学部紀要『エスキス』別冊, pp. 91-131。

1997　「遊牧社会における民族関係-内モンゴルのホロンボイル草原」和光大学総合文化研究所『東西南北 1997 年号』、pp. 12-18。

1997　単著　「GHQ の対朝鮮人政策をつくった男たち、その① リチャード・B・フィン」和光大学『人間関係学部紀要』2 号、pp. 67-114。

1997　「ことばで見る反外登法」『戦後在日 50 年の外国人登録法反対』指紋カードをなくせ！ 1990 年協議会、12 月 13 日、pp. 34-36。

1998　“Sanrizuka: Reimagining the Community, “ Interview by Koshida Kiyokazu in *AMPO: Japan-Asia Quarterly Review*, Vol. 28, No. 2, pp. 14-23.

1999　単著 「新疆ウイグル自治区のモンゴル人社会―『改革・解放』下の民族関係」和光大学モンゴル学術調査団編『変容するモンゴル世界―国境にまたがる民』新幹社、pp. 197-249。

2000　企画・編集・共著 『地域社会における在日朝鮮人と GHQ』和光大学総合文化研究所『東西南北 2000 年号』別冊 1 号、2 月。

2002　編集・監訳・共訳 Takemae Eiji, *Inside GHQ*, Continuum (New York), 751 pages.

2003　単著 「国民国家形成が生み出した“民族紛争”―フィリピンのモロ族の苦悩」『和光大学人間関係学部紀要』、第 7 号。

2005　「対談による解説」（道場親信と共に）『壊死する風景―三里塚農民の生とことば』増補版、創土社。

2006　単著 「朝鮮戦争前後における在日朝鮮人政策―戦後単一民族国家の起点」大沼久夫・編『朝鮮戦争と日本』新幹社、pp. 181～261。

2010　対談「研究と学問、少数者と共存」（姫田忠義と共に）『民映研通信』（民俗文化映像研究所）29 巻 111 号。

2011　書評「人間の『原点的関係』への探求―篠原睦治編著『関係の原像を描く―『障害』元学生との対話を重ねて』を読む」『社会臨床雑誌』18 巻 3 号、2 月。

2011　「ブックレビュー：篠原睦治編著『関係の原像を描く』～和光大学の『障害』学生たちが作った『ありたい社会の縮図』」和光大学総合文化研究所年報『東西南北 2011』3 月、pp. 262～72）

2012　「地震・脱現原発を考える：いま・ここにある脱原発社会」和光大学総合文化研究所『東西南北 2012』3 月 pp. 234-242。

2012　監訳：E・ボラグ「”ウランフへの崇拝“：歴史、記憶、そして民族的英雄の創造」（ボルジギン・ブレンサインと共に／和訳：木下光弘）滋賀県立大学人間文化学部研究報告人間文化』31 号、pp. 15-44。

2012　「鈴木勁介さん、その生い立ちと思想」『和光大学現代人間学紀要 2011』5 号、

3 月、pp. 165-171。

2013 「震災と社会的排除：マイノリティ主体の復興へのまなざし」『和光大学現代人間学部紀要 2013』3 月 pp. 278-288。

2014 「ポスト原発時代を生きる：辺境の力―上関・祝島の現場報告から」和光大学総合文化研究所『東西南北 2014』pp. 31-44。

2015 「日米の迫で、日本に生きて 40 年（その 1）：ベトナム戦争時代の日本での体験」『社会臨床雑誌』第 23 巻 2 号（10 月 29 日）、pp. 31-42。

2016 「日米の迫で、日本に生きて 40 年（その 2）：三里塚との出会い、指紋押捺拒否、いま日米関係を振り返る」『社会臨床雑誌』第 23 巻 3 号（2 月 25 日）、pp. 2-17。

2016 「日本に生きる原点・私の 40 年―指紋押捺拒否と今」［シンポジウム：市民的不服従と現代Ⅰ－『共生』：問われる日本社会］和光大学総合文化研究所『東西南北 2016』3 月 pp. 12-33。

2016 「三里塚」の今を生きる-ディスカッション（道場親信と代島治彦）」［シンポジウム：市民的不服従と現代 II －三里塚の今を生きる］和光大学総合文化研究所『東西南北 2016』3 月 pp. pp. 63-87。

2016 編集・監訳・共訳 Nishino Rumiko, Kim Puja, *Denying the "Comfort Women": The Assault on Historical Truth in Japan and the Continuing Quest for Justice*, The Violence against Women in War Research Action Center, Tokyo （『「慰安婦」バッシングを越えて-「河野談話」と日本の責任』の翻訳）、出版未決定。

●第 19 回(03/31)：廣野喜幸「科学技術・倫理・市民：科学者の社会的責任論―史的俯瞰序説」

§１ 「科学者の社会的責任」論を振り返る

・川本隆史（1985）「科学と倫理のあいだ」

・『理想 特集 科学･非科学･反科学』628（1985 年 9 月号）：130-141

・唐木順三（1980）『「科学者の社会的責任」についての覚え書き』筑摩書房（全集第 18 巻に収録）

・　武谷三男（1982）『科学者の社会的責任』勁草書房

・村上陽一郎（1994）『科学者とは何か』新潮選書

・梅林宏道（1980）『抵抗の科学技術』技術と人間

・花崎皋平（1981）『生きる場の哲学』岩波書店 (岩波新書)

・高木仁三郎（1980）『科学は変わる』東京経済新聞社（東経選書）＝（1987）社会思想社教養文庫。

§２　専門家支配（Profession dominance）と無責任体制

§３　科学の社会的機能ーー文化としての科学と産業のための科学

§４　倫理構想　「原則主義」と「能力主義」

§５　近代倫理システム

§６　科学集団のエートス

§７　科学倫理構想

・ヒポクラテスの誓い

・日本機械工学会倫理規定　綱領

注）講師（廣野喜幸）は科学史家。

著書・論文

・廣野喜幸（1983）『現代生物学思想の諸相―動物の心的現象をめぐる若干の考察』東京大学教養学部教養学科（科学史・科学哲学分科）提出卒業論文

・廣野喜幸（1985）『オオシロアリ Hodotermopsis japonica Holmgren の生殖カストの発現様式についての研究』東京大学大学院理学系研究科（相関理化学専攻）提出修士論文
・Yoshiyuki HIRONO (1990) Histological and ecological studies on the caste differentiation of the Japanese dampwood termite Hodotermopsis japonica (Termopsidae: Isoptera) (1990) 東京大学
・大学院理学系研究科（相関理化学専攻）提出博士論文

・廣野喜幸・市野川容孝・林真理編著『生命科学の近現代史』勁草書房、 2002 年
・廣野喜幸（2002）「公共の場での問題解決：吉野川第十堰可動堰化問題」、小林傳司編『公共のための科学技術』玉川大学出版会、140-157 頁
・廣野喜幸（2003）「生命科学・バイオテクノロジー100 年間の推移と未来展望」、渡邊格ほか『21 世紀生命科学バイオテクノロジー最前線』東京教育情報センター、303-339 頁
・廣野喜幸（2003）「ヒトゲノム計画が私たちの社会にとってもつ意味を何だろうか」、東京大学綜合研究会編『ゲノム』東京大学出版会、29-56 頁
・廣野喜幸（2005）「環境「問題」の現在」、東京大学環境三四郎「環境の世紀」編集プロジェクト編著『エコブームを問う-東大生と学ぶ環境学』学芸出版、1-28 頁
・廣野喜幸（2005）「薬害エイズ問題の科学技術社会論的分析に向けて」、藤垣裕子編『科学技術社会論の技法』東京大学出版会、75-99 頁
・藤垣裕子・廣野喜幸編（2008）『科学コミュニケーション論』東京大学出版会
・原塑・廣野喜幸（2009）「脳科学と社会－脳科学リテラシーの観点から」、石浦章一・黒田玲子・山科直子編著『東大社会人科学講座　生命科学編　脳と心はどこまで科学でわかるか』南山堂、43-71 頁。
・廣野喜幸（2010）「医の倫理から生命倫理への転回」、小松美彦・香川知晶編著『メタバイオエシックスの構築へ－生命倫理を問いなおす』NTT 出版、137-161 頁
・廣野喜幸（2012）「あなたの心が知りたくて－心の進化の謎」、石浦章一監修『東大オープンキャンパス発　生命科学の未解決問題』西村書店、148-174 頁。

●第 20 回(06/16)：林衛/朝川直樹「科学ジャーリズムと市民社会論」

●第 21 回(07/28)：アルノ・ナンタ「フランスにおける歴史否定論」

はじめに：ナチ秩序の崩壊を認めないフランスの歴史否定論（ガス室否定論）の形相を４期にわけて手短に述べる。
１．第１期と第２期は旧ヴィシー政権系の人脈によるものである。
２．第２期は 1967 年から「フォリオン事件」が起こる 1978 年までと考えることができる。
３．第３期はフォリオン事件から始まり、ギヨームのグループの活動で特徴づけられる。
４．第４期はロック事件から始まり、「新しい右派」の登場で特徴づけられている。
終りに：西洋と日本の比較

フランスにおける歴史否定論 negationnisme すなわちガス室否定論は、アメリカやドイツと比較すると小規模な現象であると思われているようである。しかし、実態はそうでは

ない。ドイツでのそれがネオナチと元ナチによる活動であるのに対し、フランスの歴史否定論には固有の特徴が見られる。一種の「左派」あるいは「極左」の人々が狭義の「極右」的な反ユダヤ主義者たちと組んで活動しているという点である。

とはいえ、自称「歴史修正主義者」ないし「修正史観」は、もともとは戦争の敗者であるヴィシー政権系統極右による言説であり、それが 50 年間にわたって、フランスとヨーロッパ極右勢力の主張の支柱をなしてきたことはドイツとかわりはない。

それは、歴史否定論者たちはイデオロギー装置に属する人々であり、政治的な計算から史実を都合よく再編しようとしている者たちにほかならないからであり、すなわち彼らは「ナチス秩序」たるものの崩壊を認めないのである。

フランスにおける歴史否定論は概ね 4 期に分けることができる。本稿においてこれら 4 期をごく簡単に、1990 年まで概観したい。

注）講師（アルノ・ナンタ）は人類学史家。ナンタさん（フランス人）は恐るべき語学の天才である。日本語はもちろん、朝鮮語、中国語を自由に操る。フランス語以外の西洋諸国語は言うまでもない。私などまったく知らない漢字でも何でも理解している。ナンテ・コッタと驚愕するばかりだ。講演当時、わが家にもおいでいただき懇談する機会があった。現在は CNRS(フランス国立科学研究センター)の研究員である。最近リヨンにお住まいになったばかりだ。

Arnaud NANTA
Chargé de recherche première classe **一級研究担当官**
(Associate Professor), **CNRS フランス国立科学研究センター**,
Institut d'Asie Orientale 東アジア研究所（UMR 5062）
ENS de Lyon, 15 Parvis René Descartes, 69342 Lyon, France
Homepage : http://iao.cnrs.fr/
http://iao.cnrs.fr/spip.php?article709

・«Japon (discrimination et ségrégation) », in Pierre-André Taguieff (dir.), *Dictionnaire historique et critique du racisme*, Puf, Paris, 2013, p. 912-915

・«Physical Anthropology and the Reconstruction of Japanese Identity in Postcolonial Japan », *Social Science Japan Journal*, Oxford University, 2008-1 (11): 29-47

・«Torii Ryūzō : discours et terrains d'un anthropologue et archéologue japonais du début du XXe siècle », *Bulletins et Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris*, 2010 (22): 24-37

・«Comprendre l'affaire de falsification d'outils paléolithiques au Japon de 2000. Histoire de l'archéologie paléolithique et de l'homme fossile au Japon », *Extrême-Orient Extrême-Occident*, 2010 (32): 193-220

・«Ethnic Shows and Racial Hierarchies in Modern Japan», *Xiandai mishu xuebao* 現代美術學

報 (Journal of Taipei Fine Arts Museum), Taipei Fine Arts Museum, 2015 (30) : 85-103
・「植民地考古学、歴史学、博物館 朝鮮半島と古代史研究」坂野徹編『帝国を調べる』勁草書房、東京、2016 年、47-84 頁
・「独立後の大韓民国・朝鮮民主主義共和国におけるポストコロニアル史学の問題」北山研二編『文化表象のグローカル研究』 グローカル研究センター、成城大学、2016 年、189-199 頁
・「植民地主義の歴史と＜記憶＞闘争」『環』2012 年、49 号、246-269 頁
・「ジャン・レイ あるフランス人政治学者の見た日本の植民地主義と東アジア」三谷博、クロード・ハモン、廣瀬緑共編『近代日本とアジア』弁誠書店、東京、2016 年近刊
・«L'arrière-plan idéologique de la réforme scolaire au Japon », *Revue française de pédagogie*, 2008 (165) : 105-115（短い版は、64 - 「新自由主義世界の教育システムとは」セバスチャン・ルシュヴァリエ編『日本資本主義の大転換』（岩波書店、東京、 2015 年、147-165 頁）

●第 22 回(09/22)：佐々木力「科学技術論再考―科学史家の堕落か？」

１．なぜ私は「啓蒙主義者」にされてしまったのか？
２．戦後日本の科学論の変遷―「科学性善説」から「科学性悪説」へ
３．村上陽一郎氏の「聖俗革命論」を科学史的に問う
４．米本昌平・吉岡斉らの科学技術論のスタンスを政治的に問う
５．私はいかなる立場にたつか？

注）講師（佐々木　力）は科学史家

●第 23 回(11/22)：いいだもも「危機イデオロギーとしてのテクノロジー批判」
―佐々木力「「科学技術論再考―科学史家の堕落か？」を踏まえて―

１．ヒロシマ以後としての現代―「反・科学主義」の立場
２．巨大化・国家化した科学技術＝テクノロジー＝工学
３．「弁証法的理性」と「歴史的理性」と“進歩主義”
４．「理性の優位・復権」の限界
５．カッシーラーvs ハイデカー「ダヴォス討論」（1924）
６．村上陽一郎「聖俗革命論」

７．21 世紀の現代資本主義の全般的危機の開幕とテクノロジーの大暴走の開始

注）講師（いいだ　もも）は評論家・思想家

2003 年

●第 24 回(03/21)：川崎　哲「平和 NGO の姿とチャレンジ」

はじめに：軍事力によらない平和運動とはなにか
一国主義の裏側で、多国間条約の可能性、議論の欠如、イラクと北朝鮮のちがい、「憎しみ」は軍事力の本質、２つの土俵。（川崎氏は現ピースボート共同代表）

注）講師（川崎哲）は第一線の反核活動家でピースボート共同代表。国際的な反核運動の最前線で活躍中である。

著書
・『核兵器を禁止する』岩波ブックレット　２０１４
・『核拡散　軍縮の風は起こせるか』岩波新書　２００３
編著書
・「脱原発世界会議」実行委員会編『原発のない世界のつくりかた』合同出版　２０１２
・「９条世界会議」日本実行委員会編『９条世界会議の記録』大月書店　２００８
・共著『イマジン９　想像してごらん、戦争のない世界を。』合同出版　２００７
・グローバル９条キャンペーン『５大陸２０人が語り尽くす憲法９条』かもがわ出版　２００７
・共編『戦争をしなくてすむ世界をつくる３０の方法』合同出版　２００３
共著書
・川島正樹編（共著）『記憶の共有をめざして　第二次世界大戦終結７０周年を迎えて』行路社　２０１５
・堀芳枝編著（共著）『学生のためのピース・ノート２』コモンズ　２０１５
・メッセージアンドフォトブックノーニュークスヒロシマナガサキフクシマ編（共著）『NoNukes　ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ』講談社　２０１５
・秋山信将編著（共著）『ＮＰＴ　核のグローバル・ガバナンス』岩波書店　２０１５
・池田香代子編著（共著）『この思いを聞いてほしい！　１０代のメッセージ』岩波ジュニア新書　２０１４
・前田哲男・飯島滋明編（共著）『Ｑ＆Ａで読む日本軍事入門』吉川弘文館　２０１４

・岩波書店編集部編（共著）『これからどうする　未来のつくり方』岩波書店　２０１３
・嘉指信雄・森瀧春子・豊田直巳共編（共著）『終わらないイラク戦争　フクシマから問い直す』勉誠出版　２０１３
・君島東彦編（共著）『平和学を学ぶ人のために』世界思想社　２００９
・徐勝監修（共著）『北朝鮮が核を放棄する日』晃洋書房　２００８
・功刀達朗・野村彰男編（共著）『社会的責任の時代』東信堂　２００８
・功刀達朗・内田孟男編（共著）『国連と地球市民社会の新しい地平』　東信堂　２００６
・マイケル・シーゲル、ジョセフ・カミレーリ編（共著）『多国間主義と同盟の狭間　岐路に立つ日本とオーストラリア』国際書院　２００６
訳書（共訳）
・大量破壊兵器委員会（西原正監訳）『大量破壊兵器　廃絶のための６０の提言』岩波書店　２００７
・ポール・ロジャーズ（岡本三夫監訳）『暴走するアメリカの世紀』法律文化社　２００３

●第 25 回(06/29)：猪野修治「小倉金之助と科学運動」、岡部進「小倉金之介の青春時代」、西尾成子「小倉金之助と石原純」

■小倉金之助と石原純（西尾成子）

小倉と石原は第一級の本物の科学ジャーナリストといえると思うのですが、二人がどのような関係にあったのかという肝心な問題は、まだ明らかにされていないと思います。二人の共通点、接点をあげてみます。まず二人に共通していたのは、若いとき（小倉は物理学校に入学して、石原は東大に入学）から桑木彧雄と親交があったということです。二人の哲学的関心は桑木によっている部分があるでしょう。少なくとも石原は桑木から執筆のアルバイトの世話をしてもらっています。石原にとって桑木は相対論に関して議論できる唯一の相手でした。また二人は科学ジャーナリストとして活躍する前に、それぞれ専門の数学者、物理学者でした。

1911 年に東北帝大の理科大学が開設されると、小倉は数学科の助手として、石原は物理科の助教授としてそこに赴任します。小倉は 1917 年塩見理化学研究研究員、大阪府立医科大学（予科）教授となって大阪に移りましたので、しかもその間石原は 1912 年 3 月から 14 年 5 月までヨーロッパに留学していましたので、二人が仙台に一緒にいた期間は 3,4 年でしょうか。

けれども、数学教室と物理教室とは密接な交流があり、小倉の回想によれば、“数学教室以外の方で懇意にしていたのは、物理学の石原さんと、哲学の田辺さんであります。石原さんには留学にお出になる前に、物理は力学のことについて教わったり相談したりしたこともあります。また御帰りになってからは、相対性理論や量子論の講義を聞いたこともあ

ろいます。”また二人には、数学教授林鶴一が発行した数学国際誌『東北数学雑誌』(Tohoku Math.J）の編集に協力しています。二人とも創刊号に論文を発表しています。

参考資料：石原純（1881.1.15-1947.1.19）と小倉金之助（1885.3.14-1962.10.21）年譜

注）講師（西尾成子）は物理学史家。著書等は下記。

【著　　書】		
1963 年		フォーブス、ディークステルホイス『科学の技術の歴史 1,2』(広重徹他 2 名と共訳)（みずほ書房）
1966 年		“放射能と原子核”『現代物理学の形成』(辻哲夫他 3 名と共著）（東海大学出版会) pp.121-168
1968 年		“X 線と電子”、“放射能と原子構造”、広重徹『物理学史 II』(培風館) pp.89-146
1969 年		『物理学古典論文叢書 11　金属電子論』編 （及川浩他 1 名と共訳) (東海大学出版会)
1970 年		『物理学古典論文叢書 7　放射能』編 （木村豊他 3 名と共訳）（東海大学出版会)
1975 年		『プランク　熱輻射論』訳・解説 （東海大学出版会)
1977 年		『アインシュタイン研究』訳・解説 （中央公論社)
1980 年		『広重徹・科学史論文集 1　相対論の形成』編 （みすず書房)
1981 年		『広重徹・科学史論文集 2　原子構造論史』編 （みすず書房)
1986 年		“物理学における変革―相対論と量子論”、島尾永康編『科学の現代史』 （創元社） pp.100-147
1988 年		“原子構造論の誕生とスペクトル”、日本化学会編『化学史・常識を見直す―教科書の誤りはなぜ生まれたか？』 （講談社ブルーバックス) pp.182-202
1989 年		『歴史をつくった科学者たち I、II』(今野宏之と共訳）（丸善)
1993 年		『現代物理学の父　ニールス・ボーア』 （中央新書)
1997 年		『こうして始まった 20 世紀物理学』 （裳華房)
2007 年		アブラハム・パイス『ニールス・ボーアの時代 1』(今野宏之、山口雄仁と共訳）（みすず書房)

2011 年		『科学ジャーナリズムの先駆者評伝 石原純』(岩波書店)
2012 年		アブラハム・パイス『ニールス・ボーアの時代 2』(今野宏之、山口雄仁と共訳) (みすず書房)

■小倉金之助の青春時代（岡部進）

１．少年期から青年期への生活史：実験化学への関心
（１）生い立ち　（２）小学校時代（1890-1898）（３） 庄内中学時代（1898-1902）（４）東京物理学校時代（1902.3-1905.2）
２．青年期の生活史：化学から数学への転換
３．少年期から青年期にかけての思想形成

注）講師）（岡部進）は数学者・数学史家。小倉金之助の幼年期から青年期まで徹底的に調査し、克明に論じた。岡部さんのその後の「生活のなかの数学」の啓蒙活動の源流はこの小倉金之介の研究にある。膨大な著書などは、第 4 回（1998 年 11 月 29 日）の報告で詳細に言及してある。

■小倉金之助の科学運動（猪野修治）

小倉金之助（1885-1962）は現在の東京理科大学の前身・東京物理学校に学んだ後（1902-1905）、東京帝国大学理科大学化学科単科(1905)に入学するものの、その翌年、郷里の山形県酒田市の回漕問屋の家業を引き継ぐため退学する。しかし、学問への想いを断ち切れず、数学者の林鶴一（1873-1935）の指導を受け、数学の研究を決心する。再び上京し東京物理学校講師（1910）を務めた後、林の知遇を得て東北帝国大学理科大学助手となった。(1911)

その後の小倉の活躍はめざましく時代を画する学問人生を送った。例えば、私学出身では初の理学博士（1916）、塩見理化学研究所所長（1925-1937）、東京物理学校理事長（1939-1940）、日本科学史学会会長（1948-1960）、東京物理学校同窓会「理窓会」初代会長（1949-1953）、日本数学史学会会長（1962）を歴任している。1962 年 10 月 21 日死去。77 歳の生涯であった。

小倉金之助の数学者としての業績は大きくわけて、数学（微分幾何学）、数学教育、数学史に分類されるが、これらの分類に入れ切れない独自の豊かな文理融合の世界を創りだした。例えば、『数学史の根本問題』(1924)、『統計的研究法』(1925)、『階級社会の数学』(1930)、

『数学教育史』(1932)、『数学教育の改造問題』(1934)、『自然科学者の任務』(1936)、『科学的精神と数学教育』(1936)、『日本の数学』『計算図表』(1940)、『数学者の記録』(1948)、『数学者の回想』(1967)、『カジョリ数学史』(改定版編訳、1970)。これらの著作を含め 286 本の論文を発表している。

１．幼年時代（1885-1902）２．東京遊学時代(1902-1906)　生活史の大転換の時代　３．不安の時期（1906-1911）４．東北帝国大学（仙台）の時代（1911-1917）５．大阪時代の前期（1917-1927）６．大阪時代の後期（1928-1937）７．暗い谷間（1937-1945：）８．戦後（1946-1962）

参考文献：『小倉金之助著作集』全 8 巻（勁草書房、1973-1975）　岡部進『小倉金之助　その思想』(教育研究社、1983)、阿部博行『小倉金之助　生涯とその時代』(法政大学出版局、1992）小倉金之助研究会編『小倉金之助と現代』第 1 第～第 5 集、1985～1993 年、小倉金之助先生古稀記念出版編集委員会編『科学史と科学教育』(第日本図書、1956)

●第 26 回(07/26)：重松真由美「住民による調査学習の意義―川崎大気汚染測定運動の事例から」

１．はじめに　・公害の激化と公害反対運動の興隆　・公害反対運動における「専門家」の運動への参画と住民による調査学習活動　・住民による大気汚染の測定　・川崎の大気汚染測定運動
２．川崎大気汚染公害　・川崎の大気汚染公害の特徴　・川崎の大気汚染の状況　・公害病認定患者　・川崎大気汚染公害の歴史　・川崎における公害反対運動の内容
３．川崎の大気汚染測定運動　・大気汚染測定運動の展開　・1970 年代前半からの NO2 の測定開始　・一斉測定の始まり　・住民による主な測定内容　・測定運動の流れとカプセルの測定方法　・大気汚染測定の参加者　・法政大学第二高校（川崎Ⅸ中原区）・簡易測定器の開発　・測定運動にみる専門家・科学者　・測定運動にみる専門家・科学者との連携
４．　測定運動で得たデータをめぐって　・測定データの利用　・行政への測定監視活動・測定局の設置をめぐる議論・どの測定データが地域の汚染を示す値をなるか　・測定器の採用をめぐる問題　・住民による測定の長所・短所　・住民の測定データの持つ意味
５．最後に　・60 年代後半から 70 年代という時代　・住民が調査することの意義

注）当時の講師（重松真由美）はまだ東京大学大学院生（博士課程）であった。それ以前の修士課程は東京工業大学大学院の梶雅範研究室で「市民科学者・高木仁三郎論」を執筆

した。その延長線上で東大大学院に移り「住民による調査学習の意義―川崎大気汚染測定運動の事例から」を調査研究にあたっていた。

それに共鳴した私は、何とか重松さんを励ましたいと思った。研究室のある古巣の東大先端研（元宇宙研）まで出向き、近くの喫茶点で趣旨を説明し、思い切って話してください、と述べたことを記憶している。なお、この原稿を執筆するために 14 年ぶりに連絡をとった。現在は教育職（非常勤）に就かれていることを知った。今後ともますますお元気で御活躍されること切望している。

●第 26 回（07/26）; 中本正一朗「海洋生命は海洋環境を変えるか？－なぜ気候予測モデルに海洋生命過程が考慮されてこなかったかについての科学史的考察（その 1）
●第 27 回(09/14) : 中本正一朗「海洋生命は海洋環境を変えるか？－なぜ気候予測モデルに海洋生命過程が考慮されてこなかったかについての科学史的考察（その 2）

０：序論
１．環境にとって「生命とはなにか？」
２．地球環境の流体の動きを粒子の動きとみなしてニュートンの力学で表現する
３．なぜ気候予報モデルに海洋生命過程が考慮されてこなかったのか？
４．環境汚染規制マニュアルの歴史
５．まとめ

付録 A : ミクロな見方による拡散
付録 B : 酔歩過程を行うミクロ粒子は過去を認識しているか？
付録 C : 拡散方程式は有毒粒子の位置を確定できるか？
付録 D : 負の粘性係数
付録 E : なぜ気候モデルでは生命過程の情報を必要としなかったのか？
付録 F : 大気海洋の乱流過程の平均値はガウス型か？
付録 G : マクロな見方による拡散
付録 H : 団塊世代の気候変動研究者の心理
付録 I : ゴミ焼却炉建設にともなう環境予測の嘘
参考文献

地球表面付近の流体の物理状態を長期間にわたり平均して時間的変化をならしてしまったものを地球の気候と呼ぶ。つまり地表付近の大気と海洋の長期的な平均状態が地球の気候である。気候予測モデルとは大気が海洋流体を構成する流体粒子の物理的状態と粒子の

運動の様子を流体力学方程式で表現したものである。

流体粒子の位置と運動量を記述するニュートンの運動方程式を解くには流体粒子の密度がわからなくてはならない。流体粒子の密度は流体の温度と流体に含まれる媒質（海水粒子の場合は塩分、大気粒子の場合は水蒸気）の量を用いた密度の経験公式を使って求める。流体粒子の物理状態を決めるための温度と媒質量は流体粒子とともに輸送され、移動先の環境流体の密度を変化させのである。

一方、ゴミ焼却場の煙突から放出される汚染物質の化学成分そのものは移動先の環境流体の密度を変化させないのである。それでは現代のゴミ焼却炉建設環境調査で仮定されている汚染物資濃度の拡散過程は気候モデルで採用されている拡散過程とどのように異なっているのであろうか？

「窒素酸化物の総規制規則マニアル」には簡単な拡散方程式の厳密解として、風が強い場合の解と風が弱い場合の解が記載され、この簡単な拡散方程式の厳密解が汚染物質の長期予報値として採用されることがあるが、ゴミ焼却炉から排出される汚染物質が流体粒子とともに移動するかを予測したと考えてよいのだろうか。

ここでは、気候モデルや「窒素酸化物の総規制規則マニアル」で仮定されている拡散方程式が不規則なブラウン運動をする周囲の溶媒粒子から外力を受け媒質の無限回の軌跡を記述する方程式と同じ構造をもつこと、すなわち、大気や海洋などの乱流流体粒子の運動がブラウン運動の外力のように独立である場合においてのみ拡散方程式が意味をもつことをしめす。

さらに、生命過程とはどういうことであるかを議論し、気候モデルになぜ生命過程が考慮されてこなかったのかについて歴史的な解釈を行うことにより、生命活動の存在しない気候モデルと生命活動の存在する気候モデルがどのように異なっいるかを議論する。(序論)

注）講師（中本正一朗）は物理学者。講演時間が足りず 7 月 26 日と 9 月 14 日の二回にわたりお話を頂いた。中本さんと知りあったのはたしか、東京理科大学の環境物理の研究会ではなかったかと思うが、強烈な印象を受けた。第一印象は、まさに天才物理学者のイメージで猛烈な早口でお話をされるものだから、何を話され（議論され）ているのかよく理解できなかった。事実、中本さんは、立花隆のテレビ番組で「日本の頭脳、アメリカから帰国」、と話題になったことがある（それをいまでも持参している）。

本講演も高度の流体力学の理論を基調にした気候モデルとゴミの拡散過程に関する議論であったが、私は、何かよく理解できなかった。今回あらためて文字化した文章（『通信』第 10 号掲載）を熟考しつつ読んでみたが、いまひとつはっきりしない。私の力量不足なのであろう。

そこで、大学者にまことに失礼ながら、高校生にも分かるように、本質を崩さず言わんとすることがらを明瞭にゆっくり話してほしい、またそのための訓練をしてほしい、と注文をつけたことがある。これは懇話会を主宰するものの責務だと思ったからである。今頃

は在住する沖縄でくしゃみをしておられることだろう。
　蛇足ながらもうひとつ。新神戸駅近くの居酒屋で中本さんの師匠の物理学者・斎藤行正さん（神戸大学名誉教授）と懇談する機会があった。お二人の親密な師弟愛に感服したことを思い出す。

著訳書
・中本　正一朗著　解題：カール・フォン・ワイゼッカー(Karl von Weizsacker)著「われわれはどこに行くのか(Wohin gehen wir?」（東アジア共同体琉球沖縄センター紀要　創刊号　２６－３５、2016）
・J.ハート『環境問題の数理科学入門』共訳（丸善出版、2012）
・斉藤行正・中本　正一朗　共訳『大気寛容なれども』（財団法人　地球環境センター、2001）
中本　正一朗　T.Suriyon, P. Prasanna Kumar, K. Ueyoshi, B. Subrahamanyam, Adrian Wolfy 著「擾乱付きの自己回帰過程からの出力と擾乱との相関ーーー地球大気の平均気温上昇は数ん江スケールの擾乱と独立ではない」　独立行政法人　国立高等専門学校　沖縄工業高等専門学校紀要　第３号　１－１２　２００９年　３月
・中本　正一朗　「地球の温暖化という現象」独立行政法人　国立高等専門学校　沖縄工業高等専門学校紀要　第３号　１３－２４　２００９年　３月
・斎藤行正・中本　正一朗「古典力学における軌跡と確率」　独立行政法人　国立高等専門学校　沖縄工業高等専門学校紀要　第４号　１－１１　２０１０年　３月
・斎藤行正・中本　正一朗「認識論としての生命系の物理学入門」独立行政法人　国立高等専門学校　沖縄工業高等専門学校紀要　第５号　１－１０　２０１１年　３月
・中本　正一朗・斎藤行正「なぜ我々は自発的に不利益を選択するのかーーー個と集団の相互作用と予測可能性」独立行政法人　国立高等専門学校　沖縄工業高等専門学校紀要　第８号　２７－４６　２０１４年　３月

●第 28 回(10/26)：唐木田健一「異なった価値観の間におけるコミュニケーションの方法」

１．はじめに
２．相対主義の問題
３．「方法」の提案
　・基本前提
　・方法
　・「理」と「情」の不可分性

・倫「理」
４．実際の例
・柴谷篤弘「ネオ・アナーキズム」
・大西巨人『神聖喜劇』
・ついでにヘーゲル
・山本義隆「丸山真男の場合」
・本多勝一「なぜイルカなのか」
・西村肇の「昭電論文」解析
５．「科学史」との関係
・規範的な理論はデータによっては反証されない
・実験誤差の問題
・「規範的な理論はその内部矛盾により変化する」
・新旧両理論の関係
・倫「理」との関係

・私がもっと重大と感じてるいるのは、過去数十年にわたって科学史で流行した「通約不可能性」なる概念です。すなわち、異なった立場―パラダイム―の間では、コミュニケーションが成立しないという考え方です。
・現在の相対主義は、絶対的価値基準が存在しないのだから、あらゆる価値は等価である。あるいは等価であるとみなすべきであると主張しています。
・この相対主義は、現代資本主義と非常によく調和するように思われます。そこには「真理」も「正義」もありません。それは、無原則・無節操・その場限りで「何でもアリ」で、唯一の基準といったら「うけるかどうか」＝「売れるかどうか」なのです。
・異なった価値の間の相互作用―これが多様な価値が存在することの価値だと思うのすが、それは極小化されてしまっています。
・相対主義を批判する書物として私が共感を覚えるのは『アメリカン・マインドの終焉』です（菅野盾樹訳、みすず書房、1988）。
・絶対的な価値基準―先天的な道徳律―が存在しなくとも、異なった価値基準の間でのコミュニケーションは可能であるということです。・・・私が「道徳」と言った場合、それは道徳律総体のことを意味します。道徳律とは個別規範のことです。
・だから矛盾の発見は重要であり、また有用なのです。・・・矛盾とは、ある「理」内部の矛盾のことです。・・・矛盾の発見のためには、いったん当の「理」に入り込み、それに出来る限り精通することによって、内的に働きかける必要があります。
・「情」の背景には「理」があり、「理」は「情」にもとづいて形成されます。「理」と「情」は不可分であるべきです。
・ここで私が着目する点はすでに明らかでしょう。それは相手の思想にもとづき相手の振

る舞いを批判するという方法です。この方法はラジカルです。義隆さんは、丸山教授をはじめとする東大の教官たちにとっては、「いわゆる学問や思想は生き方とは無関係なのだ」と糾弾しています。これは三十年前の指摘なのですが、当時の闘争学生の一部に対しては、いまだ大きな影響を残しています。

・本多さんはしばしば「ホンモノ」という表現を用います。彼はある講演会における会場からの質問に対し、「ホンモノとは一貫していることである」という趣旨を答えています。これは彼が、私のいう「方法」を、自覚的に実践していることを示唆しています。

・西村さんはこの仕事を、メチル水銀生成の「逆証明」と呼んでいます。すなわち、相手の実験データにおいて首尾一貫性を追求し、欠けているものを見出し、不整合（矛盾）を解決して、相手とは逆の結論を導き出したということです。

・創造活動においては、既存の知識は自由な発想への拘束として何か邪魔なもののように扱われることがあります。しかしそれは本質的に誤っている。既存の知識に精通し、その内部矛盾をしっかり見据え、それをのりこえることこそが創造なのです。

・プロの科学者にとって、規範的理論は最初から疑問の余地などないものです。そこで、規範的理論の変化は、事実との対応や一般性の問題などではなく、その内部矛盾―最高の信頼度と普遍性を有する理論の自己否定―が契機となるです。

注）講師（唐木田健一）はメタサイエンス（理論基礎論）を論ずる。近年では広く哲学一般を思索するゴリゴリ硬派の哲学者である。当初著者の書物を読んでも、よく理解できなかった。論理が整然とする文章なのだが、何を言いたのか、よくわからない。いまでもときたま、そのように言う著名な科学史家（物理学史）の発言にも遭遇することもある。

ところが知り合って数年して、著書『1968 年には何があったのか―東大闘争私史―』（批評社、2004 年 7 月）を原稿の段階で読む機会があり、その後本書を寄贈されふたたび熟読することになった。本当に感動的な書物だった。当時の著者（唐木田）の生々しい肉声が聞こえてきたからだ。そして長い書評を『科学・人間・社会』に書いた。

著者の多数の硬派な書物を真摯に読み込むようになったのは、それ以来である。それでも高度に抽象化された議論は私には難しい。『基礎からの相対性理論―原論文を理解するために』は名著である。ぜひとも一読されたい。

・『戯曲アインシュタインの秘密』（サイエンスハウス、1982、新装版、1991）
・『基礎からの相対性理論―原論文を理解するために』（サイエンスハウス、1988、ちくま学芸文庫、2012）
・『ネオ・アナーキズムと科学批判』（柴谷篤弘らと共著、リプロポート、1988）
・『サルトルの饗宴―サイエンスとメタサイエンス』（サイエンスハウス、1991
・『理論の創造と創造の理論』（朝倉書店、1995）
・『1968 年には何があったのか―東大闘争私史―』（批評社、2004）

・『エクセルギーの基礎』（オーム社、2005）
・『生命論』（批評社、2007）
・『原論文で学ぶ　アインシュタインの相対性理論』（ちくま学芸文庫、2012）
・『ひとりで学べる一般相対性理論―ディラックの記号法で宇宙の方程式を解く』（講談社、2015）
共著
・『徹底検証　21 世紀の全技術』（現代技術史研究会編、藤原書店、2010）
・『日本マックス・ウエーバー論争』（橋本努ら編、ナカニシヤ出版、2008）
・『分数ができない大学生』（西村和雄ら編、東洋経済新報社、1999/ちくま文庫、2010）
・『化学史　常識を見直す』（日本化学会編、講談社ブルーバックス、1988）

●第 29 回(11/23)：中村邦光「科学の歴史からみた日本の近世―日本におけるアルキメデス的科学の萌芽と挫折」（中村邦光先生定年記念講演）

１．「浮力の原理」と密度・比重の概念
２．「円周率」の算出方法と数学的「証明」の概念
３．「てこの原理」とモメントの概念
４．「蘭学」とその評価の変遷
５．「江戸の禁書」漢文科学書の場合　おわりに

注）講師（中村邦光）は科学史家。

2004 年

●第 30 回(01/11)：佐々木力《近代科学史論》三部作完成記念シンポジウム。

はじめに（猪野）
１．三浦伸夫「『デカルトの数学思想』の国際学界にとっての意義」
２．高橋秀裕「Descartes's　Mathematical Thought の作成を手伝って」
３．佐々木力「《近代科学史論》三部作を完結して」
４．小松美彦「佐々木科学史学の現代的意味」
５．薩日娜「佐々木数学史から学ぶ」
６．菅野幸子「佐々木学門論の印象」
総括（猪野）

注；三部作とは、『科学革命の歴史構造』全２巻（岩波書店、1985 年、講談社学術文庫、1995 年）、『近代学問理念の誕生』（岩波書店、1992 年）、『デカルトの数学思想』（東京大学出版会、2003 年）。

注）本シンポジウムは東京大学教養学部（駒場）で実施した。多数の来場者があった。

単著

『科学革命の歴史構造』全 2 巻（岩波書店、1985、講談社学術文庫、1995）

『近代学問理念の誕生』（岩波書店、1992、サントリー学芸賞）

『生きているトロツキイ』（東京大学出版会、1996）

『科学論入門』（岩波新書、1996）

『学問論―ポストモダニズムに抗して』（東京大学出版会、1997）

『マルクス主義科学論』（みすず書房、1997）

『二十世紀科学思想』（みすず書房、2001）

『科学技術と現代政治』（ちくま新書、2000）

『デカルトの数学思想』（東京大学出版会、2003）

『数学史入門』（ちくま学芸文庫、2005）

『21 世紀マルクス主義』（ちくま学芸文庫、2006）

『数学史』（岩波書店、2010）

『ガロア正伝』（ちくま学芸文庫、2011）

『東京大学学問論』（作品社、2014）

『反原子力の自然哲学』（未来社、2016）

共著

『数学史対話』中村幸四郎との共著（弘文堂、1987）

『医学史と数学史の対話』川喜田愛郎との共著（中公新書、1992）

共編著

『現代数学史対話』弥永昌吉との共編著（朝倉書店、1986）

翻訳

Ｉ．ラカトシュ著・J.ウォラル、E.ザハール編『数学的発見の論理：証明と論駁』（共立出版、1980）

D.ブルア『数学の社会学：知識と社会表象』古川安と共訳（培風館、1985）

ヴィーコ『学問の方法』上村忠雄と共訳（岩波文庫、1987）

トーマス・S.クーン『構造以来の道：哲学論集 1970-1993』（みすず書房、2008）

編訳書

マイケル・S.マホーニー『歴史における数学』（勁草書房、1982）

『物理学者タンダウ：スターリン体制への叛逆』山本義隆・桑野隆と共訳（みすず書房、2004）

●第 31 回(02/29)：西里扶甬子「生物戦部隊 731 を追って―証言者から受け継ぐもの―」

１．テレビジャーナリズム、時代のキーワード、大量破壊兵器
２．「9・11」そして炭疽菌レター事件、プリオンとは？
３．日本軍の委棄毒ガス
４．SARS は生物兵器か

注）講師（西里扶甬子）はジャーナリスト（ドイツテレビ）。
本講演の内容は『湘南科学史懇話会通信』第 12 号（2005 年 1 月 30 日）に掲載した。
著訳書
●ピーター・ウイリアムズ/デヴィド・ウォーレス『七三一部隊の生物兵器とアメリカーバイオテロの系譜』（西里扶甬子訳、かもがわ出版、2003 年 8 月 15 日）
●西里扶甬子著『生物戦部隊 731－アメリカが免罪した日本軍の戦争犯罪』（草の根出版会、2002 年 5 月 7 日）

＜最近の仕事＞

生物戦部隊 731　－アメリカが免罪した日本軍の戦争犯罪＝（2001 年）
（今秋瀋陽出版社より中国語訳本出版予定）

No More 731 日本軍細菌戦部隊（論文集）－医学者・医師たちの良心をかけた究明―
II-８　731 部隊の秘密を追って～奉天捕虜収容所で何があったか（2015 年）

＜学会誌・雑誌など＞

●　季刊『中帰連』　第 27 号（2003 年冬）
報告「マルタ」と呼ばれた英雄たち
●　季刊『中帰連』　第 28 号（2004 年春）「特移扱」犠牲者遺族発見
報告「マルタ」と呼ばれた英雄たち（第二回）関東軍憲兵隊「特移扱」という名の死刑
●北海道新聞　2004 年 7 月 27 日　イラク人質事件を振り返る　非国民か英雄か
●週刊金曜日　526 号（2004 年 10 月 1 日号）京都「みらいの会」の試み　ゆっくり自分を探す引きこもりたち
●週刊金曜日　535 号（2004 年 12 月 3 日号）新世代グマ急増！？里山の再生を

●　日本ジャーナリスト会議（JCJ）新聞　『ジャーナリスト』第 580 号　（2006 年 7

月 25 日）ベンジャミン・フルフォードインタビュウ記事
日本の最大のタブーはアメリカ

- 週刊金曜日　625 号（2006 年 10 月 6 日号）
  日韓関係を損ねているのは誰だ「竹島／独島取材」に対し日本政府から抗議
- 週刊朝日　（2010 年 12 月 10 日号）ノーベル平和賞・劉暁波氏の弟子が明かした「肉声と今」

- 15 年戦争と日本の医学医療研究会会誌　第 9 巻・第号　2008 年 10 月
731 部隊の秘密を追って　―奉天捕虜収容所で何があったか　60 年後に判ったこと―
●15 年戦争と日本の医学医療研究会会誌　第 16 巻・第 2 号　2016 年 5 月
第 3 回常徳「侵華日本軍細菌戦」国際シンポジウム参加報告

＜翻訳本＞
七三一部隊の生物兵器とアメリカ　- バイオテロの系譜 -　（2002 年）
＜テレビ番組＞　3－11 以降
ドイツ国営テレビ（ZDF）
ZDFinfo; フクシマ最悪事故から 2 年　除染・甲状腺がん（2013 年）
https://www.youtube.com/watch?v=z6MrX-1rds8
2013 年制作 Zoom「フクシマの嘘」YouTube（日本語字幕版）
https://www.youtube.com/watch?v=8MZKxWLruZQ
2014 年制作　ZDFinfo 「フクシマの嘘」隠蔽・詭弁・脅迫
https://www.youtube.com/watch?v=-VrJ4DlwyEk

●第 32 回(03/20)：廣政直彦「江戸時代の自然観―安藤昌益と三浦梅園」

１．日本の学術の自立
２朱子学の日本化
３貝原益軒の本草学
４安藤昌益の自然観
５三浦梅園の自然観

江戸時代は日本の学術の自立期であったといえるでしょう。儒学では、伊藤仁斎や荻生徂徠らが、朱子学や陽明学を批判し、孔子や孟子の教えを原典に立ち帰って研究する古学が提唱されました。医学では、名古屋玄医や山脇東洋らが、後世方医学を批判して、治療

を重視する実証的な古医方が現れました。また天文暦学では、渋川春海が、それまで中国に依存してきた暦法を改めて日本に適した貞享暦を完成しました。さらに、貝原益軒は、日本の動物・植物・鉱物に関する知識を集大成した『大和本草』を著して、日本の本草学を打ち立てました。

このような流れの中で、独自の自然観に基づく自然学を提唱したのが、安藤昌益や三浦梅園でした。それらの自然観は、約 100 年前の 17 世紀にヨーロッパで成立した近代科学の基礎にある機械論的な自然観とは全く異なるものでした。ここでは、江戸時代において日本の学術が自立する状況と、江戸時代の自然観を、安藤昌益や三浦梅園の自然観を中心に概観したいと思います。（はじめに）

以上みたように、中国から伝わった朱子学は、日本人の思考形態に合うように換骨奪胎され、自然や人間を考察する理論的土台となってゆきました。そこでは、理よりも気が重視され、また、朱子学のもつ「究理」の側面が重視されることによって、自然を研究する原動力となりました。そして、西洋の機械論的自然観が導入される以前の、日本的な自然観が、安藤昌益と三浦梅園によって提示されたのではないでしょうか。

安藤昌益と三浦梅園を比べると、昌益の自然はダイナミックであるのに対し、梅園の自然はスタティックであるように思えます。しかしそれは、二人の自然を研究する目的の違いに原因の一つがあるのではないかと思います。つまり、昌益が自然を研究するのは、生きることそのものであるのに対して、梅園が自然を研究するのは、純粋に知的関心から発しているからではないでしょうか。

最後に、当時、学術の中央ではなく、東北と九州という地域で独創的な自然学が生まれたことは、古学や古医方や蘭学が江戸や京都に現れたことと比較して考えてみますと、「学術における地方と中央」という問題を考える、手掛かりになのではないでしょうか。（おわりに）

注）講師（廣政直彦）は科学史家

●第 33 回(05/02)：稲葉守「二宮尊徳の仕法とその哲学」

１．二宮尊徳に対するアレルギー的反応とその原因
２．報徳仕法とその本質
３．二宮尊徳の自然哲学
４．二宮尊徳の社会哲学

５．現実の仕法関係について
６．註記：二宮尊徳全三十六巻

注）講師（稲葉守）は哲学者（ドイツ哲学）。この講演を基調とする論考が、「二宮尊徳の自然哲学と社会哲学―尊徳仕法の理論的基礎を確定する試み」『湘南科学史懇話会通信』第12 号（2005.1.30）PP.20-28.である。それによると、本講演（論考）の論題の意味は次のようである。

「二宮尊徳は日本思想史（もしくは日本精神史）における最も興味深い人物の一人である。この人とその事業、したがってこの人物の抱いている思想は、この国の持つ道徳資本の一つと見て誤らないであろう。この点を事実に照らして立証することが本論文の目的である。」（20 頁）。

小田原市在住で北条家にも繋がる稲葉さん（1938-）は、膝元の実践的思想家・二宮尊徳の人物像を転換させる仕事をなさってきた。最近、懇話会の案内を送ったら、近況を知らせる葉書を頂いた。それによると、元来はヘーゲル哲学の研究者の稲葉さんは、40 年来続けているヘ―ゲル『大論理学』（初版）の注釈に没頭されているという。

著書
・稲葉　守『今にして安藤昌益―安藤昌益を読む人のために』（風濤社、2004）
・稲葉守『尊徳仕法と農村振興―現代に生きる変革の精神』（農村漁村文化協会、2010）

・　同「ヘーゲル美学における美的理念の構造―ヘーゲル美学研究序説」『哲学誌』(12)119-139.1970.
・　同「エンゲルスの典型論とヘ―ゲルの「美学講義」」『哲学誌』(15)23-44.1972.
・　同「芸術の方法としてのイデアリジールング」『哲学誌』(16)85-100.1973.
・　同「先験論理学と思弁論理学―根源統覚と概念」『哲学誌』(18)23-47.1975

●第 34 回(07/04)：小寺明彦「楽しみながら社会を変革する生き方―理系人間がジャーナリストと名乗るまで」

●第 35 回(08/07)：齋藤光「変態＝hentai の記号誌について」

１：初めに（変態記号の輪郭、変態記号の広がり、変態記号のいま、変態の日常化・常態

化）
２：三つのアプローチ；記号史。科学史･思想史。社会史。
３：出発点としての『性的精神病質』＝Psychopathia Sexualis.
４：日本への移入；森鴎外、『色情狂篇』、呉秀三、出歯亀
５：『変態性慾心理』への道、ただしこれは初出であり糸口であるに過ぎない
６：『変態性慾論』、そして、田中香涯
７：大正期の普及と戦前期
８：戦後初期の裏面化。カストリ雑誌と変態クラブ。
９：変態の変態。Hの登場。
10：変態とヘンタイ。日常化への道
11：ヘンタイ日常化の社会、ヘンタイ常態化の世界と、hentai の国際化。

注）講師（齋藤光）科学史家（生物学史）

・廣野・市野川・林編『生命科学の近現代史』分担執筆（勁草書房、2002）
・『幻想の性　衰退する身体』（洋泉社、2005）
・井上俊・伊藤公雄編『文化の社会学（社会学ベーシック３）』分担執筆（世界思想社、2009）
・井上俊・伊藤公雄編『身体・セクシャリティ・スポーツ（社会学ベーシック８）』分担執筆（世界思想社、2011）
・『性の用語集』共編共著（講談社、2004）
・『性的なことば』（講談社、2010）
・金森修編著『昭和後期の科学思想史』分担執筆（勁草書房、2016）

2004 年 11 月 3 日の懇話会のこと
●第 36 回(11/03)：鈴木武雄「和算史研究の光と陰/ある異端者の軌跡」

１．戦後小中学校の軌跡
２．和算史に関わる契機となったこと
３．和算史研究家平山諦先生との出会い
４．『平山諦先生長壽記念文集』出版と研究ネットワーク
５．『和算の成立―その光と陰』出版までの道程
６．『和算の成立―その光と陰』の全体像
７．全体史（全体像）の確信と確立とは“発見”を誘引する
８．民学の価値を論ずる
９．全体史（全体像）と部分史（細部）
10．否定（無視）あるいは可能性を追求する歴史研究

11．教員が教師になるために
12．私の現在と状況の現在
13　一般庶民にとって学問研究と評価

注）講師（鈴木武雄）は数学史家で元小学校校長（当時は現職校長）。本講演の内容は『正湘南科学史懇話会通信』第 12 号（2005 年 1 月 30 日）に掲載した。この講演が契機となり、懇話会の活動に一貫して励ましをいただいてきた。きりっとした論文（主要に日本数学史）を発表されるたびにお送りくださり、そのつど読み込む日々が何年も続いている。鈴木さんの論文の特徴はどのような論文であれ、「です、ます」調で記述されていることだ。これはすべての論文はまず読みやくすなければないない、というお考えにある。その量は膨大でミカン箱いっぱい分にもなっている。

2012 年 11 月後半のことだったと記憶するが、ご自宅（静岡県菊川市）にお邪魔し、「日本数学史」と「本腰を入れた野菜造り」のお話を伺い、親しく懇談したことがある。野菜造りは数学史同様、創造的な営みであるとともに、大規模な自然災害非常事態が起こった際の食料品確保のためでもある、と言われたのには感服した。竹中英俊さん（幹事）も同道する。

プロフィールと著作

鈴木武雄

Ⅰ．プロフィール
・1944 年（昭和 19 年）4 月 3 日　静岡県小笠郡六郷村（*現在の菊川市）で生まれる。
・1945 年（昭和 20 年）8 月 13 日　父が満州のハイラルで戦死する。
・1963 年（昭和 38 年）3 月 31 日　静岡県立掛川西高等学校卒業
・1967 年（昭和 42 年）3 月 31 日　静岡大学教育学部中等教育科数学専攻卒業
・1967 年（昭和 42 年）～　東京教育大学理学部数学科聴講生
・1968 年（昭和 43 年）3 月 21 日　静岡県小笠郡小笠町立岳洋中学校教諭（数学担当）
＊この間、各公立中学校で数学を教えつつ、生徒指導、生活指導等を担当する。
・2005 年（平成 17 年）3 月 31 日　静岡県菊川市小笠北小学校（校長）定年退職
・2008 年（平成 20 年）3 月 31 日　静岡県掛川市教育センター退職

Ⅱ．著作
・1982 年（昭和 57 年）『静岡の数学１』（楽しくわかる算数数学の会）（私家版）
・1996 年（平成 8 年）『和算史の泰斗　平山諦先生　長壽記念文集』（私家版）
・1997 年（平成 9 年）『和算の成立　上』（私家版）
・1998 年（平成 10 年）『和算の成立　下』（私家版）
・2003 年（平成 16 年）『賀莚雲集録』（田原茂齋原著）復刻と解説
・2004 年（平成 17 年）『和算の成立　その光と陰』（厚生社厚生閣）
・2005 年（平成 18 年）『教育最前線レポート』（私家版）
・2007 年（平成 20 年）『東洋数学史への招待－藤原松三郎数学史論文集』（東北大学出版会，東北大学名誉教授土倉保と共編）
・2007 年（平成 20 年）　平山諦著『和算の歴史』（ちくま学芸文庫）の解説
・2007 年（平成 20 年）　平山諦著『和算上の人々』（ちくま学芸文庫）の解説

Ⅲ．論文

１．大阪教育大学数学教室編集『数学教育研究』掲載論文
・1996 年（平成 8 年）「バビロンから作用素論へ－平方根の近似法を巡る五千年の旅」（中村正弘大阪教育大学名誉教授と共著）
・1996 年（平成 8 年）「村瀬義益と逐次近似法」
＊この間、毎年 1 編から 3 編の論文を掲載する。
・2016 年（平成 28 年）「暦算家建部賢弘の Family History」
２．京都大学数理解析研究所『講究録』等
・2007 年（平成 19 年）「藤原松三郎先生と平山諦先生－時代に生き闘い，遺したこと」
＊この間毎年講演する。但し、2014 年以降は未刊。
・2016 年（平成 28 年）発表「万用不求算の謎」　近刊予定
３．津田塾大学数学・計算機科学研究所『所報：数学史シンポジューム報告集』
・2009 年（平成 21 年）「東北帝國大学と和算史研究 I〈林鶴一の源流〉」
＊この間。2015 年以外は毎年講演をし掲載している。
・2016 年（平成 28 年）「東北帝國大学と和算史研究VI〈平山諦と和算史研究〉」発表
４．湘南科学史懇話会通信
・2005 年（平成 18 年）「和算史研究の光と陰」（第 12 号掲載）
５．菊川市立教育委員会発行文芸誌『ふみくら』『文苑きくがわ』
・2001 年（平成 13 年）「関口隆吉のことなど」
＊この間、ほぼ毎年掲載している。
・2016 年（平成 28 年）「嶺田用水と中条右近太夫」
６．Scientiae Mathematicae（vol.3 No.3,）
・2000 年「Silent History of Japanese Traditional Mathematics / Who is Takahara Yoshitane?」
７．九州大学数理学府・マスフォアアンダストリ「九州数学史シンポジューム　講演記録集」
・2012 年（平成 24 年）「歴史を読み、人の心を知る＜Peter Hartzing の場合＞」
８．東北大学附属図書館所報「木這子」（Vol.33 No.1）
・2008 年（平成 20 年）「平山諦先生と平山文庫」
９．科学史学会欧文誌（Historia Scientiarum）vol.8-3
・1999 年「Obituary　An Obituary Notice of Dr.Hirayama Akira（1904-1998）」
10. 静岡大学教育学部附属属教育実践総合センター紀要№22
・2014 年「元静岡大学教授　鳥居次好の戦時体験（War experience of former professor of Shizuoka University Tsugiyoshi TORII）」

Ⅳ.講演
・大阪教育大学　・京都大学数理解析研究所　・津田塾大学数学・計算機科学研究所　・山形大学　・学習院大学哲学科・東洋文化研究所　・東北大学大学院理学研究科　・九州大学数理学府　・静岡大学教職大学院　・福井工業高等専門学校　・静岡県立掛川西高等学校同窓会総会

●第 37 回(12/26)：桜井淳「やっと折り返し点（著作集刊行）を通過して」

著書
・『原発の「老朽化対策」は十分か』（日刊工業新聞社）
・『原発事故学』（東洋経済新聞社）
・『美浜原発事故―提起された問題―』（日刊工業新聞社）
・『崩壊する巨大システム』（時事通信社）
・『原発事故の科学』（日本評論社）
・『新幹線「安全神話」が崩れる』（講談社）

・『新幹線が危ない！』（健友社）
・『原発システム安全論』（日刊工業新聞社）
・『旧ソ連型原発の危機が迫っている』（講談社）
・『原発のどこが危険か』（朝日新聞社）
・『ロシアの核は危ない』（TBS ブリタニカ）
・『事故は語る一人為ミス論―』（日経 BP 社）
・『プルサーマルの科学』（朝日新聞社）
・『桜井潔著作集』全 6 巻（論創社）
・『原発　安全神話の崩壊』電子出版（日経 BP 社）
・『福島第一原発事故を検証する一人災はいかにしておこったか一』（日本評論社）
・『日本「原子力ムラ」行状記』（論創社、2013）
・『日本「原子力ムラ」惨状記』（論創社、2014）
・『日本「原子力ムラ」昏迷記』（論創社、2016）

2005 年

●第 38 回(03/20)：佐藤一「この辺で、戦後の神話を打ち破ろう」

・敗戦直後から 1949 年末まで
１　公務員整理は社会党首班内閣で発案、下山事件とは無関係
２　国鉄労働組合は脳死で闘えず、歴史家も脳死して事実を歪曲、脳死しなかったのは警察だけ
３　共産党「九月革命」で狂乱、社会党もお付き合いで半狂乱
４　下山事件捜査本部の活動。

・東大法医学部教室と裁判科学教室の不思議
１　法医学教室の迷走　・裁判科学教室秋谷教授奮闘の怪　・松川事件の経験　・「日本資本主義精神」というタブー・タヴーの生む宙返り的変貌　・事実よりは嘘の方が、価値がある　・共産党的変身
２　清張の「一等資料」は「何等資料」か
３　社会党おまえも、か　・「こよなく晴れた青空」を暗いと思う愚かさよ

注）講師（佐藤　一）は歴史家。本講演の内容は『湘南科学史懇話会通信』第 13 号（2005 年 10 月 31 日）に掲載した。松川事件（1949 年 8 月 17 日）の容疑者として死刑判決を受

けるが、その後無罪判決を勝ちとる。やがて下山事件（1949 年 7 月 6 日）の研究に全精力を傾け、『下山事件全研究』（時事通信社、1976 年 12 月 15 日）を刊行する。その執念はすさまじいものがある。講演ではその一端のお話をいただいた。

なお、本講演は『図書新聞』に数回にわたり掲載された（編集は佐藤美奈子さん）。ここで佐藤さんがいう神話とは、「学者・知識人・マスコミが作りあげた歴史」（捏造された歴史）のことである。それは真実でないというのだ。

後日、たびたび私学会館（東京市ヶ谷）で懇談する機会があったが、そのたびに在野の実践的な活動を支援し励ましてくださった。なんどか、長文の手紙とともに御菓子（ラクガン）が送られてきたことがある。私自身の体調の関係で、御招待を受けた「偲ぶ会」にどうしても、参加できずに申し訳なかった、と思っている。

もうそろそろ、『佐藤一伝（論）』が書かれていい。いや書かれるべきだ。あるとき、笹本征男が佐藤さんに、いずれ、『佐藤一　伝』を書きたいと言ったら、佐藤さんは血相を変えて、生意気を言うな、冗談ではない、君には書けない、君はインテリ（知識人）に近づきすぎている、と一喝したのである。

あれにはびっくりしたが、それだけ、佐藤さんは戦後の知識人や著名な作家がペンで歴史を改竄する形相を赦せなかったのである。佐藤さんが親しくしていた久野　収にも、そのことで自己批判をせまり、久野はそのつもりだったが、他界してしまった。うっぷんやるかたない佐藤さんは、久野の葬儀に白い花ではなくて、真っ赤な花を持参して行った、と私に言った。

主要著書

・佐藤　一『下山事件全研究』（時事通信社、1976）
『松山事件―血痕は証明する』（大和書房、1978）
『不在証明―島田幼女殺害事件』（時事通信社、1979）
『下山・三鷹・松川事件と日本共産党』（三一書房、1981）
『戦後史検証　一九四九年　「謀略」の夏』（時事通信社、1993）
『松本清張の陰謀―『日本の黒い霧』に仕組まれたもの』（草思社、2006）

●第 39 回(2005/04/30)：松本俊吉「進化論と人間の理解―進化と人間存在の偶然性」

1　地球史における生物進化と人類の登場
2　ダーウインの自然選択説と進化の偶然性
3　奇跡の水惑星―生命をはぐくむ星・地球
4　人間中心主義　対　自然主義

注）講師（松本俊吉）は科学哲学者。本講演の内容は『湘南科学史懇話会通信』第 13 号（2005 年 10 月 31 日）に掲載した。

【単著】

●『進化という謎』（シリーズ「現代哲学への招待」Japanese Philosophers）、春秋社, 2014 年.

【共著または論文集】

●松本俊吉［編著］『進化論はなぜ哲学の問題になるのか：生物学の哲学の現在』勁草書房、2010 年.（執筆箇所：「まえがき」、第 1 章「自然選択の単位の問題」）

●野家啓一／門脇俊介［編］『現代哲学キーワード』有斐閣、2016 年.（執筆箇所：第 7 章「科学」）

●「『新優生学』をどう考えるか　～技術の論理と社会の論理～」　東海大学文明研究所［編］『ありうべき世界へのパースペクティブ』東海大学出版会所収, 2011 年, pp. 257-288.

●「進化生物学と適応主義」　日本科学哲学会［編］、横山輝雄［責任編集］『ダーウィンと進化論の哲学』勁草書房、2011 年、pp.213-236.

【翻訳】

●K.ステレルニー＋P.グリフィス［著］『セックス・アンド・デス：生物学の哲学への招待』太田・大塚・田中・中尾・西村・藤川［翻訳］，松本俊吉［監修］，春秋社，2009 年.（翻訳の監修と「解題」執筆）

●E.ソーバー［著］『進化論の射程：生物学の哲学入門』松本俊吉・網谷裕一・森元良太［翻訳］，春秋社，2009 年.

●J.バジーニ＋J.スタンルーム［著］『哲学者は何を考えているのか』松本俊吉［翻訳］，春秋社，2006 年.

●生命倫理百科事典 翻訳刊行委員会［編］『生命倫理百科事典』　「生物学の哲学」「ヒトの進化と倫理」「科学哲学」の３項目の翻訳，丸善，2007 年.

●第 40 回(05/28)：右近修治「物理教育の発見」―ケンブリッジ「数学トライパス」とチューター制度

１．はじめに
２．チューター制度
３．ユニバーシティとカレッジ
４．セネット・ハウス試験（トライパス試験）
５．大陸の新しい解析学の導入と数学トライパス
６．受験雑誌の登場

７．「コーチ」の誕生
８．ケンブリッジ、プライベートチューターの活躍
９．ウィリアム・トムソンの数学トライパス

参考文献
付録　数学トライパスの問題

トムソンとフィーリエ
０．フーリエがトムソンを作った
１．フィーリエの熱伝導の理論
２．フィーリエとラプラス
３．トムソン、フーリエと出会う
４．熱のアナロジーとしての静電気
５．熱のアナロジーとしての送電線の理論
引用文献

注）講師（右近修治）は日本の物理教育の第一人者（理学博士)。右近さんは当初から物理教育になみなみならぬ関心を示し、長年、神奈川県立高校で物理教育に当たられ、全国組織「物理教育研究会」の会長も務められた。その一方で著名な物理学者を輩出してきた西欧の物理教育の歴史も研究されている。

本講演はそのほんの一端をお話いただいた。現在は大学（東京都市大学）で教鞭をとられ、定年前には本格的な物理教育の歴史の著書を刊行すべく準備中である。

著書
大学向け
・『見て体験して物理がわかる実験ガイド―演示実験・生徒実験集』共著（学術図書出版社、2007 年 10 月）
・『物理学演習問題集』共著（学術図書出版社、2009 年 11 月）
・『科学をどう教えるか』共訳（丸善株式会社、2012 年 6 月）
高校向け
・『新版理科総合 A』共著（実業出版株式会社、2005 年 12 月）
・『物理Ⅰ新訂班』共著（実業出版格式会社、2006 年 3 月）
・『物理Ⅱ新訂班』共著（実業出版株式会社、2007 年 3 月）
・『よくわかる物理Ⅰ』共著（学習研究社、2008 年 3 月）
・『物理基礎』共著（実教出版株式会社、2011 年 1 月）
・『科学と人間生活の基礎知識』共著（実業出版株式会社、2011 年 1 月）

・『物理』共著（実業出版株式会社、2012 年 3 月）
・『よくわかる物理基礎+物理』（学習研究社、2013 年 3 月）
著書
・『実験で楽しむ物理（１）「ひとりでに回る生卵」』共訳（丸善株式会社、平成 7 年 9 月）
・『実験で楽しむ物理（２）「歌うワイングラス」』共訳（丸善株式会社、平成 7 年 9 月）
・『実験たいけんブック３「ビンの中に竜巻　力と運動」』共訳（丸善株式会社、平成 10 年 2 月）
・『物理なぜなぜ事典（１）力学から相対論まで』共著（日本評論社、平成 12 年 10 月）
・『物理なぜなぜ事典（２）場の理論から宇宙まで』共著（日本評論社、平成 12 年 10 月）
・『アドバンシング物理 AS　新しい物理入門』共訳（シュプリンガー・フェアアラーク東京、平成 16 年 6 月）
・『新版理科総合 A 指導資料』共著（実教出版株式会社、平成 17 年）
・『物理 I 新訂版　指導資料』共著（実教出版株式会社、平成 18 年）
・『物理Ⅱ　指導資料　新改班』共著（実教出版株式会社、平成 19 年）
・『物理基礎教授用指導書』共著（実教出版株式会社、平成 23 年）
・『日常の疑問を物理で解き明かす』共著（ソフトバンク　クリエイティブ株式会社、平成 23 年 4 月）
・『人物でよむ物理法則の事典』共著（朝倉書店、平成 27 年 11 月）

●41 回(09/18)：矢島道子「ヒルゲンドルフ展をふりかえって―科学史研究は実践のなかにある」

私的回顧-オストラコーダ研究

帰宅して、玄関の壁にあるフランツ・ヒルゲンドルフの写真に向かって「ただいま」と告げるのも10年を越えた。「ヒルゲンドルフ展」のポスター中でヒルゲンドルフは変わらない穏やかな顔をしている。夢中で行動したヒルゲンドルフ展の開催は1997-98年のことであった。ヒルゲンドルフ展で、私の人生は、科学史に向けて一挙に大転換したのだ。

私は、1974年からずっとオストラコーダ化石の分類学的研究を行っていた。オストラコーダとは節足動物・甲殻類の仲間で、多くの種類は体長1mm以下であり、石灰質あるいはキチン質の背甲を有する。オストラコーダの和名は貝形虫だが、研究者たちはカイミジンコあるいは、ミジンコと呼んだりしている。オストラコーダは水のあるところはどこでも棲んでいる。

すなわち、海・湖・池・水田をはじめ木の葉の上の水滴や砂粒の間の間隙水にも棲んでいる。石灰質の背甲は化石として産出する。1920年代に石油を産出する地層には特有なオストラコーダ化石があることがわかって、化石オストラコーダの研究はめざましく進んだ。

現在、石油探鉱は、物理学的探査が主役となっており、オストラコーダ化石の研究は主に進化古生物学的なものに移行している。

それでも、中国の渤海湾油田や中東の油田地域ではオストラコーダ化石を使った探査が依然として有効である。

注）講師（矢島道子）は地質学・科学史家

著書

1993 『地球からの手紙』国際書院

1997 「ヒルゲンドルフと日本の魚類学」in 西野嘉章編『東京大学創立百二十周年記念東京大学展学問の過去・現在・未来［第一部］学問のアルケオロジー』, p. 308-316, 東京大学出版会

2001 「第 1 章生殖・性比」in 池谷仙之・棚部一成編『古生物の生活史（古生物の科学 3)』, p1-8. （神谷隆宏と共著）

2002 「クランツ標本（化石）の魅力」 in 田賀井篤平 編『東京大学コレクション XIV クランツ鉱物・化石標本』p.44-49, 東京大学総合研究博物館、東京大学出版会

2003 『メアリー・アニングの冒険』朝日選書（吉川惣司と共著）

2004 「相模湾調査前史 - 西洋人の日本の生物への関心 : ヒルゲンドルフとモースと -『相模湾動物誌（国立科学博物館叢書 6)』東海大学出版会 p7-15

2005 『はじめての地学・天文学史』ベレ出版、和田純夫と共編

2007 「マリー・ストープスの 2 つの顔 : 日本の植物化石研究事始め」in 大学出版部協会編『ナチュラル・ヒストリーの時間』大学出版部協会 p20-23

2007 Franz Hilgendorf (1839-1904): introdcer of evolutionary theory to Japan around 1873. In P. N. Wyse Jackson [ed.] “Four Centuries of Geological Travel”, Geological Society, Special Publications 287, p.389-393.

2008 『化石の記憶』東京大学出版会

2008 The Palaeo-Tokyo Bay Concept. In Grapes, R. H., Oldroyd, D. & Grigelis, A. [eds.] “History of Geomorphology and Quaternary Geology”, Geological Society, Special Publications 301, p. 179-187.

2009 コペルニクスは地動説を証明したのだろうか？ in 中根美知代、矢島道子、他 9 名 『科学の真理は永遠に普遍なのだろうか』ベレ出版、p.63-80.

2011 ダーウィンと地質学 in 松永俊男編集『学術会議叢書 17 ダーウィンの世界』日本学術協力財団 p.43-58.

2012 日本における進化学の発展：明治大正 in 日本進化学会編『進化学事典』共立出版 p.911-912.

2014 チャールズ・ダーウィン―進化論の確立者.『イギリス文化事典』, 丸善、p.446-447.

●第 42(10/22)：豊崎博光「世界の核被害の現場から」

ヒバクシャとは、アメリカによる広島、長崎への原爆投下による被害者など核爆発（実験）によって生みだされるだけではなく、放射能・放射線による被害者である。すなわち、ウラン鉱石の採掘、精錬と放射性物質の製造、核兵器製造と核爆発実験、核燃料製造と原子力発電、使用済み核燃料の再処理、核廃棄物の処理・投棄など核開発のすべての過程で生みだされる。

「年表：核開発と日本・世界のヒバクシャ」はその核開発の歴史と共に生みだされたヒバクシャを記したもので、核開発の歴史はヒバクシャの歴史でもある。核開発、ヒバクシャの歴史の基点をマンハッタン計画の開始時としたのは、国家による核開発が始まった時であり、多数のヒバクシャが生みだされ始めた時であるからである。しかし、ウランはそれ以前から陶磁器の上薬用などに採掘されており、それによって多数の採掘労働者がヒバクシャとなって亡くなっていた。

ヒバクシャは約一世紀にわたって生みだされつづけているといえる。また、この年表に記したヒバクシャは現在明らかとなっているもので、ほんの一部である。世界のヒバクシャの実態はほとんど隠され、知られていない。そして、ヒバクシャのほとんどは今なお見棄てられたままである

注）講師（豊崎博光）は国際的な写真ジャーナリスト。

主要著書

『アメリカ・インディアン』（写真集）。1974 年、自費出版。

『核よ驕るなかれ』1982 年、講談社。

『グッドバイ・ロンゲラップ』（写真集）。1986 年、築地書館。

『核を撮るーあるフォトジャーナリストの旅日記』1993 年、無明舎。

『核に蝕まれる星・地球』1995 年、平和のアトリエ。

『アトミック・エイジー地球被曝、はじまりの半世紀』1995 年、築地書館。

（第 1 回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）

『核の影を追って』1995 年、NTT 出版。

『核の 20 世紀　訴える世界のヒバクシャ』（写真集・共著）1997 年、平和のアトリエ。

『水爆ブラボー　３月１日ビキニ環礁・第五福竜丸』（共著）2004 年、草の根出版。

『マーシャル諸島　核の世紀（上下）』2005 年、日本図書センター。

（2005 年、日本ジャーナリスト会議賞受賞）。

『原発・核の時代ー核開発の果てにあるもの』（写真記録）2014 年、日本図書センター。

〇論考・原稿（最新のもの）
「棄てられる日本と世界のヒバクシャ」PRIME24 号（2006 年 10 月 31 日、明治学院大学国際平和研究所）
“Hidden and Forgotten Hibakusha: Nuclear Legacy” （「忘れられるヒバクシャ」、英訳 Ronni Alexander ）“Camera Atomica.” Edited by John O’Brian. 2014, Art Gallery of Ontario.
「キャッスル作戦とマーシャル諸島の人びと」。広島平和研究第 2 号(Vol. 2)。2015 年 3 月、広島私立大学広島平和研究所。

連載「核の風下」。月刊 MOKU、2014 年 9 月～2016 年 5 月まで 20 回。（以下、タイトルとサブタイトル）
① 原爆投下報道－メディアが伝えなかったこと　②誰も訪ねられない世界遺産－核に破壊され故郷を失うこと　③消される被ばく者－水爆実験と禁止署名運動の裏側で　④“国内難民”という人権侵害－ロンゲラップ島とフクシマの知られざる被ばく被害　⑤風下の被ばく者－大気圏内核実験がもたらす地球の現実　⑥核に問われる人類－世界は核兵器であふれている　⑦わが魂をレッドロックに埋めよ！－ウラン採掘から始まる核被害のサイクル　⑧すり替えられたままの原子力－人類は一度も矛盾から出ていない！　⑨初めからなかった“原発安全神話”－「廃炉・再稼働」を進める日本の逆行　⑩「人類は生きねばならぬ!!」－被ばく者補償と見えない被ばく被害　⑪ニュークリア・レイシズム－核開発のすべてが差別を生んでいる！　⑫抗議して生き残れ！－日本と世界の反核・非核運動　⑬雨を汚したのはだれ？－核実験による“地球被ばく”の真実　⑭核の海－そして、暮らしと生き物が奪われる　⑮「見えぬけれども、あるんだよ」－「核」が生み出した世界の光景　⑯人権なきモルモット－踏みにじられる核被害者たち　⑰原発と喪章－「ノー」という闘いは今も　⑱犠牲の連鎖－顔のない殺人者と名のある犠牲者たち　⑲フクシマはチェルノブイリを追いかける－人格、人権、人生の破壊に立ち向かえるか！　⑳世界は終末を見ようとしている

●第 43(11/20)：中村直文「占領下、靖国神社はなぜ存続したか」

注）講師（中村直文）は NHK ディレクター。

2006 年

●第 44 回(03/04)：安孫子誠也「アインシュタイン来日への道：桑木・田辺・西田・石原が果たした役割を中心に」

１．はじめに―桑木彧雄、アインシュタインの日本滞在と講演、講演趣旨：アインシュタイン来日を可能にしたものは何か
２．桑木彧雄・石原純とアインシュタインの関係―1906 年、桑木彧雄の「絶対運動論」、1907 年、桑木彧雄の「量子の形状について」、当時のヨーロッパの物理学との関係、桑木彧雄の欧州留学（1907-1909、明治 40 年―42 年）、石原純―物理学者・歌人・科学ジャーナリスト、石原純の相対性理論研究、石原純の欧州留学と物理学離脱、世界初『アインスタイン全集』の序文
３．明治・大正期日本の物理学－鎖国時代の日本文化、明治末期の第二次産業革命、長岡半太郎「ニュートン祭に寄せる書状」
４．明治・大正期における物理学と哲学の関係―桑木彧雄の物理学的認識、新カント派哲学者・田辺元、田辺元の桑木彧雄への応答、桑木彧雄の物理学的方法論、田辺元のキルヒホフ・マッハ批判、桑木・田辺論争の終結と結果、1914 年 2 月 14 日、西田幾多郎の桑木宛て書簡。西田の書簡におけるアインシュタインへの言及、1921 年西田の桑木宛書簡（アインシュタイン来日３か月前）、西田幾多郎の「相対性理論」論
５．改造社と大正デモクラシー―賀川豊彦、ラッセル、サンガー、アインシュタイン来日、「ヨーロッパ人の宣言」、山本宣治、アインシュタインの序文、超国家的政府構想、進歩的編集方針
６．終りに―その後の日本と改造社、ラッセル―アインシュタイン宣言

注）講師（安孫子誠也）は物理学史家。
著書
・『はじめて読む物理学の歴史』（ベレ出版、2007）
・『アインシュタイン相対性理論の誕生』（講談社、2004）.
・『物理学―エネルギー・対称性・エントロピー』（東京教学社、1987）
・『エントロピーとは何だろうか』（岩波書店、1985、共著）
・『歴史をたどる物理学』（東京教学社、1981）.

訳書
・プリゴジン『確実性の終焉』（　みすず書房、1997、共訳）
・ニコリス、プリゴジン『複雑性の探究』（みすず書房、1993、共訳）
・クーン『本質的緊張１、2』みすず書房、1987 - 1992、（『科学革命における本質的緊張』と改題して再版、1998）共訳.
・プリゴジン『存在から発展へ』（みすず書房、1984、共訳）

・スコフェニル『アンチ・チャンス』（みすず書房、1984、共訳）
ヤウホ『量子は実在するか』（東京図書、1974、『量子論と認識論』と改題して再版、1987、共訳）

●第 45 回(05/07)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「今日における主体の危機と主体再生の展望について―メルロ・ポンティ、ミッシェル・フーコー、ポール・ネグりの提起」（パネラー：片桐薫・針生一郎）

１．はじめに（猪野）
２．いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』を読んで（片桐薫）
３．超枕本は哲学思想の見取り図（針生一郎）
４．リプライ講演；〈主体〉の再生がなぜ不要か（いいだもも）
５全体討論（司会：猪野）

・針生さんの怪物性
・「神妙の域」に近づく努力
・オリエントとオクシデントの転換地中海世界史の終焉と西洋文明の始まり
・東アジア世界史　フッサールの現象学　人類文明の危機と〈主体〉の再生
・見えるものと見えないもの　ヴィトゲンシュタインの論理破綻
・見えないものの言表化　価値の転換―ニーチェとフーコー　討論（発言：針生一郎、片桐薫、中山茂、白鳥紀一）

●第 46 回(06/04)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「古典古代ギリシャ文明とは何であったのか？　その人類文明史的位置価（パネラー：近藤節也）

はじめに（猪野）
１．〈主体〉をめぐる諸感想（近藤節也）
２．リプライ講演―歴史の根本を問い直すこと（いいだもも）
３．全体討論（猪野）

・歴史の根本を問い直すこと
・なぜ〈三部作〉の次に継いて『恐慌論』を書いたか

・宇野「経済原論」のアポリア〈難点〉
・100 年後には超ベストセラー
・人類文明の八千年を遡る根拠
・女性の世界史的敗北によってもたらされたもの
・文明の分割とアイデンティティー
・文字の発見で遡る歴史
・ノミナリズムと実存主義
・無意識の世界の重要性
・価値転換はこれから始まる
・討論（猪野、近藤節也、勝木渥、清水邦男）

●第 47 回(07/02)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか？－線文字 B 文書の発見によるクレタ島文化とギリシャ文化の連続化ーそれによる人類文明の地中海世界史的連続性」（パネラー：三木亘）

はじめに（猪野）
１．世界史の中におけるギリシア幻想（三木亘）
２．リプライ講演（いいだもも）
３．全体討論（司会：猪野）

細目（三木亘）：
・学問は遊び
・終焉しつつあるアメリカ文明
・現代文明はいままさに更年期
・経度 30 度から見えてくる世界
・置き薬からわかる東西日本の違い
・人類の言葉はバイリンガルが基本
・ギリシアは西洋ではない
・アラブ経由で受け継がれたギリシア哲学

（いいだもも）
・生態学的視点から歴史を見ると
・アクチャルナ時代の産物
・「必要の順序」ということ

・ペルシャ帝国は、いつ滅んだのか？
・地中海ポリス国家は？
・アレクサンドロス大王の東方遠征　マルクスの「ギリシア幻想」　吉田健一の世界観
討論（三木亘、金子務、三澤昭、清水邦男、吉岡秀祐、田邊好美）

●第 48 回(08/06)：シンポジウム：いいだもも『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店）をめぐって。「古代ローマ世界帝国の興隆と没落―ギボンの総括以来の〈古代ローマ興亡論〉の西洋世界史的意味―今日のパクス・アメリカーナの前途は？」（パネラー：なだいなだ、金子務）

はじめに（猪野）
１．所感（なだいなだ）
２．所感（金子　務）
３．リプライ講演（いいだもも）
５全体討論（司会：猪野）

・今日の秋葉市長の平和宣言
・ギリシア哲学の始まり
・ヘーゲル『世界史の哲学』の問題性
・人類文明の暗黒面の重要性
・文字に記録された歴史の構造と意味
・「近世」の歴史学的規範概念
・東アジア文明と中華文明
・甲骨文字解読の歴史的意味
・「トロイ戦争」の歴史的位置
・ローマ帝国の形成と滅亡　世界帝国の世界史的推移
・討論（なだ　いなだ、金子務、来栖宗孝、瀬川嘉之）

注）講師（いいだもも）は思想家・評論家（1926-2011）。第 45 回～48 回の連続講演は、『湘南科学史懇話会通信』第 14 号に全文を掲載した。いいださんの生前最後の講演記録である。音声テープもある。

主要著作
・『20 世紀の〈社会主義〉とは何であったか 21 世紀のオルタナティヴへの助走』（論創社、1997）

・『サヨナラだけが人生、か』（はる書房、1998）
・『大世紀末 世界が変わる私が変わる いいだもの大預言』（情況出版、1999）
・『自民党大熔解の次は何か? 種を蒔く・再び』（社会批評社、2001）
・『検証内ゲバ 日本社会運動史の負の教訓 1-2』（社会批評社、2001-2003）
・『21 世紀の〈いま・ここ〉梅本克己の生涯と思想的遺産』（こぶし書房、2003）
・『日本共産党はどこへ行く?』（論創社、2004）
・『〈主体〉の世界遍歴 八千年の人類文明はどこへ行くか 1-3』（藤原書店、2005）
・『レーニン、毛、終わった 党組織論の歴史的経験の検証』（論創社、2005）
・『恐慌論 マルクス的弁証法の経済学批判的な検証の場』（論創社、2007）
・『東洋自然思想とマルクス主義 東洋・日本の土着伝統思想と今日の普遍世界的時代におけるマルクス主義と』（御茶の水書房、2007）

第 49 回(11/26)：月川和雄「プラントハンター、アマーリエ・ディートリッヒ」

はじめに
・ジーベンレーンの少女時代
・不幸な結婚生活
・オーストラリアでの冒険
・帰国後の生活
・娘による母の伝記とその影響
・アマーリエ・ディートリッヒ年譜

アマーリエ・ディートリッヒの名は、わが国ではほとんど知られていない。ドイツの人名事典として最も有名な信頼のおける『新ドイツ人名事典（Neue Deutsche Biographie）』によると、アマーリエ・ディートリッヒは植物学者（Botanikerin）あるいは研究旅行家（Forschungsreisende）とされている。しかし、彼女をアカデミックな学者あるいは研究者と呼ぶよりは、近年用い始められた「プラントハンター」と呼ぶ方が適切であろう。

たしかに、アマーリエがオーストラリアで採集したものは、植物だけでなく、動物標本や民俗関係の資料にいたるまで多岐にわたるが、生涯にわたって発表した論文はなく、この点マーリエを近代的な意味で研究者と呼びには抵抗がある。2002 年ドイツで刊行された『ブフランツェイエーガ』という 8 人のドイツのプラントハンターの評伝があり、その一人としてアマーリエ・ディートリッヒの伝も掲載されている。

アマーリエ・ディートリッヒの名は、植物学、動物学、民俗学などの専攻論文や学術

書のとびらや謝辞に植物などの採集者として刻印されている。しかし、彼女の名が後世に広く伝わったのは、一人娘のカリタース・ビショップが著した『アマーリエ・ディートリッヒ伝』によるとするのに異論はないであろう。

ビショップの『アマーリエ・ディートリッヒ伝』は、著者の創作の手が相当加わり、実際には小説と呼んでよいほどのものとなっている。たしかに刊行当初にはこれが小説（Novelle）に近いものであるとの指摘があったが、広く普及されるにしたがって、そのような指摘は徐々に忘れられ、事実を伝えているものと思われるようになっていった。このアマーリエ伝は第二次大戦までに十数版を重ねた。大戦後はしばらく版が途絶えていたが、1977 年に復刊され、現在も容易に入手できる。

1970 年代からカリタース・ビショップによる伝記はさまざまな批判を受け、アマーリエの生涯について実証的な研究が登場してきたが、多くは断片的なものに過ぎなかった。ところが、1980 年代に入って、オーストラリアの出身の研究者レイ・サムナーが徹底的な資料批判によって総合的な研究に着手し、徐々にその成果を発表するようになった。著作としては、1988 年に『アマーリエ・ディートリッヒ（1821-1891）、オーストラリアにおけるドイツの生物学者』、1993 年により包括的な『荒野の女、オーストラリアにおけるアマーリエ・ディートリッヒの物語』が刊行され、アマーリエに関する実証的な研究が広く知られるようになった。

ここでは、カリタース・ビショップによる伝記に基づいて、レイ・サムナーの実証的な批判を交え、アマーリエ・ディートリッヒの生涯をたどってみたい。（はじめに）

注）講師（月川和雄）は元来西洋古典学者だが生物特に植物を好んだ。月川さんの修士論文は「テオプラストスの植物学著作の典拠について」（東京大学）である。若い時代、上智大学文学部に入るがあまりにも宗教的色彩の強い学風に嫌気がさし、ドイツの大学（ハイデルベルク・マンハイム）などで学び、だいぶ遅れて東大大学院人文研究科を経て、もっぱら数種の大学と朝日カル（横浜）で西洋古典語を教えて暮らした。定職にはつかなかった。

講演に見られるような動植物と人間に関わる多数の論文を書き、重厚な翻訳書もある。私は月川さんと朝カル（横浜）で知りあい西洋古典語（ギリシャ語・ラテン語）を学んだ。人間的に尊敬すべき方だった。親しく付き合いをした。彼が存命であれば、もっともっと遊べたのに、と思う。それほどの方だった。それが 2008 年 2 月、癌で死去した。無念というほかない。

著作

・月川和雄「アマートリエ・ディートリッヒーある女性プラントハンターの生涯」『昭和薬科大学紀要』38:1-19,2004

・『ヒポクラテス全集』（共訳）エンタプライズ；新訂版、1997 年 12 月
・テオフラストス『テオフラストス植物誌』（共訳）八坂書房、1988 年 5 月
・クリストファー・マクガワン『恐竜解剖―動きと形のひみつ秘』（単訳）、工作舎、1998 年 9 月
・デニス・R．ディーン『恐竜を発見した男ギデオン・マンデル伝』（単訳）河出書房新社、2000 年 12 月
・『ヒポクラテス全集』（共訳）エンタプライズ；新訂版、1997 年 12 月

2007 年

●第 50 回(01/14)：田辺好美「Lumumba―アフリカ現代史の殉教者」

Avec sa mort, Lumumba a cessé d’être une personne. Il est devenu toute l’Afrique.
ルムンバは死して、一個の人であることを止めた。彼はアフリカそのものになった。
(Jean-Paul Sartre)Bonjour à tous !みなさん、こんにちは、湘南科学史懇話会の記念すべき第50 回の本日にあたり、講演の機会を与えていただき大変光栄です。ルムンバの話に入る前に、アフリカ大陸について地図をみてみましょう。今日の主題の地域は主としてアフリカ大陸の、いわゆる**ブラック・アフリカ** Afrique noire です。左のアフリカ大陸の地図上で緑色の部分になります。現在この言葉、Afrique Noire は正式にはAfrique sub-saharienne と呼ばれています。Afrique noir に暗黒大陸のイメージがあるからでしょう。しかし、本来noir といっても偏見があるとは思えません。黒人Les noirs といっても、それ自体は肌の色を指しているだけですから。

注）講師（田辺好美）はヨーロッパとアフリカ各地に住む世界市民で現在はコンゴ在住。田辺さんとは 2002 年 10 月 10 日東京大学大学院総合文化研究科の佐々木力さん（科学史・科学哲学）主宰の研究会におけるダニエル・ベンサイドの講演「反グローバリゼーション運動とヨーロッパ左翼の再生」の席上で知り合い、それ以来個人的な付き合いをしている。

●第 51 回(02/25)：片桐　薫「グラムシの科学論とグローバリゼーションの時代」

私の報告は以下のような内容であり、一般の「科学・技術論」とはいささか異なる。

① ラムシの技術論は、工場および労働者の発見からはじまる。
② グラムシの「アメリカニズム・フォーディズム」を科学・技術の観点から観る。
③ 『岐路に立つ科学』を契機とするグラムシの科学論を紹介する。
④ 第二次大戦後、顧みられなかったグラムシの科学・技術論とその結果について。
⑤ グラムシの科学・技術論を念頭に、新しい文明の時代を考える。

アントニオ・グラムシ（１８９１～１９３７）は、イタリア・サルデーニャの片田舎に生まれ、生まれてまもなく脊椎カリエスを患い、それがもとで生涯の身障者になった。そのうえ、父親が公金横領の罪で６年間も投獄されたため、幼い頃からアルバイトで貧しい家計を支えなければならなかった。父の出獄後、家族みんなの支えで、中学・高校そしてトリーノ大学の文学部近代言語学科に給費生として入学することができた。そして大学四年生のとき第一次大戦が勃発し、大学を中退して社会党の機関紙『アヴァンティ！』編集部トリーノ支部に入り、記者として活動することになった。以後、第一次大戦後、学友仲間と週刊紙『新しい秩序（ｵﾙﾃﾞｨﾈ･ﾇｵｰｳﾞｫ）』を創刊し、トリーノの労働運動にかかわっていくこととなる。

その後イタリア共産党コミンテルン支部の結成にかかわり、１９２２年に党を代表してコミンテルン第２回拡大執行委員会に出席。その後、党書記長として活動し、権力に到達したファシズムに抗して闘うが、２７年末、逮捕・投獄され、１０年余りの獄中生活の後、１９３７年４月に亡くなった。その獄中生活を通じて３３冊の「ノート」を残した。それが有名な『獄中ノート』である（この辺の事情については、近拙著『グラムシ「獄中ﾉｰﾄ」解読』、こぶし書房刊および『新グラムシ伝』、日本評論社刊に詳しい）。

彼は政治運動家・政治思想家で、いわゆる科学の専門家ではなかったが、トリーノの労働運動では工場の技術革新について積極的に発言し、また「獄中ノート」ではかなりまとまった「科学論」にかかわる覚書を残した。それらは、彼の知的形成過程においてきわめて重要な意味をもつものだった。

にもかかわらず、これまでのグラムシ研究において私の知るかぎり、重要な主題として取りあげられてこなかった（1）ことに、私はかねてから疑問に思っていた。ところがこのたび、それについて発言の場を、湘南地方を基盤に地道な活動を続けている「湘南科学史懇話会」（代表・猪野修治氏）から与えてくださったことに、感謝しなければならない。

注）講師（片桐薫）は政治学者（1926-2010）でイタリアの思想家アントニオ・グラムシ（1891-1937）研究者の第一人者。晩年、親しくお付き合いをさせていただいた。月 2 回ほど、きまって午前 10 時 30 分頃に電話がかかってきた。そして午後 2 時頃に小田急江の島線「中央林間駅」近くの喫茶店でちょうど２時間だけ雑談した。それが 10 回ほど続いたろうか。

長く住んだイタリア時代の生活や内外のグラムシ研究者などについて、いろいろお聞き

した。そのお話は、雑草のような在野の学者として生涯を送った方ならではの、とても暖かい眼差しだった。たくさんの書物も寄贈してくださった。2010 年 1 月 7 日だと記憶するが、昭和医大病院（藤が丘）に見舞った。それが最期だった。
あるとき、私はこう聞いた。「研究のことはともかく片桐さん、イタリアでは素敵な女性とたくさんの交流があったでしょう」。「うん、そうなんだよ」と目を細めた。

著作
・『イタリア民主主義の構造』（勁草書房、1977）
・『ヨーロッパ社会主義の可能性』（岩波書店、1983）
・『グラムシ』（リプロポート、1991）
・『グラムシの世界』（勁草書房、1991）
・『グラムシと20世紀の思想家たち』（御茶の水書房、1996）
・『グラムシ・セレクション』訳編（平凡社、2001）
・『ポスト・アメリカニズムとグラムシ』（リベルタ出版、2002）
・『西洋世界の没落』（社会評論社、2004）
・『グラムシ「獄中ノート」解読』（こぶし書房、2006）
・『新グラムシ伝』（日本評論社、2007）
・『グラムシとわれらの時代』（論創社、2008）

●第 52 回(03/25)：梅林宏道「サルトルと私の情報公開」

● 大学に入って始まった一番大きなことは大学生協の本屋さんで並んでいる本を見るということで、・・・「遅れてきた青年」という自覚がありました。
● 「人間は自由の刑に処せられている」というサルトルの考え方
● 当時、バートランド・ラッセルの『教育論』を関心を持って読んでいまして・・・その考え方に感銘を受けていました。
● 当時社会が問いかけていた「知識人問題」を科学技術者として受け止め、自分の生き方を決めてゆこう。
● 実証主義というのは本当に強い方法論であって、その強さが同時に限界を形成しているということなんだと思う。
● 実践というものが全体を絶えず個別の中に投影する回路になっている。
● ここはやっぱり市民が登場すべきじゃないかということで、「ただの市民が戦車と止める会」を作りました。
● 「実践的惰性態」の中でひとつの目的をもって「ぷろじぇ」をした時、やはり現実の世界がのしかかってくるわけです。

● 科学技術者としてこういう問題にどういうふうに具体的な関わりができるかのお手本がアメリカの中にあった。
● ベトナム戦争に反対する運動というのは必然的に同質の開放運動と接点を作るということにならざるをえない。
● グラスルートの運動とグラスルートの中で活動しているインテレクチャルのやっている運動が深く結びついていて、それが同時にメディアや政治に対して発信力を持っている。
● 公文書というものをどう捉えるかが、わりと重要なことじゃないかな。
● 日本は遅れているということでは済まなくて、どうやったら風土を変えることができるかということを考えるべきだ
● またいで越える —— いろんな分野（フィールド）をトランスすること
●情報公開の問題を私は真剣に考えたいし、そのことによってこそ結果が得られたということを見せることができるようなチャレンジをしてみたい。

注）講師（梅林宏道）はNPO法人ピースデポ特別顧問（元来物理学者）。1972年8月、科学者の立場から、米軍基地相模原補給廠からのベトナム向け戦車搬出阻止闘争に関わった。それ以後一貫して科学者の社会的責任の観点から多様な平和運動に関わっている。「核実験・核兵器実験モニター」（月2回発行）の主筆でもある。私は若い時代から影響を受けてきた科学者のひとり。この講演の再現は藪玲子さんにお願いした。したがって、見出しも藪さんらしいものになっている。

梅林宏道・著書目録

「科学技術と日本人」（共著、枯木陶、ブルーバックスB-90）　講談社。1967
「原爆から原発まで（上）」（共著、執筆「核を管理する社会とは」）　アグネ。1975
「制度と人間」（共著、執筆「混沌に根をはる科学技術」）　三一書房。1976
「反原発事典　シリーズ１」（共著、執筆「核の管理と人間解放」）　現代書館。1978
「戦車の前に座り込め」（共著）　さがみ新聞労働組合。1980
「抵抗の科学技術」　技術と人間。1980
「共に生きん——光州・金大中・同時代の私たち」（日韓連帯神奈川民衆会議編、執筆「論文：民衆連帯の原点に立ち確信をもって前進しよう」）　日韓連帯神奈川民衆会議。1981
「ウラルの核惨事」（訳、メドベージェフ著）　技術と人間。1982
「８・１５を読む・語る」（共著、日本はこれでいいのか市民連合・編、執筆「自衛隊は韓国人の反全斗煥蜂起への対処を最重視する」）　発行・第三書館、発売・新泉社。1982
「自己覚醒型調査－その方法論的手引」（訳、人民の発展のための全キリスト教統一研究所

（INODEP）編、執筆「いまなぜ＜方法論＞か）　グループ波。1983
「いかにして新しい政治勢力をつくりだすか？――時局協商懇談会についての概要」（時局協商懇談会編、執筆「新しい政治勢力について」）　時局協商懇談会。1984
「現代科学技術と社会変革」（共著、講座「現代と変革４」、執筆「高度工業化社会と人間の解放」）　新地平社。1985
「反核運動における二つの鍵」（共著）　トマホークの配備を許すな！全国運動。1987
「あなたが審査官ーートマホーク艦母港計画かながわ県民審査書」（共著、執筆「証言Ⅱ：ファイフ、バンカーヒルは核を積んでいる」）　トマホーク艦母港計画かながわ県民審査会。1988
「隠された核事故」　創史社。1989
「空母ミッドウェーと日本」　岩波ブックレット　NO.182。1991
「情報公開法でとらえた在日米軍」　高文研。1992
「情報公開法でとらえた沖縄の米軍」　高文研。1994
「米軍の残した毒物の遺産――フィリピン米軍基地跡地における有毒および危険廃棄物に関する記録」（共訳：照屋みどり・梅林宏道、独立フィリピンのための中央ルソン同盟・非核フィリピン連合編）　平和資料協同組合（準）。1995
「戦争と平和の事典」（共著）　高文研。1995
「核兵器不拡散条約の延長についての意見」（共著）　核拡散問題研究会。1995
「報告：在日米軍基地の有毒物質汚染」（共著）　平和資料協同組合。1996
「アジア米軍と新ガイドライン」　岩波ブックレット　NO.463。1998
「核軍縮と非核自治体・1998」（監修：梅林宏道・前田哲男、共同執筆）　ピースデポ。1998
「核兵器廃絶への新しい道――中堅国家構想」（訳、ロバート・グリーン著）　高文研。前文執筆「中堅国家構想と日本」。1999
「核軍縮と非核自治体・1999」（監修：梅林宏道・前田哲男、共同執筆）　ピースデポ。1999
「激動するアジア――印パ核実験・アジア経済危機」（共著、執筆「印パ核実験と日本の核政策」）　国連・憲法問題研究会。1999
「核抑止論――現代の裸の王様」（梅林宏道・阿部純子訳、ロバート・グリーン著）　高文研。2000
「核軍縮と非核自治体・2000」（監修：梅林宏道・前田哲男、共同執筆）　ピースデポ。2000
「シンポジウム記録：北東アジアの非核地帯化をめざして」（共同執筆）　シンポジウム実行委員会。2000
「歴史教育・社会科教育年報・2000」（歴史教育者協議会編。執筆「核兵器と廃絶運動の現在」）　三省堂。2000
「２１世紀の日本と宗教」（第三文明者編、執筆「核軍縮の現状と日本の役割」）　第三文明社。2000
"A Maginot Line in the Sky -- International Perspectives on Ballistic Missile Defense"

(Edited by David Krieger and Carah Ong. Authoring “Theater Missile Defense: Confidence destructive Measure in East Asia), Nuclear Age Peace Foundation, 2001

「韓半島の選択」（韓国語）（イ・サムソン／チョン・ウクシク編、執筆「現存する非核地帯と北東アジア非核地帯」）　サミル。2001

「核軍縮と非核自治体・2001」（監修：梅林宏道・前田哲男、共同執筆）　ピースデポ。2001

「東北アジア情勢と非核地帯化構想」　北東アジアの非核地帯化をめざす全国ネットワーク。2001

「ミサイル防衛――大いなる幻想」（梅林宏道・黒崎輝訳、デービッド・クリーガー／カラー・オン編、執筆「ミサイル防衛の基礎知識」「TMD：東アジアの信頼破壊措置」）　高文研。2002

「在日米軍」　岩波新書 783。2002

「核軍縮と非核自治体・2002」（監修：梅林宏道・前田哲男、共同執筆）　ピースデポ。2002

「２１世紀の核軍縮――広島からの発信」（広島平和研究所編、執筆「ＮＧＯの役割――日本を念頭において」）　法律文化社。2002

「米国・核態勢見直し（NPR）」　ピースデポ・ブックレット。2002

「国防総省：日本環境管理基準」（監訳）　衆議院議員原陽子・発行。2003

“NGO Presentations to the 2003 Nuclear Non-Proliferation Treaty Preparatory Committee,” (compiled by Reaching Critical Will, Authoring “Northeast Asia Nuclear Weapon Free Zone”) 2003

「戦争ではなく非核地帯を！――ジュネーブ国連ワークショップの記録」（ピースデポ編、執筆「現存する非核地帯と東北アジア非核地帯」）　ピースデポ・ブックレット。2003

「いま戦争を問う――平和学の安全保障論」（グローバル時代の平和学 2）（磯村早苗・山田康博編、執筆「東北アジア安保――米軍支配から法の支配へ」）　法律文化社。2004

「イアブック：核軍縮・平和・自治体・2004」（監修・共同執筆）　ピースデポ。2004

"Nuclear Disarmament in the Twenty-first Century," (Edited by Wade L. Huntley, Kazumi Mizumoto and Mitsuru Kurosawa, Authoring “The Role of NGOs in Japan and the World”), Hiroshima Peace Institute, 2004

「米軍再編と在日米軍基地」　フォーラム平和・人権・環境。2005

「東北アジア非核地帯」（梅林宏道／イ・サムソン／ツイン・ブックレット日韓共同刊行委員会編、執筆「非核地帯と『共通の平和』」）　ピースデポ。2005

「東北アジア非核地帯」（韓国語）（梅林宏道／イ・サムソン／ツイン・ブックレット日韓共同刊行委員会編。執筆「非核地帯と『共通の平和』」）　サルリム出版社知識叢書 NO161。2005

「沖国大がアメリカに占領された日」（黒沢亜里子編、執筆「米軍のグローバル再編と日本の米軍基地」）　青土社。2005 年

「イアブック：核軍縮・平和――市民と自治体のために・2005」（監修・共同執筆）　発行：

ピースデポ、発売元：高文研。2005

「研究報告『市民社会が構想する北東アジア安全保障の枠組み』」（共著）　ピースデポ。2005

“Demilitarizing for True Peace and Stability —— Civil Society’s Initiative for North East Asia Regional Security Frameworks,” Peace Depot, Japan, 2005

“A Model Treaty on the Northeast Asia Nuclear-Weapon-Free Zone,” (Edited by H. Umebayashi, and Authoring “Proposal on a Three plus Three Model”) Peace Depot Working Paper No.1E, 2005

「＜脱軍備＞で平和と安全を——市民社会が構想する北東アジア安全保障の枠組み」　ピースデポ。2006

「米軍再編ーーその狙いとは」　岩波ブックレット　N0.676。2006

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2006」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2006

“Missile Defense Operations of US Aegis Ships Based in Japan,” Peace Depot Working Paper No.2E, 2007

「報告書：神奈川県民の健康・環境に対する横須賀原子力空母配備の影響」（ピースデポ編、執筆「民は之を知らしむべからず——極秘電報が暴く米空母母港史の真相」　ピースデポ。2007

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2007」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2007

「核軍縮・不拡散の法と政治」（浅田正彦・戸崎洋史編、執筆「北東アジア非核兵器地帯の設立を求めるＮＧＯの挑戦」）信山社。2008

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2008」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2008

「講演記録：〈米軍の世界的再編と日本〉〈ベトナム戦争と相模原、そして今〉」　青山学院大学人権教育委員会。2008

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2009-10」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2010

「2010 年核不拡散条約（NPT）再検討会議——市民社会からの総括」（ピースデポ編、執筆「基調講演」「最終文書をこう読む」）　ピースデポ。2010

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2011」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2011

「非核兵器地帯——核なき世界への道筋」　岩波書店。2011

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2012」（監修・共同執筆）　発行：ピースデポ、発売元：高文研。2012

「イアブック：核軍縮・平和——市民と自治体のために・2013」（監修・共同執筆）　発行：

ピースデポ、発売元：高文研。2013

「非核兵器地帯――核なき世界への道筋」（改訂・韓国語版、キム・マリア訳／チョン・ウクシク監訳）　西海文集。2014

「イアブック：核軍縮・平和――市民と自治体のために・2014」（監修。ピースデポ編、共同執筆）　緑風出版発行：ピースデポ、発売元：高文研。2014

「提言：北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ」（編集責任、共同執筆）　長崎大学核兵器廃絶研究センター。2015

“Proposal: A Comprehensive Approach to a Northeast Asia Nuclear Weapon-Free Zone,” Chief Editor and Co-author, Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Nagasaki University (RECNA), 2015

「要約――提言：北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ」（編集責任、共同執筆）　長崎大学核兵器廃絶研究センター。2015

“Summary — Proposal: A Comprehensive Approach to a Northeast Asia Nuclear Weapon-Free Zone,” Chief Editor and Co-author, Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Nagasaki University (RECNA), 2015

「D.P.R.K.の核兵器運搬手段―第１版―」　ピースデポ・ワーキングペーパーNo.3J。2016

2011年

●第 53 回(09/03)：近藤一彦「古典語を学んでみて」

１．古典語とは　２．何故古典語を学んだのか（１）西洋古典との最初の出会い（２）田中美知太郎の著作を通じての西洋古典　（３）古典ギリシャ語独習と挫折　３．古典語の学習（１）ギリシャ語、ラテン語の学習（２）サンスクリット語、パーリ語の学習　４．古典語を学んでみて（２）　古典から学ぶもの

若い頃からギリシャ古典に興味を持ち多くの翻訳を読んだ。ホメロスの叙事詩、ツキディデス、ヘロドトスの歴史書、ギリシャ悲劇、プラトンの対話編、サッフォーの叙情詩。そこには二千数百年を経た今なお燦然と輝く世界が描かれていた。翻訳での読書に疑問を感じ古典ギリシャ語の独習に取り組むも、敢え無く挫折。退職を機に再開して 10 年。60 の手習いで始めた古典語の学習がどのようなものであったのか。老学生の古典語学習体験談。

注）講師（近藤一彦）は、1937 年 1 月 6 日生まれ。1959 年九州大学経済学部卒業、同年、清水建設株式会社入社。経理部、ブラジル駐在、総合企画室等の業務を担当。取締役、常務、副社長を歴任した後、2001 年退社。

私が早期退職し西洋古典語（朝カル：横浜、月川和雄師）を学んだときの仲間で、個人

的に親身な教えを受けた先輩である。そのときのノートはいまでも大切に保存してある。近藤さんは上記の経歴でも知られるように、清水建設株式会社の副社長を退職した翌日、すぐさま若い頃からやりたかった西洋古典語の勉強を始めることを決断し、現在まで一貫して種々の古典語を勉強されている。本当に敬意すべき方だ。

その学問的姿勢と並々ならぬ実力は仲間みなが、まざまざと知るところとなった。近藤さんは、若いころから読み親しんできた田中美知太郎（西洋古典学）から相当の影響を受けてきたが、私も『田中美知太郎著作集（全集)』を眺め読みする日々が続いた。このことが、私がのちに『西洋古典叢書』（京都大学学術出版会）101巻を購入することにもつながった。

それ以前、なにひとつまともに学び切っていない人生の途上で、これだけ（西洋古典語）は近藤さんについて学び切ろうと思っていたが、思わぬ諸般の事情で頓挫してしまった。またまた、つまずいてしまったのである。いまでも悔しい思いである。これも私の不徳の致すところで、このままでは成仏できそうもない。

著書

・『れくいえむ』（中誠堂、1991年、非売品）

●第54回(10/29)：竹中英俊「出版人としての37年の夢：書籍の過去、現在、未来」

はじめに：自己紹介

１．私の愛した４人の「天才と狂人の間」

２．活字の発明はグーテンベルクではない：マインツの博物館

３．現存する世界最古の活字本は『直指』（朝鮮朝1377 年）：清州の博物館

４．日本の活字文化は豊臣秀吉の東アジア侵略に由来する：古活字本

５．福澤諭吉は日本の近代出版の基礎を作った：「版権」

６．小学校の教科書は『学問のすゝめ』をめぐるエピソード：近代活字本

７．大学出版部に関わった私の幸せな37 年：活字の消滅

８．「本」が終焉した時代：固体から液体へ、さらに気体へ

９．電子出版協奏曲：未来への可能性

おわりに：「天才と狂人の間」という著者が消え「普通の人」の時代へ

職業としての出版に関わり、満37 年になります。その37 年間に経験した、「天才と狂人のあいだ」というべき著者の姿を、エピソードを入れながら、実名・仮名で紹介し、具体的な出版の現場をお話します。そして、このように人間を狂わせる書物の歴史を、現存する世界最古の活字本である『直指』（朝鮮朝1377年）の複製ほか、いくつかの書物をご

覧いただきながら紹介します。
　その上で、私が心がけた、出版する＝公共することのダイナミックな醍醐味をお伝えしたい。さらに、電子出版協奏曲が演奏される現在の中に、書籍の未来への可能性を見出し、「普通の人」が著者として世界に立つことのできる希望を皆さんと共有することにつなげたいと願っています。

注）講師（竹中英俊）は編集者（東京大学出版会）。現代思想史研究会時代（1996年）以来一貫してご支援をいただき、ことあるごとにお世話になり、多大の知的栄養を頂いて来ている。

著作
・体験的助成出版論『大学出版』1995 年夏号
・『助成出版のすすめ』平川俊彦と共著 大学出版部協会、2001 年
・大学出版部の彼方へ: オーストラリア訪問の経験から 『大学出版』第 59 号(2003.12)
・1st Australia Japan Publication and Cultural Exchange Programme 『湘南科学史懇話会』第 10 号（2004.1.31）(pp.64-65)
・The status of Japan's publishing culture and the role of university press『湘南科学史懇話会』第 10 号（2004.1.31）(pp.65-70)
・オーストラリア訪問報告『湘南科学史懇話会』第 10 号（2004.1.31）(70-83 頁)
・学術出版 月刊『UP』2005.10 から 2012.3 まで連載
・コラム 盛和塾＜大阪＞発行『勝己の友』2006 年 3 月 1 日号から 2011 年 5 月 15 日号までの 126 冊のうち 110 回寄稿
・出版と公共性: University Publishing の観点から／출판과 공공성: University Publishing 의 관점으로부터 『소통과 출판(疏通と出版)』図書出版 開新(国立忠北大学出版部)、2008.10.22
・シリーズ『公共哲学』全 20 巻刊了にあたって 公共哲学京都フォーラムフォーラム編『公共哲学 特巻 公共哲学のあゆみ』2008.11.3
・韓国・国立忠北大学出版部二十五周年記念大会に参加して 『大学出版』第 77 号(2009.2)
・韓国思想文化の重層的アリーナ(公共哲学を公共する旅 韓国篇 2009.4.10-15) 『公共的良識人』第 211 号(2009.6.1)
・韓国: 時間と空間の往還(公共哲学を公共する旅 韓国篇 2009.9.19-24) 『公共的良識人』第 217 号(2009.12.1)
・出版は時空を超えて、国境を越えて 精神をつなぐリレー(シリーズ『公共哲学』第 1 期全 10 巻中国語翻訳版出版記念シンポジウム、2009 年 10 月 10 日) 『公共的良識人』第 218

号(2010.1.1)
・『直指」との出遭い(韓国清州古印刷博物館を訪れて、2009.10) 『公共的良識人』第 219 号(2010.2.1)
・福沢、南原、丸山と大学出版の未来 『人文会ニュース』108 号(2010.5.10)「人文会セミナー in 千代田図書館 特集号」
・私の一冊 石原吉郎『望郷と海』 『人文会ニュース』同上
・跋文 猪野修治『サイエンス・ブックレヴュー』閏月社、2011.3.14
・編集者として:追悼斎藤眞先生 『斎藤眞先生追悼集 こまが廻り出した』斎藤眞先生追悼集刊行会、2011.3.25
・本をつくるよろこび 『本の作り方:大学出版部の編集技術』(大学出版部協会 2012.5.20)
・アメリカ研究図書出版助成の始まりのころ 「アメリカ研究振興会 50 周年記念」寄稿 (2013.1) HP 掲載
・北京貢院の中江丑吉 『日中文化交流』793 号(2013.7) 日中文化交流協会
・推薦書５点 野間秀樹編『韓国・朝鮮の知を読む』クオン、2014.2.20
・丸山眞男と東京大学出版会 『丸山眞男手帖』69・終刊号(2014.8)丸山手帖の会
・福澤諭吉と出版業:「大学出版の祖」として 『福澤諭吉年鑑』42 号(2015.12.20) 福澤諭吉協会

編集書（公務）
■1980 年代―：学派を横断媒介する政治学の編集出版、『現代政治学叢書』全 20 巻（1988－2012 ）、『講座国際政治』全 5 巻(1989)、『行政学叢書』全 12 巻（2006－）
『国際政治学講座』全4 巻（2004－）
■1990 年代―：専門を横断媒介する地域研究の編集出版、『東アジアの国家と社会』全６巻(1992－93)、『講座現代アジア』全４巻（1994）、『中東イスラム世界』全９巻(1995－98)、『現代中国の構造変動』全８巻(2000－01)、『日英交流史』全５巻（2000－01）、『現代南アジア』全６巻（2002－03）、『イスラーム地域研究叢書』全８巻（2003－05）、『アメリカ文化史』全5 巻（2005－06）、
■2000 年代―：学問を横断媒介する社会科学・公共哲学の編集出版、『社会科学の理論とモデル』全12 巻（2000－10）、『公共哲学』全20 巻(2001－06)、『シリーズ物語り論』全3 巻（2007）、『公共する人間』全5 巻（2010-11）
■2000 年代―：時代を横断媒介する復刊・新装版の編集出版、『新装版 日米関係史：開戦に至る十年』全4 巻（2000）、『近代日本の思想家』全11 巻（2007－08）、『日本政党史論』全７巻（2011）、2013年刊行の『モンゴル帝国史研究 正篇』（2015 年度日本学士院賞受賞）。

2012年

●第55回(01/22)：常石敬一「覚醒の時」

虚大科学の化けの皮がはがされた。3 月11日まで、僕が虚大科学として考えていたのは「地震予知」学と「結核」学のふたつだった。地震は「原子力」学がそれ以上の虚大科学であり、まさにモンスターと呼ばれるべきものになっていたことを明らかにした。

原子力について僕は『原発とプルトニウム』(2010 年4 月、PHP サイエンス・ワールド新書)を発表しているが、僕が物理出身だったこともあり、その虚大生に気付かなかった。ただ前記の本では、原子力の研究は広島・長崎に原爆が投下されたことで、物理学を中心とした研究課題はほぼ完了し、残りは出がらしとなった昆布をしゃぶるような、味気ないものと示唆している。

また結核については3 月11 日までにほぼ書き終え、その後だいぶ改稿・補充した『結核と日本人―――医療政策を検証する』(2011 年11 月、岩波書店)で、日本の結核学研究／結核予防会は「情報宣伝にたけた敗北した医学」であることを示した。

ソ連はチェルノブイリ原子力発電所事故(1986 年4 月)から5 年後の1991年12月に崩壊した。東日本大震災から5 カ月後の8 月、「日経」は日立と三菱重工の経営統合を報じた。これはその後まだ、進展を見ないが、こうした報道自体、日本株式会社の疲弊を示している。9月には米国で、中東の春に触発され、格差に抗議しその解消を求める運動がはじまった。

2011 年、日本だけでなく世界中で新たな動き、従来の枠組みに変革を迫る動きがはじまった。こうした世紀転換期こそ、歴史研究を通じ、現在を根底的に、根源的に理解することが必要だ。そのための科学の歴史の枠組みを考える。

注）講師（常石敬一）は、いまだから言明するが、わが科学史学上のスターだった。1960年代後半、生き方も行先の指針も定まらない不安定などさくさ状態にあった当時、たまたま志望でもない都内のフルタイムの教育現場に入り込んだ。その途端、20時間の授業、教員組合の仕事などを余儀なくされ多忙を極めていた。とても研究や読書をする時間などあるはずがない。唯一の読書と思索の時間は往復4時間の通勤電車のなかだけであった。そして常石さんの書物から多くのこと学んだ。科学者が絡む社会事件のドキュメントだ。これらのほとんどを読み、一部は書評も書いた。

講演の内容は、冒頭にある「虚大科学の化けの皮がはがされた」に、総てが凝縮されている。講演当日、食道癌を摘出する手術を受けてまもない時期であり、あまり大きな声でお話ができない状態であったにも拘らず、懇親会までもお付き合いいただいた。なお、常石さんは、広重徹―西尾成子とのかかわりで同門だと思っている。

著書
・『消えた細菌戦部隊 関東軍第731部隊』(海鳴社、1981)
・『骨は告発する 佐倉鑑定を読む』軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会 (1992)
・『日本医学アカデミズムと七三一部隊』軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会 (1993)
・『医学者たちの組織犯罪　関東軍第七三一部隊』(朝日新聞、1994)
・『七三一部隊　生物兵器犯罪の真実』(講談社現代新書、1995)
・『毒 社会を騒がせた謎に迫る』(講談社、1999)
・『化学物質は警告する 「悪魔の水」から環境ホルモンまで』(洋泉社新書、2000)
・『毒物の魔力 人間と毒と犯罪』(講談社+α新書、2001)
・『謀略のクロスロード　帝銀事件捜査と731部隊』(日本評論社、2002)
・『化学兵器犯罪』(講談社現代新書、2003)、『戦場の疫学』(海鳴社、2005)
・『原発とプルトニウム パンドラの箱を開けてしまった科学者たち』(PHPサイエンス・ワールド新書、2010)
・『結核と日本人 医療政策を検証する』(岩波書店、2011)。

●第56回(03/24):アラン・チバンバ/田辺好美「コンゴ民主共和国―アフリカの闇の奥の奥の奥」
　ザイールと呼ばれかつてモブツなる怪物独裁者が支配した国が、2007 年1 月第50 回湘南科学史懇話会で取り上げた悲劇の英雄ルムンバのコンゴに戻ったのが第1 次コンゴ戦争を経た1997 年であった。その後、アフリカ史上最大の戦争、第2 次コンゴ戦争が98 年に勃発、2002 年にやっと終了した。この激動の中、ルブンバシで青春時代を過ごした1979 年生まれのアラン・チバンバさんに、コンゴ民主共和国の体験的現代史を語ってもらう。
また、NPO『日本カタンガ協会』をルブンバシ（コンゴ民主共和国カタンガ州の州都）に設立したのが2009 年。その会の目指すコンゴ民主共和国と日本との友好活動をルブンバシに住む数少ない日本人、田辺さんに解説してもらう。

●講師プロフィール：アラン・カニンダ・チバンバ Alain Kanyinda Tshibamba：1979年生まれ、ルブンバシの名門イマラ校を卒業、高校・大学とも苦学し、ルブンバシ大学経営学部（Ecole Superieure du Commerce）を最優秀の成績で卒業。ルブンバシの数少ない図書を渉猟し仏文学からアフリカ文学を究めた読書家。現在総合文具輸入販売会社「パピルス」のオーナー経営者でめざすはアフリカのビル・ゲイツ。

●田辺好美（たなべ よしはる）：地球市民を自称、欧州（スイス、スペイン、フランス）

通算 19 年、アフリカ（アルジェリア、コンゴ）15 年の滞在。在ルブンバシ。2000 年から2005 年11 月23 日までメイル・マガジン『週間フランスのWEB』（234 号）を執筆編集発行し、2006 年からはブログ『アフリカの星』
http://davidyt-etoiledafrique.blogspot.com/を書いている。NPO「日本カタンガ協会」名誉会長。

●第57回(04/21)：白石　征「遊行かぶきと、その周辺を語る―中世説経節、踊念仏について」

一遍上人ゆかりの時宗総本山、遊行寺本堂で毎年行われる遊行かぶきは、すでに藤沢の「芸能風物詩」として、またわが国の文化復興の根っこを担うべきユニークな地域文化として、近郷近在はもとより、東京や遠方からも広く注目が集まっています。

「中世の血なまぐさく、おどろおどろしい、けれどもどこか懐かしい情念の世界が、遊行寺の雰囲気とマッチして、不思議な世界へと誘ってくれる」末木文美士（仏教学）「生者と死者、冥界と彼岸の混淆するドラマを、寺山修司の流れを巧みにとり入れて、ユニークな地方発信の地霊（まつり）の演劇として、すでに多くの人々に浅からぬ感動を与え続けている」山口昌男（文化人類学）

そこで今回は、昨年大好評を博した「さんせう太夫」をはじめ、「小栗判官と照手姫」や「しんとく丸」など、かずかずの遊行寺かぶきの脚本、演出をてがけてきた白石征さんが、その成り立ちから現在に至るまでの軌跡を現場の目で語ります。

中世芸能のもつ民衆神話の復活をめざす遊行かぶきのコンセプトと主題について、舞台映像や貴重な資料を参考にしながら紹介していきます。と同時に、中世芸能のトポスとしての藤沢がもつ歴史的な記憶や、やはり中世芸能の水源ともいえる説経節の物語がもつ感動の源泉、つまり「別れと再会」「死と再生」といった民衆芸能の神話的主題が、いかに現代の映画、演劇などにまで連なる水脈としても流れているかなどという点にまで語り及びます。

注）講師（白石征）は劇作家・演出家。遊行かぶきとは、白石征が藤沢市に立ち上げた遊行舎（劇団）。くしくも今年で20周年目を迎えた。湘南科学史懇話会とは畑は異なるものの、両方とも、所詮は人間の営みであることには変わりはない。その遊行舎を主宰する白石征は、「まつりの演劇〈遊行かぶき〉が問いかけるもの」、という文章のなかで次のように述べている。以下引用

乱世の過酷な運命に翻弄され、無常の風を共有の基盤としつつ、語る者聴く者の心が渾然と融け合い、悲痛な嘆きや祈りといった民衆の情念が結晶化を遂げた物語であり、いわば無名の人々の創造力によって

生み出された、草の根の民衆神話といっても必ずしも過言ではない。

受難と再生、別れと再会という人間存在の運命を枠組みとした中世説経節のリアリティは、その別れと再会が現世と冥府を見事に通底しているところにある。現世を生きる私たちの魂は、決して現世のみで完結しているものなどではなく、すでに生と死の堺をこえて往来しているのであって、死者とひびき合う魂によって私たちの人生もまた、いきいきと色づいているというべきものだからである。

ところで私は、この〈遊行かぶき〉を〈まつりの演劇〉と呼んでいる。一つには、地層深く眠っている地縁の神々を堀起こし、街の中に演劇として立ち上がらせていくためにエネルギーの渦巻を生み出そうとする意味において〈まつり〉の試みと言えなくもないからである。

と当時に、その華やぎの中に、荒人神小栗判官を呼び醒まし、生け贄としての惨死の顛末と、聖女照手姫の献身的な魂の抱擁によって再生を果たすというまさにその時刻を、観客が共に立会い、人類の見果てぬ夢の現出を共に寿ぐという構造において〈まつりの演劇〉を目さしているからでもある。

夢が実現した時には、すでにそれを夢みた身体はこの世には存在しない。人間の永遠の願いともいうべきこの愛のパラドックスを通じて、この世には存在しない人間も存在する人間にまじって立ちあらわれるこの空間こそ鎮魂の祈りを秘めた〈まつりの演劇〉と言い得るものであるはずだからである。

この冥府と現世がまじり合う死と再生のトポスにおいて〈遊行かぶき〉は今年もまた、果たして憧れの空間を現出させうることが出来るだろうか。『遊行かぶきの歩み』（遊行舎、2016年7月25日発行）8-9頁。

●第58回(08/05)：大滝則忠「国立国会図書館の最新事情」

はじめに、国立国会図書館とは：基本機能、施設整備と機能強化の歴史　国立国会図書館の今：遠隔利用を可能にする電子図書館機能、資料デジタル、電子情報の収集、電子情報資源の利活用　東日本大震災アーカイブの構築　おわりに

国立国会図書館をより身近な存在として活用していただくことを願いながら、その多面的な活動を取り上げる。デジタル情報がますます増加する時代にあって、利用者が求める図書館サービスの重点は何か。地域の図書館サービスとの連携を深める国立国会図書館の取り組みなどの最新事情を紹介する。

注）講師（大滝則忠）は国会図書館長（当時)。郷里の友人。猛暑のなか大量の国会図書館関係の資料を汗だくになって持参してくださった。参加者から大変に好評であった。それは大滝さんの誠実な講演とお人柄が大きい。若い時代からよく知る人物。教育大学（現筑波大学）時代は法律学専攻

今年3月31日、国会図書館長を退任され、どこにも所属せず、如何なる肩書きも有せず、自由な立場で研究に専念されている。現在は郷里（山形県玉庭、現在の川西町）出身の本間則忠（ほんま・のりただ）の研究に励んでおられる。大滝氏によると、下記のようであ

る。以下引用

本間則忠（ほんま・のりただ）は、慶応元年（1865）8 月に米沢在郷、玉庭（現川西町）の農家に出生。大工修行の後、山形師範学校を明治 23 年に卒業、そして東京高等師範学校理科を明治 31 年に卒業した。卒業後は文部省に任官し、本省勤務のほか、島根、山梨、鳥取、大分、栃木各県に赴任している。米沢の縁で特に平田東助一家との交流が深かった。平田の子息の家庭教師兼書生の時代もあったと伝えられる。現在、国立国会図書館憲政資料室所蔵平田東助文書の中に本間から平田及び平田夫人宛の書簡 4 通が含まれている。

本間はその後、大正 13 年東京練馬に富士見高等女学校を開校し、初代校長を昭和 3 年までつとめた。同校の経営は昭和 15 年に実業家山崎種二（山種証券等の祖）に引き継がれ、現在は山崎学園富士見中学校・高等学校として繁栄している。本間は昭和 13 年 10 年 10 日に隠居先の米沢市内で逝去。享年 73 歳。玉庭で葬儀が行われて生地の墓地に埋葬された。

主論文

・大滝則忠「戦前期出版警察法制下の図書館――その閲覧禁止本についての歴史的素描」『参考書誌研究』2号、p. 39-53（1971）

http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/02-05.pdf

・大滝則忠・土屋恵司「帝国図書館文書にみる戦前期出版警察法制の一側面」『参考書誌研究』12号、 p.14-32（1976）

http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/12-09.pdf

・大滝規忠・土屋恵司「帝国図書館文書にみる戦前期出版警察法制の一側面」（掲載誌 参考書誌研究 / 国立国会図書館主題情報部 編（通号 12）1976-03 p.p14～32

●第59回(09/22)：金子　務「グラスゴー大学と明治日本」

明治の科学技術政策の中心となった工部大学校（東大工学部の前身）は、スコットランド、グラスゴー大学出身の若手指導者ダイエル（ダイヤー）によって整序展開されたが、当時のグラスゴー大学で新興のエネルギー学の形成にあたっていたランキン教授とW.トムソン教授が、伊藤博文らに推薦した結果である。18 世紀の同大学は国富論のアダム・スミスや潜熱発見のブラック教授、ジェームズ・ワットらが居て、18 世紀の初期産業革命の起点の一つになっていた。明治期に同大学に留学した日本人科学技術者も多い。明治以降の日本の科学技術の性格を特徴づけた大学として、お話したい。

明治政府が工部省を設置して、工学・勧工・鉱山・鉄道・土木・灯台・造船・通信・製鉄・製作の10寮と測量司を置いたのは、新設1年後の1871(明治4)年8月である。工部

寮に工学校が設立され、1877(明治10)年には工部大学校と改称され、2年後には33人の1期卒業生をだす。うち11名は直ちに外国留学を命じられた。そのうち南清（土木）・高山直質（機械）・志田林三郎（電気）・高峰譲吉（化学）・三吉普六郎（造船）の5人はグラスゴー大学に学んだ。1910年までなら同大留学生は11人を数える。教師陣の多くは工部省お雇い外国人で、その人数は、1871～79（明治4～12）年が130人以上、ピークは1874(明治7)年の255人である。うち190人の国別集計ではイギリスがダントツで半数を占め、中でもスコッツのグラスゴー大学関係者が目立つ。

なぜ日本にスコッツ系お雇い外国人が多いか、といえば、1872（明治5）年岩倉使節団副使の伊藤博文がグラスゴー大学を訪ね、W.トムソン教授（William Thomson,1824～1907、後のケルヴィン卿Lord Kelvin）と技師出身で工学系のランキン教授（William John Macquorn Rankine,1820～72）の助言で、鍛冶屋出身で同大初の理学博士（BSc）となり、翌1873年には修士（MA）を獲得する予定の俊秀ダイエル（Henry Dyer,1848～1918）を、日本の工学教育の指導者として選んだからである。ダニエルはランキン教授の弟子で、山尾庸三の友であった。山尾は1863(文久3)年に井上馨、井上勝、遠藤謹助、伊藤博文らと渡英。1870(明治3)年まで7年間もイギリス工業界を実地調査し、帰国後、横須賀製鉄所、官営塩釜製鉄所など工部省の工部大輔として計画・事業責任者になった。伊藤はこの山尾から、ダニエルの名を聞いていたにちがいない。ダニエルは翌1873年6月3日付けで工部省教師になり、やがて工部大学校都検（教頭）兼教授として1882(明治15)年まで計136人の学生を指導した。

参考資料

●グラゴー大学（1840年）：英国初の欽定工学教授職（Regius Professor of Civil Engineering and Mechanics ）設置（近代の欽定講座は1807年導入。古くはヘンリー8世がオックスブリッジとスコットランドのいくつかの大学に導入）。初代：1840年8月（ゴードン教授Lewis Dunbar Brodie Gordon）。2代：1855年11月～72年（ランキン教授William John Macquorn Rankine）。3代：1873年～（ジェームス・トムソン教授James Thomson）

出典：金子　務「古くて新しい蒸気問題の旅から」『KAGAKU』Jun.2012 Vol.83 No6,PP.0662-0670.

注）講師（金子務）は科学史家。

『私たちの世界動物記 3 ゴリラ』三十書房 1963)

『廃物を科学する 大量消費時代への挑戦』 早川書房 1965

『宇宙からの声がきこえる 異星間通信と宇宙文明』 大日本図書 1977.12（大日本ジュニア・ノンフィクション）

『アインシュタイン・ショック 河出書房新社』 1981.7 のち岩波現代文庫

『思考実験とはなにか その役割と構造を探る』 講談社 1986.3（ブルーバックス）

『科学技術をどう読むか 文科系人間のための 100 冊』 マネジメント社 1987.4

『アインシュタインはなぜアインシュタインになったのか』1990.4（平凡社・自然叢書）

『ガリレオたちの仕事場 西欧科学文化の航図』 筑摩書房 1991.8（ちくまライブラリー

『さらばアリストテレス エピソード科学史異聞』 1993.4（平凡社・自然叢書）

『宇宙観の歴史と人間』 放送大学 1995.3

『アインシュタイン劇場』 青土社 1996.9

『宇宙像の変遷と人間』 放送大学 2000.3

『ジパング江戸科学史散歩』 河出書房新社 2002.2

『江戸人物科学史 「もう一つの文明開化」を訪ねて』 2005.12（中公新書）

『オルデンバーグ 十七世紀科学・情報革命の演出者』 2005.3（中公叢書）

『街角の科学誌』 2007.8（中公新書ラクレ）

『宇宙像の変遷 古代神話からヒッグス粒子まで』 左右社 2013.12

●第60回(11/11)：井野博満「原発をめぐっての学者の責任を考える」

昨年の11 月から今年9 月の原子力安全・保安院終了までの1 年弱、「ストレステスト」と「高経年化」の二つの意見聴取会の委員になった。そこでの経験は、保安院という役所の姿勢もさることながら、委員として参加した学者たち、とくに、今もって原発推進に疑いをもたない原子力村本家出身の学者たちの姿をまざまざと知る機会となった。講演では、

原発の再稼働や安全審査の在り方、40 年廃炉ルールなどの社会的・技術的問題についてお話しするとともに、原発を巡る思想状況を考察するなかで、辛うじて彼らのように節操を失わずに済んだ自分史についても話そうと思う。
・原発をめぐる闘争が続いている　・原発は経済的にも損な選択では？　・政府の「核心的エネルギー・環境戦略」　・ふらつく政府の方針　電力業界は原発建設を続けるつもり・規制委員会の発足　・原子力規制庁　新安全基準の策定　・ストレステスト「審査しない」　・ストレステストの何が問題なのか　・「安全に関する総合評価」になっていない　・再稼働ほぼ失敗したストレスレテスト　・原理的にすべての原発は危険　・原発と核兵器は表裏一体　・崩壊熱　地震・津波の危険が大きい原発　・地震に見舞われ損傷した原発　福島第一原発の現状　・防災対策が困難な原発　放射能汚染予測地図の公表　老巧化した原発と寿命（40 年）・アメリカの原発の寿命（運転許可期間）　・高経年化評価項目（経年劣化事象）・金属材料の劣化原因　・・・等々。

注）講師（井野博満）は材料工学者。私が東大宇宙航空研究所に在籍していた時以来の同系統の先輩材料工学者。現役時代に東大内部から御用学者に対する内在的批判を展開していた良心的科学者の典型。現在は「柏崎刈羽原発の閉鎖を訴える科学者・技術者の会」代表で原子力市民委員会規制部会メンバー。多忙をきわめる。若い時代、同氏のような方が近くにいたら宇宙研を辞めなかったかも知れない。これも人生の宿命。

著書

・星野芳郎編『日本の技術者－合理化と近代化の嵐に抗して－』分担執筆（勁草書房、1969）

・武谷三男編『狭山裁判と科学』分担執筆（社会思想社教養文庫、1977）

・井野博満他著『アモルフォス材料』（東京大学出版会、1985）

・筆宝康之・井野博満・飯島善太郎『現代技術と労働の思想―漂流の時代を生きるために』（有斐閣、1990）

・里深文彦責任監修『90 年代のテクノトレンド』共著（洋泉社、1990）

・竹内伸・井野博満・古林英一『金属材料の物理』（日刊工業新聞社、1992）

・井野博満『材料科学番外地』（ムイスリ出版、1998）私家版、評論集

・エントロピー学会編、井野博満・藤田祐幸責任編集『「循環型社会」を問う』（藤原書店、2001）

・佐久間健人・井野博満『材料科学概論』（朝倉書店、2002）

・エントロピー学会編、白鳥紀一・丸山真人責任編集『循環型社会を創る』分担執筆（藤原書店、2003）

・原発老巧化問題研究会編『老朽化する原発－技術を問う－』共著（原子力資料情報室、2005）

・原発老巧化問題研究会編『まるで原発などないかのように』共著（現代書館、2008）

・現代技術史研究会編、井野博満・佐伯康治責任編集『徹底検証 21 世紀の全技術』（藤原書店、2010 年）

・井野博満編著『福島原発事故はなぜ起きたか』（藤原書店、2011）

・エントロピー学会編『原発廃炉に向けて：福島原発同時多発事故の原因と影響を総合的に考える 』分担執筆（日本評論社、2011）

・石橋克彦編『原発を終わらせる』分担執筆（岩波新書、2011）

・黒田光太郎・井野博満・山口幸夫編『福島原発で何が起きたか―安全神話の崩壊』（岩波書店、2012）

・茨木泰貴・井野博満・湯浅欽史編『場の力、人の力、農の力－たまごの会から暮らしの実験室へ』（コモンズ、2015）

・柏崎刈羽原発の閉鎖を訴える科学者・技術者の会」代表

・原子力市民委員会規制部会メンバー

2013 年

●第 61 回(01/19)：金森　修「原発事故以降の日本の社会の対応についての私見―生命論と社会哲学の観点から」

本来私は原発の関係者では全くなく、一介の哲学者にすぎない。本当なら、この種の主題で話すことなど、したいとは思わない。しかし原発事故後の我が国の社会の対応の仕方

に、或る重大な文化的規範の破壊がみられるという印象が拭いがたく、非力を省みず、現時点で私がいいうることを述べてみたい。本質的にはきわめてナイーブな話になると思う。しかしこの種のナイーブで直截的な話をせざるを得ない時というものがあり、今がその時の一つなのだろうと思っている。

Lucius A.Seneca,cBC1-AD65　哲学・倫理　自由人の教養　反セネカ：知の自律　一転して：自由な勉学の批判　セネカへの違和感　倫理の圧政？　古典的科学館の成立　お説教？　実証主義　知識自体の〈倫理性〉　法則・予測　経験主義　コントの特徴　実証的精神　科学哲学と社会哲学　自然科学の哲学　コントの影響　自然科学の哲学　知識欲の純粋性認知　『科学の将来』1890　科学の古典的イメージの確立　『科学の将来』　科学と個人的栄達　科学と国家　コントとルナンから　ルナンのまとめ　一九世紀に成立する科学者像　人類の科学　若干の理念性　古典的科学観の変質　マンハッタン計画　個人から集団へ　科学倫理学へ　主流派の行動　福島第一原発事故後の対応がもつ科学思想史的含意　放射性障害の特殊性　客観性規範への侵害　マンハッタン計画の影　御用学者　ICRP　客観性の執行　事の重大性　科学倫理学　脱原発に向けて　原発の問題点　脱原発の大方針　今後

注）講師（金森　修）は哲学者（フランス科学思想）。当日の懇話会は大変に盛況であった。ちょっと分かりづらいが、PPTの項目を並べた。御容赦願う。この10数年における科学史・科学思想史の世界で多様な研究者を統括し、精力的に世に出してきた稀有な哲学者。その証拠に下記の多数の重厚な編著を刊行してきた。猛烈な多産の著述家。残念なことに今年他界された。彼が私に残した宿題は多大なものがある。切望していた湘南科学史懇話会の講演を何年も待たせてしまったが、とにかく実現できてほっとしている。陰ながらの支援者であった。

著編著：

『フランス科学認識論の系譜 —— カンギレム、ダゴニェ、フーコー』（勁草書房 1994）
・『バシュラール —— 科学と詩』（講談社 1996）
・『サイエンス・ウォーズ』（東京大学出版会 2000：　新装版　2014：新しいあとがき付き）
・『負の生命論 —— 認識という名の罪』（勁草書房 2003）
・『ベルクソン —— 人は過去の奴隷なのだろうか』（日本放送出版協会 2003）
・『自然主義の臨界』（勁草書房 2004）
・『科学的思考の考古学』（人文書院 2004）
・『遺伝子改造』（勁草書房 2005）
・『病魔という悪の物語 —— チフスのメアリー』（ちくまプリマー新書 2006）　・『〈生政

治〉の哲学』（ミネルヴァ書房 2010）
・『ゴーレムの生命論』（平凡社新書 2010）
・『昭和前期の科学思想史』（勁草書房、2011）
・『動物に魂はあるのか』（中公新書 2012）
・『科学の危機』（集英社新書 2015年）
・『知識の政治学』（せりか書房 2015）
・『科学思想史の哲学』（岩波書店 2015）
・『昭和後期の科学思想史』（勁草書房、2016）
・『エピステモロジーの現在』（慶應義塾大学出版会 2008）
・『科学思想史』（勁草書房 2010）
・『合理性の考古学 —— フランスの科学思想史』（東京大学出版会　2012）
・『エピステモロジー —— ２０世紀のフランス科学思想史』（慶應義塾大学出版会　2013）
・『昭和後期の科学思想史』（勁草書房2016）

翻訳：フランソワ・ダゴニェ『具象空間の認識論 —— 反・解釈学』（法政大学出版局 1987年）　・ジョルジュ・カンギレム『反射概念の形成 —— デカルト的生理学の淵源』（法政大学出版局 1988 年）　・ガストン・バシュラール『適応合理主義』（国文社 1989 年）　フランソワ・ダゴニェ『面・表面・界面 —— 一般表層論』（法政大学出版局 1990 年）　・ジョルジュ・カンギレム『科学史・科学哲学研究』（法政大学出版局 1991 年）　・フランソワ・ダゴニェ『バイオエシックス —— 生体の統御をめぐる考察』（法政大学出版局 1992 年）　・フランソワ・ダゴニェ『病気の哲学のために』（産業図書 1998 年）　・ロシュディ・ラーシェド「科学史　——科学認識論と歴史との狭間で——」『みすず』第 460 号、1999 年 7 月、pp. 25-37.　・「アレクサンドル・コイレ『天文学革命、コペルニクス、ケプラー、ボレッリ』　・『ミシェル・フーコー思想集成』第 I 巻（筑摩書房 1998 年）田崇との共訳）ならびに解題　『思想』第 946 号、2003 年 2 月、pp. 31-60. など。

●第62回(04/20)：白石　征「前衛と抒情の語り部・・寺山修司の現風景」

もし、誰かが私に、祖国か、友情か、どっちかを裏切らなければいけないとしたら、「どっちを裏切るか」と質問したら、私はためらわず、「祖国を裏切る」と答えるだろう。 ー寺山修司ー彗星の如く戦後の昭和を駆け抜けた、寺山修司の活力あふれる芸術活動を間近の編集者として支え、没するまで交流を続けてきた白石征さんが、寺山歿後30 年にして今回、寺山自身の人生と作品とのかかわりを解明、47 年のその生涯を巡って、寺山作品の背

後に隠されていた、黙示録ともいうべき寺山修司の原風景について、初めて語ります。
注）講師（白石征）は劇作家・演出家。本講演は、白石征『望郷のソネット―寺山修司の原風景』（深謝叢書、2015 年 8 月 15 日）の一部に収録された。寺山修司と深い交流があり、寺山の書物をたくさん刊行してきた。編集者として、寺山修司に関する書籍を多数出版、「寺山修司著作集」全５巻を山口昌男と共同監修。著書「新雪之丞変化」「小栗判官と照手姫」。1990 年、演劇の世界に転身。「新雪之丞変化－暗殺のオペラ」、「落花の舞―暗殺のロンド」を作・演出。1996 年、藤沢遊行寺を拠点として、まつりの演劇〈遊行かぶき〉を提唱、演劇活動を本格化。「小栗判官と照手姫」「一遍聖絵」「しんとく丸」、「中世悪党傳」三部作などで高い評価を得る。他に花田清輝「泥棒論語」「ものみな歌で終わる」、寺山修司「十三の砂山」、泉鏡花「爪の涙」、幸田露伴「五重塔」も舞台化している。2011 年、遊行かぶきの最新作として「さんせう太夫―母恋い地獄めぐり－」を発表。さらに 2012 年、説経節「信太妻」より「葛（くず）の葉」を発表。

著書
・白石　征『原作・三上於菟吉　暗殺のオペラ　新雪之丞変化』（新水社、1990）
・白石　征『母恋い地獄めぐり―しんとく丸/さんせう太夫』（あんず堂、1994）
・白石　征『小栗判官と照手姫』（あんず堂、1997）
・山口昌男・白石征監修『寺山修司著作集』全５巻（クインテッセンス出版、2009）
・白石征『望郷のソネット―寺山修司の原風景』（深謝叢書、2015年）

●第63回(11/16)：坂野　徹「「辺境」を「フィールドワークする―宮本常一と九学会連合の初期調査をめぐって」

はじめに：これまで仕事、現在の主要関心、今後の研究計画等。
１．九学会とは何か
２．宮本常一と九学会連合
３．九（八）学会連合と朝鮮戦争
４．宮本常一がみた朝鮮戦争
５．対馬は日本である
６．「寄り合い」と九学会連合
７．小括―対馬調査の意味
８．結びにかえてーその後の学会連合と共同体の展開
表１．八学会対馬共同調査の編成（1950年8月段階）

敗戦後間もない1947年、日本人類学会・日本民族学協会・民間伝承の会（49年より日本民

俗学会）などのフィールドワーク系の諸学会が集まり、九学会連合という学術団体が結成された（当初は六学会連合）。九学会連合はその後、日本列島各地で計11回にのぼる共同調査を実施し、戦後日本の学術界に大きな足跡を残すが、本講演では、その初期調査の展開と、これらの共同調査に参加した宮本常一（民俗学者）をはじめとする研究者の足跡をたどる。

目と鼻の先に位置する朝鮮半島で戦火が上がる状況下で実施された対馬調査（1950～51年）、「調査地被害」の問題を引きおこした能登調査（1952～53 年）、日本復帰直後に行われた奄美調査（1955～57 年）の検討を通じて、「辺境」を対象としたフィールドワークの政治性について考えたい。近年、日本列島の周縁部で領土をめぐる緊張が高まっているが、本講演では、日本の「辺境」「周縁部」を対象とした学術調査の検討を通じて、「日本」「日本人」という枠組みが問い直されることになるだろ。

注）講師（坂野徹）は人類学史家。辺境の文化と思想にただならぬ関心をもち、徹底したフィールドワークを基調とする。本懇話会の講演を実施するにあたり上記本を熟読することになり、学問的営為にもさまざまな分野があることを知り、多大な影響を受けている。現在沖縄在住で各種のフィールワークにもとづく人類学史の研究を行っておられる。

単編著

『帝国日本と人類学者：1884―1952 年』（勁草書房、2005）

『フィールドワークの戦後史：宮本常一と九学会連合』（吉川弘文館、2012）

（編著）

『帝国を調べる―植民地フィールドワークの科学史』（勁草書房、2016）

（共編著）

『帝国の視角／死角―〈昭和期〉日本の知とメディア』（青弓社、2010）

（共著）

市野川容孝他編『生命科学の近現代史』（勁草書房、2002）

竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを超えて』（人文書院、2005）

黒川みどり編『〈眼差される者〉の近代―部落民・都市下層・ハンセン病・エスニシティ』（解放出版社、2007）

竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』（岩波書店、2009）

金森修編『昭和前期の科学思想史』（勁草書房、2011）

国際常民文化研究機構編『第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』（酷さ常民文化研究機構、2013）

（年度内刊予定）

加藤茂生他編『村上科学論のゆくえ』（新曜社、近刊）

坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する（２）科学と社会の知』（東大出版会、近刊）

●第 64 回(09/14)：柴田耕太郎・堀千恵子・中村有以・菊池祥子「現代日本の翻訳出版事情最前線」

「翻訳事情概観」ー・前説（職業としての翻訳、翻訳は商品）　・翻訳業界小史（戦前：国家運営のための翻訳から知識・教養のための翻訳へ、般若心経、原典にあたる、世界文学全集　戦後:大衆に身近な翻訳から一大産業へ（高学歴化、７万点、翻訳会社、通じる英語）・翻訳の分野（産業翻訳、出版翻訳、映像翻訳、舞台翻訳、花形は出版翻訳、市場はない舞台翻訳）　・翻訳の対価（タダから１億円まで、下訳と上訳、出版翻訳の公式）　・料金の算定基準（産業翻訳の報酬、映像翻訳の報酬、舞台翻訳の報酬）　・翻訳の評価（「人民の人民による人民のための政治」は悪訳か、誤訳と悪訳の違い、文法的な誤り、語義の取り違え、事実に合致しない、読みにくい、意味が取りにくい）　・翻訳者に必要なもの（文法力、論理力、教養力、表現力、文脈、常識、専門知識、音読ススメ、営業力、編集者は何をしているのか、訳したいものがあるのか、四要素を習得しているか、一途にあたること）

注）講師（柴田耕太郎）は翻訳者養成事業家。昔からの異色の友人。

［映画翻訳］

『君に愛の月影を』TBS 放映 1976 年

『ナンバー』TBS 放映　1976 年

『オープニング・セレモニー』シアター・テレビジョン放映　1996 年

［舞台翻訳］

『邪か魔し女』劇団　昴　1976 年

『オクラホマ』宝塚歌劇団　1996 年

『私もカトリーヌ・ドヌーヴ』ギー・フォワシイ・シアター　2010 年

［出版翻訳］

『ジャズ・ヴォーカルの発声』東亜出版社　1997 年

『ブレヒト』現代書館　2000 年

『モリエール傑作戯曲選集』鳥影社　2015 年

［著書］

『英文翻訳テクニック』筑摩書房　1997 年

『翻訳力錬成テキストブック』日外アソシエーツ　2001 年

『翻訳家になろう』青弓社　2016 年

［雑誌寄稿］

「翻訳で日本語を学ぶ」時事英語研究 2006 年
「翻訳コンクール選評」アルク　2007 年
「英語を精確に読む」ジャパンタイムス増刊　 2008 年

注２）講師（堀千恵子）は翻訳家（英語）
翻訳書
・オリソン・S・マーデン『オリソン・マーデン成功の原理原則』（ダイヤモンド社、2012 年11 月）
・J・P・テロッテ『ディズニーを支えた技術』（日経BP 社、 2009 年9 月）
・ジョー・サッター；ジェイ・スペンサー『747―ジャンボをつくった男』（日経BP 社、2008 年3 月）
・マーティン・リース『今世紀で人類は終わる？』（草思社、2007 年5 月）
・リチャード・テンプラー『なぜか出世する人の仕事のルール－「できる人」より、「ふさわしい人」になれ』（ダイヤモンド社、2006 年12 月）
・マリリン・ポール『だから片づかない。なのに時間がない。－「だらしない自分」を変える7 つのステップ』（ダイヤモンド社、2004 年6 月）[12 万部のヒット作品]
・デボラ・アナポール『ポリアモリー ――恋愛革命』（インターシフト[発行]、河出書房新社[発売]、2004
年2 月）

注３）講師（中村有以）は翻訳家（英語）
　翻訳書
・『BBC20 世紀クロニクル』vol.1～vol.4（アルク、2006～2007）
・『LIFE MICHAEL 1958-2009』（ライフ誌編、ディスカヴァー・トゥエンティワン、共訳、2009）
・『ヴァンパイアアカデミー』1、2（リシェル・ミード著、ソフトバンク文庫、2009、2010）
・『特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ―米軍兵士が見た沖縄特攻戦の真実』（マクスウェル・テイラー著、ハート出版、2010）
・『レディー・ガガのすべて』（モーリーン・キャラハン著、ソフトバンククリエイティブ、2010）
・『サミー・ヘイガー自伝 RED 俺のロック人生』（サミー・ヘイガー、ジョエル・セルヴィン著、ヤマハミュージックメディア、2012）
・『ONE DIRECTION 5 人の物語～夢みたステージ～』（ダニー・ホワイト著、カンゼン、2013）
・『クラフトワーク』（デヴィッド・バックリー著、シンコーミュージック、共訳、2013）

注３）講師（菊地祥子）は翻訳家
2004 年イギリス、バーススパ大学卒業。英検1 級、通訳ガイド免許、TOEIC980 点の「英語資格三冠王」。メーカー製品開発部にて仕様書等の翻訳に携わる。現在、2013 年度：柴田耕太郎主宰『英文教室』の全日制「翻訳ジム」に在籍中。

●第65回(11/16)：渡部　武「『天工開物』の書誌学的研究―三枝博音氏の研究継承の試み」

Ⅰ　はじめに（報告要旨）
Ⅱ　宋応星の郷里
Ⅲ　宋氏一族の系譜
Ⅳ　宋応星の事跡年表
Ⅴ　『天工開物』の書誌
Ⅵ　貝原益軒と『天工開物』
Ⅶ　明和本と『天工開物』
Ⅷ　陶渉園本『天工開物』
Ⅸ　尊経閣旧蔵揚素卿本の行方　Ⅹ）
むすび―技術移転を考える

『天工開物』は17 世紀初頭に宋応星（1587-1666？）によって著わされた産業技術書で、宋応星は明王朝と清王朝とが交替する激動期に生きた知識人である。従来、彼についての伝記史料はほとんど知られておらず、その主要著作である『天工開物』でさえ、本国の中国では忘却されていた。ところが、わが国では17 世紀末には中国から将来され、明和八年（1771）に大坂で翻刻されることによって、以後大いに流行した。

その内容は農業、養蚕、製塩、製糖、製陶、製紙、鉱物の製錬から兵器の製造にいたるまで、挿図を付して詳細に解説している。本書に対して科学史的な研究のメスを入れたのは、三枝博音氏（1892-1963）であった。三枝氏は、本書の科学史的な価値を世界の科技史の中で最初に位置づけたばかりでなく、周到な書誌学的な研究も行なっている。

しかし、1960 年代初頭に宋応星に関する新たなる史料が発見されるに至るや、その著者の実像がより明らかになっていった。今回の報告では、三枝博音氏が踏み込めなかった『天工開物』の書誌学的問題、及びその著者宋応星についての人物像を紹介してみたい。（はじめに）

注）講師（渡部　武）は中国古代史家。この『天工開物』に、科学史の観点から本格的にメスを入れたのが科学史家・三枝博音氏（1892～1963）でした。周知のように三枝氏は、西洋と東洋の科学・技術に関する先駆的な業績をあげた研究者でした。渡部さんには、こ

の三枝氏の広汎な研究をふまえて、新たな栄応星の人物像を語っていただきました。中国科学史に改めて関心を向ける動因となったのも事実です。

渡部さんの『天工開物』の講演以前から、私はこの書物も紹介している中国科学技術史研究の巨匠、ジョゼフ・ニーダム（1900〜1955）の壮大な大著『中国の科学と文明』全 11 巻（新思索社）を完読することになりますが、これまたシンドイ読書を自らに課すことになりました。なお、同大著の膨大な索引を若い時代（早大博士課程）の渡部さんが作られていたことを知りました。

この過程で、思わぬ人物との遭遇もありました。フランチェスカ・ブレイ『中国農業史』（古川久雄訳、京都大学学術出版会、2007 年）の著者の消息にまつわる話です。中国古代農業史の女性研究者であるブレイは、1985 年、バークレーの国際科学史会議で会ったことがあり、その後の動向が気になっていたのですが、渡部さんはブレイと旧知の関係だったのです。『中国農業史』の日本語訳を査読する仕事に深く関わられたことを知り、不思議な縁を感じて驚きました。

著書

1975年02月　『千社札』淡交社（共著）
1985年07月　『海を渡った日本の焼物』ぎょうせい（共著）
1987年03月　『『四民月令』－漢代の歳時と農事－』（東洋文庫467）平凡社
1989年01月　『中国の稲作起源』六興出版（陳文華氏との共編著）
1991年11月　『画像が語る中国の古代』（イメージ・リーディング叢書）平凡社
1994年10月　『雲南の生活と技術』（アジア文化叢書）慶友社（共編著）
1996年12月　『雲南少数民族伝統生産工具図録』（アジア文化叢書）慶友社
1999年03月　『四川の考古と民俗』（アジア文化叢書、共著）慶友社
2000年03月　『西南中国伝統生産工具図録』（アジア文化叢書、渡部順子との共著）
2002年09月　『中国青蔵高原東部地域における羌族・チベット族の生活文化研究』中間報告書（霍巍との共編著）、東海大学印刷業務課
2003年08月　『四川の伝統文化と生活技術』（アジア文化叢書、霍巍・C.ダニエルスとの共編著）慶友社

2014 年

●第 66 回(02/08)：猪野修治「『安藤昌益全集』と東條栄喜氏の昌益研究 40 年」、竹中英俊「野間秀樹編『韓国・朝鮮の知を読む』について」・「16 世紀末日本の活字印刷から福澤屋諭吉まで」、柳田尚也「西田幾多郎記念館を訪問して」

注）当日は、大雪のため関東地域の交通機関は大混乱し中止した。藤沢市はまさに雪国となった。当日の朝になって中止の判断をしたため、東條さんには大変に御迷惑をおかけした。そのため、上記の近隣のメンバーが報告をして懇談した。なお、滋賀県からの参加者があった。この方は前夜から藤沢駅近くに宿をとられ参加してくださったのである。遠方からの参加者を懇親会で厚く歓迎したことはいうまでもない。ほんとうに忘れがたい懇話会となった。

●第67回(03/02)：東條栄喜「安藤昌益の循環思想と自然概念」

はじめに；安藤昌益研究は三国志時代（1970- 90 年代）から群像の時代へ
１．「四行」と「三回」による包括的循環思想―概念装置と大改革・大拡張
1.1）陰陽五行を批判的の拡張改変
1.2）通横逆も取り込み「四行」と併立統一
1.3）「互性」の「生生循環」＝悪循環との区別をつける
２．三浦梅園・伊藤仁斎と昌益の大きな違い
2.1）梅園は五行を廃棄し陰陽改革だけで理論構築
2.2）昌益と梅園への狩野亨吉と三枝博音の対照的評価
2.3）安藤昌益と伊藤仁斎の自然論の大差
３．循環諸原理の設定
3.1）循環順序と非可逆性の原理
3.2）循回遅速と邪毒の発生原理
3.3）「転・定」の逆回と交感原理
3.4）「気道・味道」互生の原理
3.5）抽出・復土の人為循環原理
４．昌益の自然概念：実在総体であり生生運動である
4.1）昌益は「自然」の語を名詞形と動詞形で両義的に使用
4.2）“自然とは何か”と問い回答を与えている
4.3）伝統的な「自然」語法との比較
4.4）「自然活真」＝根源・生動との複合概念
５．漢字文化圏の自然概念の多義的展開：「自ずから然り」が総てではない―魏晋時代から自然＝天地万物の語義が生まれた―
5.1）自然＝根源的存在・生成原理としての語義
5.2）自然＝天地万物として語義
5.3）三枝博音氏の「自然」把握

5.4）中国文学者の自然概念把握から

６.「通横逆」自然運気論の環境観を現代に活かす―「天体―地球―大地」階層連結思考の重要性

安藤昌益は近世中期の代表的思想家の一人で、自然思想・社会思想・医学論・音韻言語などの諸分野できわめて特徴的な思想・理論を展開した。20 世紀の半ばまでは、主に封建支配秩序を否定した民主・平等の労働思想家として評価されたが 1970 年代以後は世界的に環境保全の思潮の高まりを背景に環境思想家としても高く評価されるようになった。また医学関係の重要な史料が相次いで発見されたことで、昌益医学論も解明され、この方面でも独自性と先進性が解明されるようになった。

本講演ではそれら総ての方面を取り上げることは出来ないので、主として昌益の自然思想・環境思想の基礎を為している“生生循環”の思考の特徴を整理して提起し、昌益の“自然”概念の特徴と、漢字文化圏における、その背景史的思考について報告することにしたい。伝統的な陰陽五行論の変革の仕方について、昌益と三浦梅園の極めて対照的な違いとその成果についても言及したい。（はじめに）。

注）講師（東條栄喜）は科学史家で安藤昌益研究家。20 世紀の後半から、環境問題に世界的な関心が向けられ、日本では江戸中期の思想家・安藤昌益（1703～1762）の実践的な思想に関心が高まっています。自然思想にとどまらず、社会思想・医学論・音韻言語論を展開し、今世紀ますます世界的に注目されている思想家です。画期的な『安藤昌益全集』全 21 巻＋別巻１（22 分冊）＋増補篇 3 巻（農文協）が完結したことが、その証です。

東條氏はもともと、東京大学原子核研究所で加速器・イオン源などの開発に従事する科学技術者です。その科学技術の最先端の世界にいる同氏が、それと並行して安藤昌益の研究に一貫して関わっていることに、たいへん興味を抱きました。安藤昌益の著作の学問的核心を忠実に再構成して論じた重厚な『互性循環世界像の成立―安藤昌益の全思想環系』（御茶の水書房、2011 年）を書かれています。

その東條氏の研究論考を紐解くと同時に、この際、思い切って、先の『安藤昌益全集』全 21 巻の読み込みを開始しました。その苦行にも似た読み込みと思索の日々は、延々と続きました。

現在の大館市に生まれ八戸市に出て医師になった昌益は、自然破壊に手をそめる人間のあくなき欲望の実態を見た後、自然（農業）に寄り添う自然思想家として、あらゆる封建的身分制や伝統的思想家を徹底的に批判しました。その壮絶とも言える徹底的な批判は驚愕するばかりです。そこで語られる昌益ならではの独特な自然と人間の見方には、圧倒されるばかりでした。

安藤昌益思想研究の著作

１）原典解読の著作

① 安藤昌益と千住宿の関係を調べる会編：『靜谿謾筆』（京都大学文学部蔵本）（2007）；同会刊行

本稿は幕末の江戸に於いて、昌益の医学思想を継承した橋　榮徳の雑記録の一つである。

この中に昌益の哲学思想・医学思想・処方などを含んでおり、昌益の思想・医学が江戸の地に於い　て連綿と明治初頭まで受け継がれた証拠となる、重要な一史料である。

その解読の基礎原稿を東條が担当・作成し、解読班 7 名の会員の共同作業で完成させた。完成に伴　い、私は同会を退会した。（なお橋　榮徳には他にも関連稿本があるが、ここでは省く）

② 安藤昌益の会編：『良中子神醫天眞』（早稲田大学蔵本）（2012）；同会刊行

今世紀に入って、早稲田大学図書館が所蔵する古典籍の Web での公開を始めたところ、其の中に　安藤昌益の医学原典を伝える、表題の重要な写本が含まれていたのを東條が発見し、解読（読み下　し・注釈・解説）の基礎原稿を作成した。石渡博明・東條・八重樫新治・山崎庸男の協同作業で完　成させた。これが昌益思想関連の原典として発掘された、2016 年現在の時点での、最新史料であ　る。（なお同じ表題の稿本が内藤くすり博物館にも所蔵されているが、内容は異なる。）

２）単行書（自著と共著を含む）

王守華・李彩華編：中日安藤昌益学術討論会文集『安藤昌益・現代・中国』（1993）；山東人民出版社

東條榮喜著：『安藤昌益の自然「正世」論』；農山漁村文化協会（1996）

東條榮喜著：『安藤昌益の自然思想』；安藤昌益と千住宿の関係を調べる会（2007）

東條榮喜著：『互性循環世界像の成立―安藤昌益の全思想環系―』；御茶の水書房（2011）

石渡博明・小島博紀・添田善雄編：『現代に生きる安藤昌益』；御茶の水書房（2012）

３）個別の昌益思想研究論考（代表的なものだけ抽出）

東條榮喜：安藤昌益の循環自然論と地域協働体論：直耕 No.4（1989）4-9；安藤昌益の会

東條榮喜：安藤昌益の自然循環論と再生循環論；えんとろぴい No.18（1990）1-4；エントロピー学会

東條榮喜：安藤昌益と王船山の自然理論；『安藤昌益　日本・中国共同研究』（1993）125-130；農山漁村文化協会

東條榮喜：安藤昌益の自然世思想への誤解を解く；えんとろぴい No.29（1994）61-64；エントロピー会

東條榮喜：安藤昌益とマルクスの過渡期論の相乗展開；月刊フォーラム（1994）4 月号 84-86；フォーラム 90's

東條榮喜：安藤昌益の協働社会構想（一）-（四）；人民の力（1996）No.607, 7-8; No.608, 11-12;

No.609, 9-10; No.610, 7-9；現代研究所
東條榮喜：先初期安藤昌益の新思想要素；昌益研究 No.9（通巻 No.49）（1999）48-59 ；安藤昌益研究会
東條榮喜：安藤昌益の世直し論から学ぶこと；QUEST　No.28（2003）13-14；オルタ・フォーラム
東條榮喜：安藤昌益の地域思想；『大館市先人顕彰祭全記録集』（2004）35-38；大館市の先人を顕彰する会
東條榮喜：安藤昌益の自然観と現代的意義；『世界と日本の政治経済の混迷』（2011）258-265；御茶の水書房
東條榮喜：世界に拡がる安藤昌益の直耕思想；『3.11 から一年　近現代を問い直す言説の構築に向けて』（2012）169-176；御茶の水書房
東條榮喜：安藤昌益の音韻言語論を考える；直耕 No.37（2015）2-8；安藤昌益の会

４）安藤昌益思想研究の不定期通信誌『互生共環』の編集発行

2000 年から随時編集・発行し、関係者に発信・発送してきた。2016 年 9 月現在、48 号まで発行。

なお 2012 年が安藤昌益没後 250 周年の節目に当たった事から、同誌 No.37 で「安藤昌益・狩野亨　吉研究文献目録　国内編」（1988-2012）約 300 篇分を、No.38 で「安藤昌益研究文献目録・海外編」（1988-2012）約 40 篇分を作成・掲載した。1987 年までの文献目録は『安藤昌益事典』（1987, 農文協）に詳しい。

（補足事項）安藤昌益の思想研究を続けてきた理由

私の本職は素粒子・原子核研究分野の加速器科学・技術の職務だったが、1968-1970 の大学闘争　　を契機に、伝統的民衆思想の内発的展開に関心を深めて昌益の思想と集中的に取り組むようになり、　本職と併せて半世紀にわたって、専ら民間の学術活動として継続してきた。昌益の思想研究は、アカデミズムの世界で行うよりも、民間学として展開する方が有意義だと思っている。

●第68回（04/06）：竹中英俊「福澤諭吉の日本の近代出版」

日本における出版状況は、電子書籍の先行きが見通せないまま、通常書籍の売上も1996年をピークに、連続的に減少している。今後、出版と本はどうなるのであろうか。このような状況にあって、日本における近代出版の祖と言うべき福沢諭吉に遡って出版を考えてみたい、というのが、今回の懇話会の趣旨である。

福沢諭吉（1835−1901）は、「読む人＝書く人＝作る人」を一身に体現し、「人を育てる」

ことに最大の力を注いだ、明治期日本最大のメディア戦略家と呼ぶことができる。福沢諭吉は、自らを「読書渡世人」と称し、日本に「コピーライト＝版権」という考えを紹介し、また慶応義塾を興し、さらに福沢屋諭吉と名乗って自営出版を始め、ベストセラー『学問のすゝめ』を著し、慶応義塾出版局（のち、慶応義塾出版社）を作り、そして時事新報社を設立した人物である。

今回の懇話会では、このような広義の出版人としての福沢諭吉に焦点をあてて、彼の事績から、今、何を学ぶことができるか、探ることとしたい。

注）講師（竹中英俊）は編集者（元東京大学出版会）。本講演は竹中さんが、のちにさまざまな研究会（東工大、福澤諭吉協会、幕末史研究会）で講演をすることになる引き金となったものである。これは懇話会のひとつの「成果」といっていいのだろうか。

●第 69 回(08/24)：須藤一實「我が人生をかけた画家：山内龍雄」

山内龍雄（やまうち たつお）と描かれた哲学（1950～2013）。山内龍雄は1950年9月、北海道東岸の厚岸町上尾幌で生まれ、そこで育ち、そこに住み続け、画を描いた画家だ。彼の画はキャンヴァスを削って描くという独特のもので、1950 年、21 歳で初めて筆をとってから、まったくの独学で、亡くなる寸前まで描き続けた。彼が34 歳の時、画商の須藤一實と出会った。以降亡くなるまでの30 年間、画家と画商の二人三脚は続いた。

山内は画を描くためだけに生き、須藤は山内の制作と生活を支え続けた。山内の油彩画は油絵具を塗り重ねていく一般的な技法とは異なり、キャンヴァスが紙の様に薄くなるまで削って、絵の具をその奥まで浸透させるという独特のものだ。一枚の画を完成させるのに数年かかることもある。その上、その技法の完成までに長い時間を要した。30 年の間には数年間一枚も画ができない時もあった。それでも二人三脚は続き、ようやく2005年頃に削りによる技法の完成をみる。

その直後の2007年、二人の念願だったヨーロッパでの山内作品展観が実現する。ドイツでは「日本発の新しい絵画様式の誕生」と絶賛され、ヨーロッパから帰って後、2009 年の台湾での大規模な個展では、李登輝元総統から、「山内の作品は日本の精神そのものだ」と賞賛された。「70 歳頃には何か大きな仕事が出来そうな気がする」と言っていた山内は、2013 年12 月突然この世を去った。63 歳だった。

注）講師（須藤一實）は画商で山内龍雄芸術記念館長。山内龍雄（画家）は天才画家だ、と須藤一實（画商）と言う。そう思い込んだ須藤は山内に名実ともに人生をかけた。何十年も一切の生活費を送り続け、山内は北海道の広大な畑のどまんなかの古い一軒家で、情念を吐出しながら、24 時間、黙々と絵を描くことだけに没頭した。ここまでやるのか、と

いうほどの画家と画商のまさに人生をかけた真剣勝負の波風の立たない激しい関係と交流は想像を絶する。

だいぶ昔、その須藤と山内の膨大な量の往復書簡を見せてもらったことがある。その膨大な往復書簡をみた私は言葉がなかった。余人が入り込めない世界である。ところがこともあろうに、その山内が 2013 年 12 月、孤独死した。発見されたのは死後 7 日ほど後だった。天才画家（独身）の家族（親兄弟）は山内の絵に何の価値もないと判断し、更に須藤は責め続けられ、焼き場にも行くことを拒否された。

その紆余曲折を経て、須藤は山内だけの絵を展示する山内龍雄芸術館を自宅敷地内（藤沢市羽鳥）に自腹で建設したのである。そして残された往復書簡はいずれ須藤の親友の新戸雅章（作家、二コラ・テスラ研究所所長）の筆により世にでるはずである。いや、必ずださなければならない。実は冒頭の文章は須藤の文章でない。新戸の文章である。人間には役割分担というものがある。それでいいのだ。

須藤の講演は主宰者の私との対談のような感じになったが、参加者（聴衆）は須藤の情念を表出する言葉に、こころのどこかを揺さぶられたに違いない。

●第70回(10/04)：益田すみ子「木村駿吉の業績と生涯」

明治期に物理学者・技術者としての道を歩んだ木村駿吉（きむら・しゅんきち 1866－1938）について紹介する。幕末から明治にかけて、日本は西洋から制度化された科学技術を取り入れ、近代化を成し遂げたと言われる。しかし木村の生涯を通して、それだけではない日本の近代化の姿を見ることができる。木村の父は、木村摂津守喜毅（せっつのかみ・よしたけ 1830－1901）といい、幕府の海軍伝習所取締として日本の海軍の創設に関わり、西洋の科学技術を日本へ導入する入口で活躍し、また軍艦奉行として咸臨丸の太平洋横断を指揮し、初めて日本人の手による渡航に成功したことで有名である。木村の伯父も代々徳川将軍家の奥医師として公認された蘭医であった。

このように木村は、明治維新以前から西洋文化に触れ西洋風の雰囲気に満ちた家で育った。したがって、明治維新後の学校制度の中で初めて西洋文化に触れた多くの科学者・技術者とは異なる。また、父から受け継いだ伝統的な武家文化の中で、自立した個として公への奉仕の精神を大切にすることを学んだ。木村は、大学卒業後、第一高等中学校で教えるようになるが、このとき講義した内容を教科書や啓蒙書として出版した。その中の1 冊である『科学之原理』では、科学教育の導入に科学論や科学史を既にこの時代に教えていたことが分かる。また学生時代にキリスト教信徒となっていた木村は、第一高等中学校の教授であった24 歳の時に内村鑑三の不敬事件に巻き込まれ退職せざるを得なくなった。

その後アメリカへ留学し、そこで学んだ複素数を拡張した数体系である四元数に傾倒する。木村は、四元数は物理学の基礎とするべき数学であると考え、万国四元法協会の設立

に奔走した。明治20 年代末という大変早い時期に国際的な学会の創設を呼び掛けていたのである。帰国後は、第二高等学校の教授となるが、4 年後には海軍技師として無線電信機の開発に努力する。電磁気学からの発展として興味を持った無線電信機であるが、木村が開発した三六式無線電信機は、海軍の艦船に据え付けられ日露戦争で活躍した。このように、木村は学界の中枢を歩むことはできなかったが、だからこそ身軽に自らの科学への関心を追及することができ、積極的に学び活躍した。

そこには、明治人らしく科学技術による日本の近代化を信じ、科学研究による人類の幸福を求める気持ちがあった。しかしその姿には、木村が育った家に伝わる明治維新以前から続いている伝統的な武家の精神と早くから西洋文化に触れた父の影響もまた生きていた。異端ともいえる木村の生き方から、政府の手による科学技術導入とは異なる日本の近代化の側面を明らかにすることができる。

参考文献

益田すみ子「明治期の科学者・技術者の歴史的研究―異端の物理学者・技術者木村駿吉の生涯と業績」平成24年修士論文（東京工業大学社会理工学研究科経営工学専攻、指導教員・梶　雅範）

注）講師（益田すみ子）は元立教大学高等学校の物理教諭で定年退職後、1年ほど東工大の聴講生になり、翌年若者と同様に難関の大学院の試験に挑み見事に合格し、同大学院修士課程で上記論文を完成させ、現在は博士課程におられる（はずだ）。もう博士論文も完成したかも知れない。指導教官の梶さんは、益田さんに博士課程に進むように言った、と益田さんから聞いた。その年少の先生であった梶さんが他界したのだから、大変なことだったと推察する。

このことをもって私は深く共鳴し感銘を受ける。元同業者であったから、その大変さがよくわかるからだ。どうか、堂々たる博士論文を完成されることを期待している。それに比べれば、私はなんと、どろくさいヤクザな道を歩いてきたことか、と思う。

しかし、私はそれ以上でも以下でもない。いまやっていることがすべてである。あるとき、梶さんに「俺も大学院に入り、梶さんの研究室に入ろうかな、と冗談気味に言ったら、すぐさま「猪野さんのようなヤクザものは指導できない」という答えが返ってきた。それもそうだ、と納得した。数年前のことである（東工大前の居酒屋）。

2015年

●第71回(01/11)：加納　誠「環境物理学の栄枯盛衰」

以下の『物理学会誌』の投稿から今迄の“環境物理学の栄枯盛衰？“を語る他には何もない。と云うのは四十年以上に及ぶ猪野氏との付き合いが無ければ、以下の投稿も成し得なかったからである。その後の栄枯盛衰については、当日懐かしい映像も交えてお伝えするが、その背景は以下の投稿文に有り、それ以上でも以下でも無く今日に至っても色褪せない本音である。

・・・・・・

加納誠氏の講演「環境物理学の栄枯盛衰」から

――第71 回湘南科学史懇話会の印象記――

2015 年1 月18 日 東條榮喜（科学史・安藤昌益研究）

この小文は、去る1 月11 日に神奈川県藤沢市で開催された、加納 誠氏（山口東京理科大学教授を経て現在、地球環境緑蔭塾代表）の講演（湘南科学史懇話会主催）と質疑討論に参加した印象記である。大変有意義な講演と討論だったので、自分自身の問題意識と併せた感想を以下に書き留めておきたい。

（1）2001 年に日本物理学会に「環境物理」領域の新設を要望、しかし加納氏は1998 年3 月に物理学会内の分科会に「環境物理」が新設されるべく要望書を提出されたようだが、当時の新領域分科会設置の対象にならなかったことから、2001 年に改めて同学会誌へ「新領域「環境物理学」新設の提言」という表題の投書に及んだ。私も当時この記事を読んだが、傍観していた。物理研究者も環境問題を物理学の研究対象にして取り組むべきだという考えの人たちは、経済学者・市民活動家と共に1980 年頃に「エントロピー学会」を物理学会とは別に立ち上げて活動していた。私も1984 年頃にこの学会に入会したので、物理学会誌に載った加納氏の提言を見た当初は、“もう物理学会の中で旗揚げしなくてもいいのではないか、物理学会はどうせスペシャリストの集まりなのだから”というように受け取っていたためである。しかし今になってみると、それは不適切だったと感じている。日本物理学会とは対照的に、日本化学会の方は以前から環境汚染問題に直面していたので、2000 年には「グリーン・ケミストリー」のコンセプトを標榜して学会としての諸活動を始めていた。それに比べると確かに物理学会では環境問題全般を物理学および物理学会の課題として取り組む姿勢が無かった（原発・放射線など個別の事例はあるが）。

（2）2003 年に漸く「物理学史・物理教育・環境物理」の合同分科会が発足

加納氏たちの努力は漸く報われ、「環境物理」分野が2003 年から「物理学史・物理教育」と合同の分科会としてスタートしたようである。今回加納氏から楽屋裏の話を伺って、ここまでに到るには、かつて広重徹氏たちが物理学史分科会を設立するために尽力したのと同様の苦労があったことがかなりよく分かった。私は加速器物理分野の技術者なので加速器関連の学協会参加が主で、物理学会の年会分科会には必ずしも毎回参加しなかったが、参加の際はこの分科会にもできるだけ立ち寄って講演を吸収するように努めた（70歳代になり今は物理学会を退会したが）。エントロピー学会での議論の範囲が、その設立趣旨からして、物理以外の環境共生経済システムや市民運動の在り方、科学観・世界観の変革にまで拡がるのに比べて、

物理学会のセッションでの議論は、幾らか物理本位に絞られた分だけ厳密になったように思う。

（3）材料科学者の実績に基づいた環境教育と市民運動の展開

加納氏がこうした勇気ある行動に踏み切れた背景には、ご自身の環境問題打開への熱意や使命感があったためであろうが、それだけで無くご専門の材料科学分野での研究実績が支えになっていたと推察される。配布された資料によると、米国大学との提携も含めてエコマテリアルの開発とその熱物理特性の研究、金属水素系合金・合金液体の研究、深層海洋水・海洋生物を基にした緑蔭水開発、等を手がけて来られたようで、こうした研究実績が自ずと環境物理という学問の展開への内在的駆動力になっていったものと思われる。エントロピー学会の主導者の一人である槌田敦氏が核融合研究への内在的反省や熱機関の研究蓄積から環境への熱学的アプローチを深めていった経過に対応する背景と蓄積があったようで、その学問的自信に支えられて思い切った行動に踏み切れたと推察している。こうした科学者が山口県下での大学教育の傍ら、地域環境再生活動も積極的に展開して（緑蔭塾）、自ら水田耕作にも乗り出しているとのことで、いささか驚きと畏敬の念を持たざるを得なかった。――つまり安藤昌益的に云うと“直耕する物理学者”だ。すばらしい。私は新潟県の農家の出身であるが、今は体力も衰えて、交流団体の植樹活動などには参加しているが農作業には従事していない。

（4）エントロピー学会や他の環境物理学者との関係環境物理学について綜合的に論じた加納氏の解説論文「環境物理学と熱物理」（2007）を見ると、環境への氏の基本的な観点が伺える。エントロピー学会の基調であるエントロピー論・定常開放系の観点も取り入れると共に、これとは少し違った立場の中川和道・蛯名邦禎・伊藤真之氏著「環境物理学」や林 弘文ほか著「地球環境の物理学」の議論にも目配りしているように見受けられる。そして同論文の最後に次のように述べている：「資源－環境問題の基本的な構造の理解のために、熱物理学は重要な役割を担っている。開かれた能動定常系とその中での物質循環という概念は、熱物理学によって提供されたものである。しかし、定性的な説明を越えて定量的な理解に進もうとすると、少なくと も現在の熱物理学には限界があると言える。」

これが現在までの環境物理学に対する加納氏の評価のようで、エントロピー学会に象徴される熱物理学的把握の限界を超えた、更なる展開が必要だと意図されているようだ。おそらく、その故に物理学会内に環境物理学分科会を設置する必要性を人一倍強く感じたのであろう。2006 年に京大基礎物理学研究所で開催された環境物理学の研究会報告（2007）などを見ると、そこで取り上げられた話題や手法は、確かに新たな多くの課題を提起しているように思われる。

（5）若い研究者の環境物理分野での活動展開に関して

加納氏の講演後の質疑討論で若い研究者の方から、このような分野に関しては、若手が研究職に就いた当初から取り組むのは現状では大変難しく、すでに業績を上げて安定した地位に就いている人たちと同じようにはできにくい、といった趣旨の発言があった。その通りだと思う。それぞれポスドク期を経て、定職についてから環境物理と取り組むという事でも構わないのではないか――環境物理の分野での公募人事と

いうのは、現在の日本の学界では確立していないから、本業をやりながらこの分野をも手がけるという形態が当分続くであろうから。故・高木仁三郎氏の場合も東大核研の助手時代は研究に専心し、都立大助教授になってドイツで研究し、帰国したあたりから本格的に反原発運動を立ち上げた。人はみな、それぞれの状況下で自分に見合った活動スタイルを見出すのだと思う。

1）日本化学会ほか訳編：グリーンケミストリー；丸善株式会社（2000）
日本化学会編：環境科学 人間と地球の調和をめざして；東京化学同人（2004）
2) 加納 誠：環境物理学と熱物理；熱測定 Vol .32, No. 2（2007）60－67
3) 中川和道・蛯名邦禎・伊藤真之著：環境物理学；裳華房（2004）
4) 京都大学基礎物理学研究所研究会報告：環境物理学―先端境界領域の創出に向けて
―；物性研究 Vol.88, No. 4（2007）471－__

注）講師（加納　誠）は物理学者。大学の同級生。東條さんは先輩である。東條栄喜さんの所感が当日の様相をよく整理し要領がいいので掲載します。日本の物理学者の社会的責任サーキュラー『科学・人間・社会』（責任編集：白鳥紀一）の長い苦難に満ちた輝かしい闘いの歴史をこころに刻んでおくべきである。私は同誌からは計り知れない栄養分をいただいてきたことを記しておきたい。

著訳書
『木質系多孔質炭素材料”ウッドセラミックス”』共著、内田老鶴圃、東京(1996)
『金属の疲労と破壊－破面観察と破損解析－』共訳、内田老鶴圃、東京(1999)
『教養環境学』共著、エースプランニング㈱、東京(2000)
『エコマテリアル学––基礎と応用』共著、日科技連出版、東京(2002)
『時間の不思議』監修（日本図書館協会選定図書）東京図書(2005)
J. ハート『環境問題の数理科学入門』共訳、丸善出版(2012)

●第 72 回(03/14)：中野亜里「「戦後」40 年のベトナム―「社会主義的市場経済」が直面する課題」

「ベトナム」という意味的世界
Ⅰ　ベトナム人をどう見るか（日本人の視線、日本で究明されなかった問題、ベトナム戦争の「戦後」、現在の位相）
Ⅱ　ベトナムが直面している課題（「工業化・近代化」の意味？　：科学技術信仰、「環境問題＝公害」という理解、公共性の欠陥：東日本大震災と在京ベトナム大使館→自分と家族の利益が基本、持続的発展に必要な環境ガバナンス：ボーキサイト開発の事例）
おわりに―意識改革の困難さ。

2015 年はベトナム戦争終結後 40 年目にあたる。市場経済に移行後、めざましい発展を誇るベトナムだが、この国がなぜ今のような姿になったのか、今どのような問題を抱えているのか、日本ではあまり知られていない。講演は、前半でベトナム戦争終結後に何があったのか、なぜドイモイ（刷新）路線に至ったのかを解説し、後半で大規模資源開発の具体例に沿って、現在のベトナムが直面している課題を考察する。

注）講師（中野亜里）は国際政治（ベトナム政治）学者。

ベトナム反戦運動世代は 1975 年 4 月 30 日のベトナム戦争終結の時点で「思考が停止している」と、厳しく講師（中野亜里）は批判している。革命後のベトナム政治はベトナムの民主化などとはほど遠く、共産党一党独裁による人権侵害と弾圧と汚職・腐敗が続き、権力中枢は革命後もまったく歴史的総括を行っていないという。

この国の政治・経済・文化・思想など、あらゆる側面から冷静に分析してきた国際政治学者（ベトナム政治）の中野さんは、その詳細を明らかにし批判する。しかし、あくまでもどんなに時間がかかろうとも「多元的民主主義体制」の構築を希求すべきだと主張する。その語りと文体にはベトナム民族に対する温かいまなざしが見える。

実はベトナム反戦運動世代の私には、ベトナムの戦後の在りようは大変に気になることであったが、この講演でその生々しい負の現実を知り逆に、ふん切りがついたというのが、正直なことろだ。だからと言って、日本のベトナム反戦運動は正義の闘いであったことにはかわりはない。いつの時代でも人間は国際政治の渦にほんろうされ生きていくしかないのであろうか。

著訳書

小高泰 著『ベトナム人民軍隊―知られざる素顔と奇跡』暁印書館、2006 年
中野亜里編著『ベトナム戦争の「戦後」』めこん、2005 年
中野亜里著『現代ベトナムの政治と外交』暁印書館、2006 年
『ベトナムの人権　多元的民主化の可能性』福村出版、2009 年
「ベトナムにおける党-国家と市民社会の関係性」現代ベトナムの国家と社会』明石書店、2011 年
「大規模開発をめぐるガバナンスの諸問題―ボーキサイト開発の事例から原発建設計画を問う」『原発輸出の欺瞞』明石書店、2015 年
タイン・ティン著・中川明子（中野亜里）訳
『ベトナム革命の内幕』めこん、1997 年
『ベトナム革命の素顔』めこん、2002 年
チュオン・ニュー・タン著・吉本晋一郎訳『ベトコン・メモワール』原書房、1986 年
牧久 著『サイゴンの火炎樹　もうひとつのベトナム戦争』ウェッジ、2009 年
フイ・ドック（中野亜里訳）『Bên Thắng Cuộc：ベトナム：勝利の裏側』めこん、2015 年。

●第73回(06/06)：竹中英俊「中江丑吉―市塵の思考者について」

中江丑吉（1889.8.14－1942.8.3）は、中江兆民の長男として大阪に生まれ、1913 年に東京帝大法科大学政治学科を卒業後、翌年8 月に袁世凱の憲法制定顧問となった有賀長雄博士の助手として北京へ。15 年夏にいったん日本に帰り、数ヶ月後に再び中国に渡り30 年にわたる北京での生活を始める。1919 年五四運動のさい（日本に来た時に兆民の家に世話になったことのある中国高官の）曹汝霖・章宗祥を救い、その前後から独学で中国古代学を研究。日本共産党の片山潜や佐野学をかくまい、中国共産党員の鈴江言一の援助はするが、自らは、中国古典についての研究をするとともに、カント、ヘーゲル、マルクスやウェーバーを原書で精読する日々を送った。

1937 年蘆溝橋事件を「世界戦争の序曲」と断定し、幼馴染の関東軍参謀今田新太郎中佐に拡大防止を勧告。1941 年12 月の太平洋戦争開戦直後、日独の枢軸側の必敗を予見し、北京の憲兵隊には「聖戦を白眼視するスネモノ」とみなされた。肺結核で日本に戻り、福岡の九州大学病院で1942 年8 月死去。墓は青山墓地。北京の日本人墓地に分骨。没後に『中国古代政治思想』（岩波書店）、『中江丑吉書簡集』（みすず書房）が刊行される。また、丑吉を伝える最も優れたものとして鈴木正・阪谷芳直編『中江丑吉の人間像 兆民を継ぐもの』（風媒社）がある。

注）講師（竹中英俊）は編集者。実は竹中講演が決まった数ヶ月ほど前から、中江丑吉関係のほとんどの書物を手当たりしだい入手し読み込みに追われた。そして丑吉の学問姿勢に大いに共鳴し、昔から日課とするラジオ体操のごとく、原典音読を毎日実践し、『資本論』と『純粋理性批判』の完読を果たした。

しかし苦しい日々だったが、それをやり遂げた充実感は爽やかなる大きな収穫だった。在野で学ぶ人間には、西欧の書物を原典で繰り返し読み、その一方で古代中国の政治思想の研究に専念し、いかなる社会的な評価も名声も求めなかった丑吉の学問的スタンスは、学ぶべきことが大きく、身が引き締まる思いをした。講師（竹中さん）の関心事が、私を変えたのである。これを実践する日々は至福のときであったが、まさに実践的な在野学の無謀なる冒険以外のなにものでもない。

●第74回(10/24)：川村伸秀「「山口人類学―門前の小僧」の弁」

2013年3月に亡くなった文化人類学者の山口昌男は、人類学という学問の枠を越えて、文学・演劇・美術などのさまざまなジャンルの人々に影響を与えた。私もまた、若き日に山口さんの本を読み、大きな影響を受けた一人である。

晩年の10年間、縁あって私は編集者として山口さんと密に接することができ、何冊かの

山口さんの本の編集に携わることができた。
更に先般、遺稿を整理して『エノケンと菊谷栄』（晶文社）を出したのに続き、病いに倒れる前まで、山口さんに自伝的なお話を聞き続けていた『回想の人類学』（同社）も漸くまとめることができた。これを機に、改めて山口昌男の魅力とは何かについて考えてみたい。

参考資料

山口昌男略歴　於：藤沢市労働会館　2015.10.24　川村伸秀作成

1931年（0歳）　8月20日（18日）　北海道網走郡美幌町に生まれる
1955年（24歳）　3月　東大文学部国史学科卒、4月　麻布学園で日本史を教える
1957年（26歳）　都立大学大学院で社会人類学専攻、教授に岡正雄、馬淵東一、古野清人、西村朝日太郎、松平斉光などがいた（この年、コルネルウス・アウエハントに会う）
1960年（29歳）　3月　都立大修士課程修了、修論「アフリカ王権研究序説」4月　博士課程に進む　国際基督教大学（ICU）のウイリアム・ニューエルの非常勤助手となる
1963年（32歳）　10月　アフリカ、イバダン大学社会学で講師を務めつつジュクン族を調査
1965年（34歳）　10月　帰国、11月　東京外大外国語学部教師
1966年（35歳）　同大アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）アフリカ部門講師、11月　アフリカ、ナイジェリア調査（67年、AA研助教授）
1968年（37歳）　3月　帰国（途中でパリに立ち寄る）、10月　埼玉大学で石田英一郎の代講として、半年間「人類学思想史」を講義（このときの学生に小松和彦氏がいる）
1969年（38歳）　2月　現代人の思想シリーズで『未開と文明』を編集、9月　エチオピア調査
1970年（39歳）　3月　帰国、11月　ナンテール（パリ第10分校）客員教授として「政治の象徴人類学」を半年間講義。
1971年（40歳）　1月　『アフリカの神話的世界』、3月『人類学的思考』、7月『本の神話学』、9月　パリ高等研究院客員教授
1972年（41歳）　1月　短期間のナイジェリア調査、5月　帰国
1973年（42歳）　6月　AA研教授
1974年（43歳）　7月　『歴史・祝祭・神話』、8月　東インドネシア調査（ブル島、チモール島、フローレス島）
1975年（44歳）　5月『文化と両義性』、6月『道化の民俗学』『道化的世界』、10月　帰国
1977年（44歳）　9月　メキシコ大学院大学客員教授、11月『知の祝祭』
1978年（45歳）　4月　『知の遠近法』、9月　帰国
1979年（46歳）　3月　ペルー、リマ大学客員教授、7月　帰国、9月　フィラデルフィア、ペンシルヴェニア大学客員教授
1980年（47歳）　3月　帰国、4月『20世紀の知的冒険』、7月『道化の宇宙』
1981年（48歳）　8月　筑波大学で「見世物と民衆娯楽の人類学」を開催。
1983年（50歳）　1月　カリブ海諸国調査、3月　帰国、6月　『文化の詩学（1）』、7月　『文化の詩学

（2）』、11月 スリナムで調査

1984年（51歳） 2月 帰国、4月 日本民族学会会長、12月 磯崎新、大江健三郎、大岡信、武満徹、中村雄二郎らと『季刊へるめす』創刊 ＊この年、国際記号学会副会長

1989年（58歳） 4月 AA研所長、12月『知の即興空間』

1991年（60歳） 10月 テニス山口組の合宿で福島県昭和村の喰丸小学校と出会う

1992年（61歳） 8月 喰丸小学校を使って喰丸文化再学習センターを開所

1994年（63歳） 3月 AA研を定年退職、4月 静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授

1995年（64歳） 3月『「挫折」の昭和史』、7月『「敗者」の精神史』

1997年（66歳） 4月 札幌大学文化学部部長

1999年（68歳） 4月 札幌大学・札幌女子短期大学部学長（～2003年3月）

2000年（69歳） 2月『敗者学のすすめ』

2001年（70歳） 1月『内田魯庵山脈――〈失われた日本人〉発掘』、9月『山口昌男山脈』

2002年（71歳） 7月『山口昌男山脈 第1号』

2003年（72歳） 5月『山口昌男ラビリンス』

2008年（77歳） 10月『本の狩人――読書年代記』

2013 年（82 歳） 3 月 死去__

注）川村伸秀さん（編集者、文筆業）といると、不思議に精神が落ち着く。肩の荷がおりる。「俺が一番」などと無神経なことは言わない。他者をむやみに批判しない。自慢もしない。たんたんと赤裸々に人間模様を語り描いていく。山口昌男ご本人以上に、善悪を含め、まるごと知り尽くす。忘れもしない。この当時、山口の書物を読み、いろいろ矢継ぎ早に質問すると、すぐさま瞬時に明快な解答が帰ってくる。川村さんはやはり文人なのだ。

編著書

・川村伸秀『坪井正五郎―日本で最初の人類学者』（弘文堂、2013 年）

・真島一郎・川村伸秀［編］『山口昌男　人類学的思考の沃野』（東京外国語大学出版会、2014 年 10 月 30 日）

編集本

・『敗者学のすす』（平凡社、2000）、『はじだしの文法―敗者学をめぐって』（平凡社、2001）

・『山口昌男ラビリンス』（国書刊行会、2003）、『本の狩人―読書年代記』（右文書院、2008）

・山口昌男監修「知の自由人叢書」（全 5 巻、国書刊行会、2005-07）

・山口昌男の個人雑誌『山口昌男山』（全 5 巻、けいめい出版・国書刊行会、2002-05）

・山口昌男『回想の人類学』（晶文社、2015）

・山口昌男『エノケンと菊谷　栄―昭和精神史の匿れた水脈』（晶文社、2015）

●第 75 回(12/05)：柿原　泰「放射線被曝の歴史を問い直す―広島・長崎の原爆調査から福島県「県民健康調査」への道筋

Ⅰ　放射線被曝の歴史（X 線など初期の利用、医療、原爆開発、核実験、原子力、労働者の被曝、原発事故）・福島県「県民健康調査」検討委員会 第 21 回（2015.11.30）
・ICRP 基本勧告における防護基準の変遷　・「ABCC 神話」・ 調査するということ
Ⅱ原爆調査の歴史　「ABCC 神話」Ⅲ福島県「県民健康調査」へ（県民健康管理調査のはじまり、福島県「県民健康管理調査」の問題点

1945 年 8 月、米軍による広島・長崎への原爆投下後、日本側の、続いて米軍による調査が始まり、占領下には原爆被爆者の継続的調査を日米で行なう ABCC－予研（・原子爆弾影響研究所）体制が作られた。この調査は放射線影響研究所（放影研）に引き継がれ、現在もなお続けられている。ABCC に対しては、これまでさまざまな批判もなされてきたが、あらためて ABCC とは何だったのか、歴史的に捉え直したい。そして、現在行われている福島県での「県民健康調査」にはどのような問題点があるのかも取り上げ、原爆調査の歴史、放射線被曝の歴史について、歴史的視点と福島後の現在的視点を交錯させて考えてみたい

参考文献
●日本学術振興会　科学研究費補助金研究成果報告書『原爆調査の歴史を問い直す』（NPO 法人市民科学研究室・低線量被曝研究会、2011 年 3 月）

注）講師（柿原泰）は科学史家。広島・長崎の原爆被爆の歴史調査の問題から福島第一原発事故にともなう放射能被曝による重大な現実的事態までに通底する国家権力の政策等々を含め、いま福島の放射能汚染による健康問題で何が起こっているのかをお話をいただいた。

<u>著書</u>
共著書
・『原爆調査の歴史を問い直す』科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書（研究代表者・柿原泰）（市民科学研究室・低線量被曝研究会、2011 年 3 月）。
・『遺伝子技術の社会学』柘植あづみ・加藤秀一編（文化書房博文社、2007 年 9 月）[「遺伝子組み換えの科学技術と倫理」、133-138 頁を執筆]。
・『工部省とその時代』鈴木淳編（山川出版社、2002 年 11 月）[3 章「工部省の技術者養成―電信の事例を中心として―」、57-82 頁を執筆]。
・『科学技術時代への処方箋』調麻佐志・川﨑勝編（北樹出版、1997 年 4 月）[第 3 章「高等教育機関と研究者」、44-59 頁を執筆]。

事典等項目執筆
・『日本産業技術史事典』日本産業技術史学会編（思文閣出版、2007 年 7 月）[「ウィーン万国博覧会」の項目執筆]。
・『スーパーニッポニカ 2005』DVD-ROM 版（小学館、2005 年）[「米本昌平」の項目執筆]。
・『日本交通史辞典』丸山雍成・小風秀雅・中村尚史編（吉川弘文館、2003 年 9 月）[「エアトン」「沖牙太郎」「工部大学校」「志田林三郎」「電信修技学校」「電話」「中野初子」の項目執筆]。
・『情報学事典』北川高嗣・須藤修・西垣通・浜田純一・吉見俊哉・米本昌平編（弘文堂、2002 年 6 月）[「モース」「ミンスキー」の項目執筆]。
・『現代思想のキーワード』、『現代思想』第 28 巻第 3 号（2000 年 2 月）[「STS」の項目執筆]。
・『社会学文献事典』見田宗介・上野千鶴子・内田隆三・佐藤健二・吉見俊哉・大澤真幸編（弘文堂、1998 年 1 月）[「バナール『科学の社会的機能』」の項目執筆]。
翻訳書
（共訳）
・『科学・技術・倫理百科事典』カール・ミッチャム編、科学・技術・倫理百科事典翻訳編集委員会監訳（丸善出版、2012 年 1 月）[「技術の社会的構成」「国際放射線防護委員会」「[米国]原子力規制委員会」「放射線」の項目を訳出]。
・『科学大博物館』ロバート・バッド、デボラ・ワーナー編、梶雅範・橋本毅彦・廣野喜幸監訳（朝倉書店、2005 年 3 月）[「アナログ式コンピューター」「デジタル式コンピューター」「電流計」「ノモグラム」「プラニメーター」の項目を訳出]。
・『現代社会と知の創造　ーモード論とは何かー』マイケル・ギボンズ編著、小林信一監訳（丸善、1997 年 8 月）[第 4 章「人文科学の場合」、165-197 頁を訳出]。

2016 年

●第 76 回(01/23)：水沢不二夫「戦前新聞・雑誌の発禁の事例報告―『湘友会誌』など

戦前の内務省による新聞・雑誌検閲の実際を資料によって報告します。資料はＧＨＱが内務省より押収し、現在は米国の議会図書館の所蔵となっている「検閲和雑誌」のコレクションを主に用います。検閲官が傍線を引き、「不問」や「発禁」などの記号を付けた検閲原本です。たとえば湘南地域に関わる物として湘南中学（現、湘南高校）の同窓会誌（『湘友会誌』）の発禁処分の過程などを紹介いたします。主に文学作

品の発禁についての報告です。発禁処分は〈風俗壊乱〉によるものと〈安寧秩序壊乱〉によるものとがありますが、主に後者についてご紹介いたします。

注）講師（水沢不二夫）は日本近代文学者。懇話会の歴史上、はじめて日本近代文学者にお話をいただいた。戦前の検閲制度がどのように実施されていたのかを具体的事例を挙げて解説してくださった。その戦前の検閲制度は今現実のこととして復活しつつある。密告制度だ。

主要論文

・「森鴎外『山椒大夫』の治者」一九九四(平 六)年四月一〇日『日本文学』日本文学協会 P33〜P41

・「『三四郎』の〈色〉と〈水〉と〈迷羊〉」一九九五(平 七)年一月二五日『国文学言語と文芸』国文学言語と文芸の会 P75〜P95、111 号

・「森鴎外の歴史小説と検閲」二〇〇三(平 一五)年三月二四日『湘南文学』東海大学日本文学会

・「新美南吉「権狐」論」二〇〇九(平 二一)年三月二四日『湘南文学』東海大学日本文学会

・「検閲官生悦住求馬小伝」二〇一三(平 二五)年三月二四日『湘南文学』東海大学日本文学会

●第 77 回(03/27)：湯浅一郎「海の放射線汚染を考える―福島事態を文明と欲望を問い直す契機に」

１．はじめに：自己紹介、ヘルディナント・フォン・リヒトホーヘンの概念―3.11 以降、最も気になること。

２．海洋への主な放射能汚染：核兵器開発と大気圏核爆発、平時の再処理工場などによる汚染、原発事故（福島、チェルノブイリ）、原子力推進艦―特に横須賀配置の原子力空母「ロナルド・レーガン」、海洋投棄など。

３．世界三大漁場を汚染した福島事故―事故発生直後に放出された膨大な放射性は広く分散：放射能の放出量と４つのルート、海洋の放射能汚染の実態、今も続く「放射能汚染水」処理の問題、河川・湖沼の底質・生物汚染と河川・地下水による海への輸送、生物への生理的遺伝的影響（複層的な海洋汚染）

４．原発再稼働と海：防災計画の策定と当事者性、川内原発で大事故が起きたときの海への影響は？　日本列島周辺はどこも優れた漁場、環境汚染の影響が及ぶ範囲の住民はす

べて当事者、国政の中心に生物多様性基本法や環境社会形成推進基本法を、

５．おわりに―海のうめき声を聞け

シルクロードの命名で知られるドイツの地理学者リヒトホーフェンが、1868 年に瀬戸内海を通り、その風景と人の営みを絶賛した。「広い区域に亙る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであらう。《中略》かくも長い間保たれて来たこの状態が今後も長く続かんことを私は祈る。その最大の敵は、文明と以前知らなかった欲望の出現とである」。それから約７０年後（1938 年）、核分裂とそれに伴う膨大なエネルギーの放出が発見され、核兵器と核発電（原発）が作り出され、社会に定着していった。リヒトホーフェンの懸念から一世紀と少しを経た 1971 年 3 月、福島第１原発が稼動し、40 年後の 2011 年 3 月 11 日、メルトダウンを起こした。核分裂生成物（「死の灰」）製造工場とも言うべきものが、大地と世界三大漁場の一つを汚染した。講演では、福島事態による海・川・湖の放射能汚染を詳細に見つめることを通じて、人類による海の放射能汚染を全体として捉えなおしてみたい。人類は、自然は無尽蔵であると勘違いし、海をゴミ捨て場とみなしてきた思想を改め、産業革命以降の人類の歩みを省察すべきである。＜これ以上、海を毒壺にするな＞という海のうめき声に真摯に向き合い、現代文明の脆弱な社会構造を振り出しからみ直すべきことを提起する

注）講師（湯浅一郎）は海洋物理学者。ピースデポ副代表、環瀬戸内海会議副代表。1949 年東京生まれ。東北大理学部卒。専門は海洋物理学、海洋環境学。2009 年まで瀬戸内海の環境汚染問題に取り組む。1971 年からの女川原発をはじめ芸南火電、海洋開発など多くの公害反対運動に関わる。84 年の核トマホーク配備反対を契機に平和運動に関わり、ピースリンク広島・呉・岩国（89 年）、核兵器廃絶をめざすヒロシマの会（2001 年）結成に参加。2008 年 2 月～2015 年 3 月までＮＰＯ法人ピースデポ代表。

湯浅一郎　著作リスト

① 1984.12 『巨大火電の環境汚染』、広島県芸南地区火電阻止連絡協議会編、技術と人間。

② 1984.12 『恐るべきエネルギー公害』、天草環境会議実行委員会編、東研出版。「石炭火電の農業への影響」。

③ 1985.9 講座 現代と変革４『現代科学技術と社会変革』、新地平社。「「開発」はなにをもたらしたか」。

④ 1986.12 『太平洋を非核の海に』、反核 1000 人委員会編、績文堂出版。「百年の歴史の中で考える―呉」。

⑤ 1992.5 『松からの警告 ―松枯れ・大気汚染・農薬―』、松枯れ空散反対広島県民会議編、技術と人間。

⑥ 1995.7 『平和都市ヒロシを問う』、技術と人間（単著）。

⑦ 1997.10 『これが米軍への「思いやり予算」だ』、派兵チェック編集委員会編、社会評論社。［岩国・秋月］「安保は一時、藻場は永遠」。

⑧ 1997.12 『地球環境をこわす石炭火電』、湯浅一郎・松田宏明、技術と人間(共著)。

⑨ 2000.5 『住民が見た瀬戸内海』、環瀬戸内海会議編、技術と人間。

「藻場・干潟の消滅を伴う埋め立て」。
⑩ 2000.7　『安全な暮らし方辞典』、日本消費者連盟編、緑風出版。
「石炭火力発電」
⑪　2004.3 『生きてきた瀬戸内海 -瀬戸内法 30 年-』、瀬戸内海環境保全協会編。「瀬戸内海はどう変わったのか？」
⑫　2005.8　『科学の進歩とはなにか』、第三書館（単著）。
⑬　2007.5　『米軍再編と前線基地・日本』、木村朗編、凱風社。「米軍再編下のヒロシマの基地群」。
⑭　2009.3　『瀬戸内海の小動物、その変遷』、湯浅一郎、産業技術総合研究所中国センター（非売品）。
⑮　2010.3　『里山・里海；日本の社会生態学的生産ランドスケープ　瀬戸内海の経験と教訓　－里海としての瀬戸内海―』、国際連合大学。
⑯　2010.6　『安保改訂 50 年』、民主主義科学者協会法律部会編、日本評論社。「情報公開から見た安保体制」。
⑰　2010.7　『東アジアの歴史認識と平和をつくる力』、「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム東京会議編、日本評論社。第２章「東アジアの国際緊張と平和運動」。
⑱　2012.6　『海の放射能汚染』、緑風出版（単著）。
⑲　2013.3　『終わらないイラク戦争』（勉誠出版）。
「イラク戦争と在日米軍・自衛隊」。
⑳　2014.7　『海・河・湖の放射能汚染』、緑風出版（単著）。
21　2015. 7　『核時代の神話と虚像』、木村朗・高橋博子編著、 明石書店。
11 章「米国の新核戦略と日本の選択」。
22　2016.7　『原発再稼働と海』、緑風出版（単著）。

＊１　下線が単著、ないし共著。
＊２　その他は、単行本の中の一部を担当。ただし、①，⑤、⑨は編集担当。
＊３　①～③は、「宇田隆」名で。

●第 78 回(05/21)：林衛「東日本大震災・津波被災から何をみいだし、学べばよいのか一大川小学校の事例を中心に一」

自然災害には必ず「人災的側面」がある。自然の特性がわかっていながら，それに反した社会を築いていると，自然の法則どおりに災害が招かれるのである。明治の濃尾地震，大正関東地震のころから，この構造的現象の存在への言及がある。「天災は忘れたころにやってくる」（寺田寅彦）のは，自然災害をもたらす自然現象の頻度が小さいからではなく，知識人らがこの人災的側面から目をそむけ，未曾有だ、前代未聞だとして，災害の本質を忘れようと努めるからなのである。学制発布以来の最悪の被害をもたらした石巻市立大川小学校の津波被災では，学校にいた大川小児童 74 名，同教員 10 名，迎えにきていた大川中生徒 3 名，人数が把握できていない大川地区住人が犠牲となった。現場生存者は児童 4 名，教員 1 名であるが，教頭，教務主任，安全主任の少なくとも 3 名の教員，高学年男子，迎えにきた保護者らの何人もが，すぐ裏の山への避難を提案していた。

昭和三陸大津波の直後に北上川付け替えが完了し，食糧増産を目的とする国策のもと，沖積平野の土地利用，水田改良が進み，いわば「稔り豊かな危険地帯」が形成されていた。

石巻市のハザードマップは，大津波が河口から 3.5km も遡上し，大川小学校まで約 500m に迫る想定を示していた。その想定のもととなるのはマグニチュード 8 クラスの地震であり，2 分半もの強い揺れが続くそれ以上の地震（マグニチュード 9 と確定）では大川小浸水の危険性は，想定のやや外にある，想定から想定可能なものであったのだ。大川小事故検証委員会は，学校事故検証を文科省・宮城県教委が指導・監視したため，遺族が集めた事実・論点を取りこぼし失敗に終わった。未曾有主義，前代未聞主義に陥らずに，災害を記録し伝承する方法と意義について，参加者で議論したい。

注）講師（林衛）は元来科学ジャーナリスト（『科学』編集者）。地球の歴史を研究したあと，岩波書店「科学」編集者となった 1 年目に阪神・淡路大震災に直面。世界で最も進んでいた関西地方の活断層研究が中学校理科教科書に紹介されるほどであったにもかかわらず，災害軽減に役立たなかった現実に直面，科学者の科学離れ問題に取り組む結果となる。シンクタンク勤務，フリーランス，NPO 起業などを経て，富山大学に拾われる。批判的思考力や科学リテラシーがあっても，抑制され生かされない問題の構造解明と解決の問題を探究中。

著作

林 衛（文責）：大震災以後，まえがき，『科学』編集部編・室崎益輝・藤田和夫ほか著，岩波書店（1998）III-vi

左巻健男・検定外中学校理科教科書をつくる会（分担執筆・著者多数）：新しい科学の教科書−現代人のための中学理科 III，文一総合出版（2003）

並木雅俊・林 衛文（分担執筆）：ノーベル賞 100 年のあゆみ・物理学賞，戎崎俊一監修，ポプラ社（2003）

林衛・西村尚子：「サイエンス・ライティング 2−ストーリーの立て方・専門用語の取り回し」，千葉和義・仲矢史雄・真島秀行編著，サイエンス コミュニケーション−科学を伝える 5 つの技法，日本評論社（2007）90-106

林 衛：総合科学雑誌による公共圏構築，梶 雅範ほか共編，科学技術コミュニケーション入門—科学・技術の現場と社会をつなぐ，培風館（2009）167-170

林 衛：放射線被曝情報の誤解と混乱は，なぜ生じたか？，日本科学技術ジャーナリスト会議，4 つの「原発事故調」を比較・検証する−福島原発事故 13 のなぜ？，水曜社（2012）

Komiya, T., Maruyama, S., Nohda, S., Masuda, T., Hayashi, M., and Okamoto, S., 1999, Plate tectonics at 3.8 -3.7 Ga; Field evidence from the Isua accretionary complex, southern West Greenland. Jour. Geol. 107: 515-554.

Hayashi, M., Komiya, T., Nakamura, Y., and Maruyama, S., 2000, Archean regional metamorphism of the Isua supracrustal belt, southern West Greenland: implications for a driving force of Archean plate tectonics: International Geology Review, v. 42, p. 1055-1115.

Komiya, T., Hayashi, M., Maruyama, S. and Yurimoto, S. 2002, Intermediate-P/T type Archean metamorphism of the Isua supracrustal belt: Implication for secular change of geothermal gradients at subduction zones and for Archean plate tectonics: American Journal of Science, v. 302, p. 806-826

林 衛：低線量被曝問題はなぜ混乱が続くのか―復興をさまたげる政府の放射線安全論，市民研通信，2012 年 3 月号電子版
http://archives.shiminkagaku.org/archives/2012/03/post-286.html

林 衛：放射線教育・リテラシーはこれでよいのか―共有すべき原点に立ち返ろう，市民研通信，2011 年 10 号電子版
http://archives.shiminkagaku.org/archives/csijnewsletter_010_hayashi.pdf

林 衛:「御用ジャーナリズム」イメージはどこからきたのか（その 1，2），市民研通信，2011 年 8 号，9 号電子版 http://archives.shiminkagaku.org/archives/2011/09/2-6.html

林 衛：コレステロール大論争―「動脈硬化学会 VS 脂質栄養学会」論点の腑分け，メディカルバイオ（オーム社）3 月号（2011）73−78 http://hdl.handle.net/10110/9282

林 衛・片岡 弘・伏黒 昇・金森 寛・吉村敏章：3 年目を迎えた「理科支援員等配置事業」―県教委・大学連携事業の成果と課題，人間発達科学部紀要，4（2）（2010）247-261
http://hdl.handle.net/10110/3326

林 衛：玉田実践を科学リテラシー育成に生かそう，理科教室 1 月号（2010）22-29

林 衛：大学のゼミで「玉田泰太郎実践」を輪読・分析，理科教室 11 月号（2009）74-80

林 衛・長谷部真誠・谷川寛和・相川恵子・下山真理香・市瀬和義：人間の認識をどう育むか―人間発達科学部「ゼミナール」での玉田泰太郎小学校理科実践の分析から，富山大学人間発達科

林 衛：「大川小事故検証委員会はなぜ混迷を続けるのか（その２）」『市民兼通信』2014.5

林 衛：「大川小事故検証委員会はどこで道をまちがえたのか：科学の誤用による人権侵害」『富山大学学術情報リポジトリ』2014.11
林 衛：語られないものは残らない：大川小事故検証委員会失敗原因の比較再検討」『富山大学学術情報リポジトリ』2015.9
林 衛：「有権者教育のための理科知識・批判的思考力：石巻市立大川小学校津波被災の原因」『富山大学学術情報リポジトリ』2015.10.

●第 79 回(07/30)：山脇直司「経済学と実存主義から公共哲学、統合学、共生科学へ―我が知的遍歴ないし発展と普遍的課題」

私の知的遍歴は 1967 年に始まる。それは貧困問題解決のための経済学研究と幼児期からの形而上学的関心から発した実存主義への傾倒に始まり、予期せぬ形で起こった大学紛争（闘争）を経て、本格的な哲学研究への転向、ミュンヘン大学への留学と学問論に関する学位論文という形でまず形成された。

この時期に形成され、現在まで至る私の学問思想は、

1. 哲学は諸学問を横断する学問であると同時に、人間の死生観にかかわる根源的な学問であること、
2. 自然科学的な方法論と学問する主体、社会科学的な方法論と学問する主体、哲学の方法と哲学する主体は、相互に区別されながらも関連し合うこと、の二つである

その後、1988 年 4 月から 2013 年 3 月まで東大駒場キャンパスで、学部学生、大学院生を相手に、社会思想史、社会哲学（後に公共哲学）、相関社会科学方法論などの授業を受け持ち、いくつかの単著を出しながら、知の遍歴は続き、今日に至っているが、今回の発表では、その遍歴ないし発展を紹介しながら、私が考える現代の普遍的な課題を提示して、参加者の方々と討論していきたい。

１．若き頃の遍歴:一橋大学時代（1967. 4~1972. 3）
・上智大学院時代（1973. 4~1977. 2）
・ミュンヘン大学時代（1978. 3~1982. 3）
・過渡期の東海大学教員時代（1982. 4~1986. 3）
・上智大学教員時代（1986. 4~1988. 3）
２．東京大学の四半世紀とその後
・公共哲学以前の知的発展（1988, 4. ~1999. 12）

・独自の公共哲学の展開（2000.1~2013.3）
・公共哲学とは何か、諸個人と公共（社会）の関係、グローカル公共哲学とは何か、公共哲学の担い手、ポスト専門化時代の学として公共哲学の三重の観点・方法論、WA（和、輪）の思想と Justice(正義)の両立、
３．東大退職後の活動と現在の問題意識

注）講師（山脇直司）は公共哲学者。懇話会の「講演レジュメ自体」が山脇直司さんの学問人生を端的に表明していて実にわかりやすく、主宰者としても全力を投入でき、山脇公共哲学の世界を覗くことができた。ちなみに上記本はすべて完読した。これも至福の時間だった。そして何よりもその講演では誠実な真剣勝負の議論が展開され、参加者からは多くの好意的な所感が寄せられた。

著書
Die Kontroverse zwischen Kritischem Rationalismus und Transzendentaler Sprachpragmatik、Anton Hain 1983 （『批判的合理主義と超越論的プラグマティックとの論争』、博士論文）
『ヨーロッパ社会思想史』（東大出版会 1992）
『包括的社会哲学』（東大出版会 1993）
『新社会哲学宣言』（創文社 1999）
『経済の倫理学』（丸善、2002）
『公共哲学とは何か』（ちくま新書 2004）
『社会福祉思想の革新』（かわさき市民アカデミー2005）
『グローカル公共哲学』（東大出版会 2008）
『社会とどうかかわるか』（岩波ジュニア新書 2008）
『社会思想史を学ぶ』（ちくま新書 2009）
『公共哲学からの応答：3.11 の衝撃の後で』（筑摩選書 2011）
Glocal Public Philosophy---Toward Peaceful and Just Societies in the Age of Globalization (Lit Verlag 2016) など

編著 『科学・技術と社会倫理：その統合的思考を探る』（東大出版会 2015）など
訳書 ローベルト・シュペーマンの『進化論の基盤を問う：目的論の歴史と復権』（東海大学出版会、1986）
『原子力時代の驕り：後は野となれ山となれでメルトダウン』（知泉書館、2012）
『幸福と仁愛：生の自己実現と他者の地平』（東大出版会、2015）など

編集後記

ただただすべての参加者に感謝と御礼を申し上げるだけです。
未熟な編集のことゆえ、構成や文体に不統一な箇所がたくさんあります。
どうか、ご容赦をお願いします。2016 年 10 月 30 日

猪野修治（湘南科学史懇話会・代表）　〒242-0023 大和市渋谷3-4-1
TEL/FAX 046-269-8210 email shujiino@js6.so-net.ne.jp
湘南科学史懇話会 http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm